

を上野の一角にあの音樂學校を建て得たではないか〔〕當時何人か現存する様な奏樂堂の必要を認めたものがあらうか、何人が國立音樂學校建設の急務なるを悟つた人があらうか、然るに伊澤氏も其熱烈なる力を捧てよく此事をなし遂げたではないか。

音樂的空氣の現今程に濃厚にならなかつた時代に於て、湯原元一氏は音樂學校々舍の増築を行ひ得たではないか、然るに音樂の必要が如斯高く叫ばれ、其後援者が如此多くなつて來た今日に於て音樂學校の擴張をなし得ないのは何故であらうか、各大學が競つて外國の碩儒を招聘して其指導を求め、或は多くの專問學校が其昇格に努力して煥ざる今日に於て音樂學校のみ何故に眠つて居るのであらうか、シヨルツ氏去て久しくこれに代はるべき講習をすら有ち得なかつた今の東京音樂學校の態度は實に一種の謎である、二ツに裂け倒れんとする可能性を有つたと噂さるゝ危険な奏樂堂を擁して更に顧慮する所なき學校當局者はよもや上野の森の中に長夜の眠を貪て居るのであるまい。村上校長にして眞に樂界の爲にするの志あらば、何故に其學に忠なるの力を此方面に移して大に音樂學校の擴張を企てないのであるか、氏にして此が爲に蹴起するならば、満天下の好樂の士は全力を擧てこれが後援を惜しむものでない事は信じて疑はざる所である。

(「音樂界」第二五八号 大正十四年四月 一頁)

二 昭 和

設備の改善

侯爵徳川頼貞閣下が從來南葵樂堂に据付けてあつた英國製パイプオルガンを取り外し、運搬据付並にこれの容れ場所（奏樂堂正面後方）の模様替修繕工事費とも此度斯道研究用として母校へ寄附されました。その寄附總額實に七萬五千圓であるとのこと。

この休暇中にパイプオルガンの据付と同時に奏樂堂、校長室、生徒監室、教頭室、男女教官室、本館廊下、食堂、應接室、玄關、男女便所等に大修理を施し、塗替工事も終り面目が一新されました。

本館後庭の梅楓の木蔭に十五坪のピンポン室が新設され、新學期とともに同好者の愉快氣な猛練習が始まつてゐます。

校内寄宿舎の下水工事が完成して、大雨の汎濫や蚊蟲襲來の憂がなくなつた。

北西の校庭に約六坪の自働車、車庫が新設されました。

(「同聲會會報」第一四一号 昭和三年十月 四頁)

面目を一新する東京音樂學校

東京音樂學校は來四年度以降二ヶ年繼續豫算八十萬圓にて新築をする事となつた、位置は現在の學校所在地を擴張するか或は全然現地を去つて適當の土地に移轉新築するやも知れない、從來學校騒動に日を暮して居た同校が斯く發展するに至つたのは邦樂科の新設に機縁を有つものである。昨年就任した乘杉校長は東洋一の音樂學校

であり日本唯一の官立音楽學校に日本固有の邦樂科を設けずして洋

樂のみを教授するは不徹底であると感じ昨年邦樂科（能、謡曲、箏曲、淨瑠璃、長唄、常磐津の如き）設置費五萬圓の豫算を議會に提出せんとしたが大藏省の反對にて削除され、勝田文相が閣議に於て復活を試みたるも急を要せずとの理由で通過しなかつた然るに昨年十二月十二日皇后陛下各宮殿下の行啓臺臨を仰ぎ御大禮記念大演奏會を催し洋樂の外に邦樂部の能、謡曲、箏曲、尺八、長唄等を演奏したるに各大臣より或は邦樂反對の大藏省より非常な禮讃があり、成程同校に邦樂科設置は最も必要なりとの折紙を付られたので本年は同科設置の豫算は殆ど通過するといふ確信がついたことに依るもので、夫れが來る五年の四月以後に設置さるゝものとせば現在の腐朽校舎と不潔にして狹隘なる奏樂堂にては不充分なるを以て多年の懸案もあり土地も現在の三千六百坪を六千坪に増し大新築をなすことになつたのである、但し新築は邦樂科の如何に關せす進行する豫定である、尙同校發展の第一着手として來る四月一日より内外教授の增聘もする。（中央）

（『音樂世界』第一卷第二号 昭和四年二月 八四頁）

東京音楽學校の箏曲科を擔當するに當つて
宮城道雄
私は此度東京音楽學校に聘せられる事になりましたが、この事に就ては既に昨年から話のあつた事で、實は私より先輩も澤山あられる事ですから、考へておりましたのですが、折角の葛原さんや學校の高野先生や島崎先生などのおすゝめもありまして、遂に決心して

お引受けする事になりました。

然し官立學校の事ではあるし、學校の方針によく従ひまして、その主意に叶ふ様に致すのですが、之は私共の思つてゐた事を更に進めたもので至極結構な事で、先づ生田流としての古典のもので基礎教育をして行きます、さうして其の手の進みを見て時には新しいものも入りますが、是も中には手の出来る人もありますから順序を経て希望によつてはやりますが、根本は先づ正格な基礎教育を進めて行く事になつております。

從つて多少理論的にもやつて、別に教則本も使ひ追々には五線譜を使用する方法をとる様にもなるでせう、私もその事に就ては腹案をもつております。

ですから組曲も必要に應じてやりますし、兎に角箏曲としての基礎をしつかり作り上げて、教育法としてはそれ出来るだけ箏の深味を知らせて行くつもりでおります。

そこで現在は選科で先づ箏の技術を中心としますが、然し一應入學にその素養の有無、技倆がある人のはその程度などを検定して之を入學試験と致しますが、之は上手下手を見るのでなくタチのよい悪いを見るのですから手ほどき程度の人でも、亦それがなくとも試験は受けられる事になつております、つまり試験と云つても六かしい意味のものではなく音樂に對する能力を見るので、今の處では年齢も制限はなく程度も小學卒業程度となつておりますから、例へば箏がずつと出来る人でも根本教育を受けられる様になりますから範圍は廣いのです。

それに授業は午後三時からですから女學校在學中の入學

出来ますし、又玄人でも素人でもそんな事は入學には更に關はない事になつております。

然し専門とか素人とか區別はせぬが、三年から五年迄の修了期があつて、入つて先づ一年で試験があり、それから後は隨意に受けて三年乃至五年となるので、定員は十二人から十五人位になるのでせうが、一週二三度の事ですから何れも皆私が直接教授に當る事にしております。卒業後は専門家として立ち得る様に致す方針で、そこで組織立った等教育として大いに研究致しておりますが、先づ古典曲で基礎を築いてそこへ特別の教育法で毎日稽古でないから宿題を與へて之には樂譜が必要になつて來ますが、私はあらゆる方法を以て進んで見たいと思ひます。然し之に就ては大方先輩諸氏の御應援も得たいと思つております。(終)

(「三曲」昭和五年四月 一七〇—一八〇頁)

女生徒の洋装

今回時勢に鑑み經濟上風紀衛生上の考慮を拂ひ左の通り女生徒に洋装差支へなしのお布令が出た。

服裝ニ關スル内規

一、女生徒ハ登校ノ際體操服ヲ着用スルコトヲ得。但體操服ニ非ザルモノ之ニ準ズルモノハ左ノ標準ニヨルモノハ着用スル事ヲ得
一、地質並ニ色ハ質素ニシテ地味ナルモノ
一、胸部ハ露出セザルコト
一、裾ハ少クトモ膝迄ヲ被フコト
一、校章ヲ附スルコト

其他詳細ナルコトハ生徒課ニテ承知ノ事。

(「同聲會會報」第一六四号 昭和五年九月 二九頁)

上野音樂學校で女生徒八名を處分

國語講師一名も罷免さる

赤化の魔手伸びて

各大學に浸潤してゐる學生左翼運動は思想界の無風地帶とされてゐた上野の音樂學校にも吹きこんだ、同校本科師範科生八名は昨年九月末から十一月中旬にかけて學校内部で讀書會を組織し寄宿舍でしばしば集會を催し、その背後に國語講師一名が糸をひいてゐたとの疑ひで十四日右講師を免し本科ピアノ科二名は停學あと四名はけん責となつた、うち無期停學の三名は進んで退校しきれど一段落とともに二十八日學内掲示で公表した、學校當局では單に學内の問題として極秘に付してゐるが警視廳特高課でも内偵を開始した

「昨年の二學期私が渡歐中、危險な本を読んだり同志を集めて會合をしたりしたので、他の生徒への影響を恐れこんどやむなく八名の生徒を處分しました、處分はその罪の重い軽いにより異つたがいづれも停學です、しかしそのうち三名は自ら進んで退學を願ひ出了のでそれを認めました、又先生の方は今度のこととに全然關係はありません、もちろん今度の處分に對して責任があつたわけではありませんが都合でやめてもらつたのですこれに對して學校内に不穏な空氣がみなぎつてゐるつて——そんなことは全然ありません、兎に角十四日に處分して既に一週間も経つてゐるのですから」

赤化分子

十六名送局

警視廳では既報の如く二十七日夜地下構内の赤化殘留分子坂本な子外二名を検挙し、これで黨及び同盟の地下壕分會を根絶せしめたので四月十八日に検挙し取調中であつた一味、即ち共産黨關係から驛員津野勇(二五)出札係赤塚まさ子(一九)外八名、共青同盟關係から運轉手相原七藏(二七)朱牟田照子(二〇)外四名都合十六名を治安維持法違反で二十八日送局した、一味のうち八名までは若い女性で女學校出の者が多いことである。

(「東京朝日新聞」昭和七年五月二十九日)

音樂學校當局に望む

牛山充

予が茲に云ふ音樂學校は官私を包括するもので、其藝術的社會的、教育的重要性より見て、東京、東洋、日本、帝國、武藏野及び東京高等音樂學院の六校當局者に要請するところあらんとするものである。

予が茲に取り上げて問題とし、敢て當路者の注意を要求したいと思ふ事は多々あるが、問題の多岐に涉るを避け、特に解決の急を要するもの一二を提げて反省を促したいと思ふ。

第一は學生の實力向上の問題

第二は卒業生就職の問題

である。〔中略〕

東京音樂學校は文部省の直轄する唯一の音樂學校で、我邦に於け

る音樂の最高學府なることは自他共に許すところである。從つて其

教官は各科を通じて一様に我邦に於ける最高標準を跨る技術の所有者たるべきことは論を俟たないのであるが予の見るところを以つてすると必ずしもさうではない。各科の主席教授すら悉く其方面的最高權威者であるとは限らないのであるから、其上立つ教授、助教授の中には若しも「」を知るの明あらば進んで其地位を去る可きものが少からぬ有様である。彼等の多くは獨奏會を開く力がない。内職に専念して自己の藝術的精進を閑却する者が多い。彼等の多くは單に技術の研精を怠るばかりではなく、自己の専門に關係ある内外の書籍を涉獵して內面的に自己の力に教養上の基礎づけをしようとするしない。其思想は極めて低劣、且つ貧弱で、在野の音樂學生に及ばざることの甚だしいものが多い。斯る人々は理想としては悉く清算さるべきであるが、斷然此舉に出で難い事情が其間に伏在してゐるならば、せめて分教場專任に止まらしむべきである。

事實上現在の入學試驗合格者の中には現在の教授助教授の多くの人々よりも優秀な技術の所有者があるので、斯る生徒に對し、技術の劣る教授は何等教へるところがある筈は無い。斯る不合理を除くためには、教授の素質の向上を刻下の急務とする。これは教授の人と實力とを第一とし、他の情實を悉く排して斷行する校長の人事行政上の手腕によつて容易に解決される問題である。

卒業生の實力が向上し、藝術家として世に立つ立派な資格が與へられるならば、本科卒業生が小學校教師となつたり、ジャズソングや、流行小唄歌ひに身を落し、私學出又は民間音樂家の職場を荒らす必要はない。藝術家にもなりきれず、さりとて藝人にもなれない

中間的存在物の製造は一日も早く中止すべきである。〔後略〕

(『音楽世界』第五卷第五号 昭和八年五月 一八〇二五頁)

國粹文相の英斷 音楽にも日本魂

【東京電話】日本精神の大ダンピラを振り翳して先づパマの排撃から美術院改組までやつてのけた松田文相は今度は音樂の畠にて手をのばし兎角洋樂偏重の傾向にある

音樂學校に邦樂部を設置することになつた、尤も東京音樂學校では去る昭和四、五の兩年に選科の中に箏曲(山田流、生田流)長唄(三味線、唄)、能樂謡、仕舞、囃子、大鼓、小鼓の三科を設け講師に吉住小三郎(長唄)、杉本金太郎(三味)、宮城道雄(生田流箏曲)、觀世清久(能樂)、中能島欣一(山田流箏曲)の五氏、教務嘱託に寶生朝太郎、今春惣右衛門、梅若萬三郎等二十余氏を嘱託し神田駿河臺の分教場において(一年から三年まで)約四百の邦樂選科生に邦樂を履修せしめてゐたが、何分にも教授時間は各科とも週三時間以内であり生徒も大部分は一家の主婦や良家の子女で趣味又は職業として長唄等を専修する程度に止まつてゐた、ところが松田文相は豫てから洋樂に對抗して日本音樂を助長普及せしめたい意向をしており乗杉東京音樂學校長もこれと全く同意見だつたので話がトン々拍子に進み從來の選科の中の邦樂三科を昇格せしめて東京音樂學校に別科邦樂部を設置し組織的に邦樂教育を施し天分を發揮せしめて我邦樂の

進歩發達を促すと共に日本精神作興に資せしめることがなつたものである、なほこれと同時に東京音樂學校では洋樂部に別科を設置したい意向もありこの兩者に要する經費一萬八千圓が明年度豫算として要求されてゐるが、文部省は大体これを認めるものと見られしたがめうんど明年度からは邦樂部が別科となつて現講師嘱託の教授、助教授等も出るものと期待される

(『新潟新聞』昭和十年六月二十八日)

音樂學校の大飛躍 ステーデ音樂の尊重へ轉向

トーキー時代の波に乗り數十年間閉ざされてゐた音樂アカデミズムの殿堂、上野の東京音樂學校の扉が開かれて教授偏重の一擲しき込み機械を備へてマイクロフォン藝術、レコード藝術に對する研究を開始した同校では乗杉校長の發案により今まで洋樂科男女生徒に對し日本舞踊、仕舞を課して必修せしめることとなり、近く文部省の承認を得た上規則を改正して實施する意嚮である、從來音樂學校は師範科は勿論本科に於ても音樂教育教授法を必修せしめてゐた關係上やゝもすると音樂教師養成にのみ狂奔努力してステーデ音樂輕視の傾向を呈したため、ゼスチユアの皆無から口だけの聲樂、手先のみの器樂が氾濫してゐたが、トーキーの影響、レコード音樂の盛大はサロン藝術として大衆を遠ざかつてゐた音樂を一氣に大衆の耳に、民衆の慰樂に飛躍進出せしめる一方國境が撤廢されて音樂は國際的に交驛さるゝに至つたので、かつて藤山

一郎を

放校した音楽教師養成所の音楽學校も必然的に教授方針を一變せしめる氣運が醸成され遂に乘杉校長今回の英斷となつたものである、此結果獨逸の音樂學校が裸身體操を行つてゐるのと同様我國の音樂も聲^き或^は器樂のみによらない身體からの音樂、全身のリズムから生れる音樂として再生するわけだが、從來ゼスチュアの貧困を暴露して世界的レベルに大きなハンディキヤップを作つてゐた我樂壇も、眞に日本的である仕舞を日本舞踊から得た日本的ゼスチュアにより必ずや一大飛躍と光明が齎されるものと絶大の期待をよせられてゐる。

(『都新聞』昭和十一年一月二十八日)

「國粹大臣」の遺志遂に實を結ぶ

愈々六月一日を期して實現する

東京音樂學校の邦樂科

國粹大臣として知られた故松田文相が乘杉東京音樂學校校長と計つて邦樂科設置の案をたてたが、不幸實現を見るに至らず急逝、爾來乘杉校長は國粹保存向上の社會的風潮に鑑みて邦樂科設置の重大緊急なことを主張、銳意實現に努力し豫て文部省までその腹案を提出してゐたが、この主張が通り邦樂科設置が愈々六月一日を期して實現する運びとなつた

從來も同校内には明治四十二年創設の歴史を持つ能樂^{はやくわ}科があつて斯界の功勞者故池内信嘉氏指導のもとに多數^{はやしめじん}の名人を出して居り、又神田の分教場で邦樂全般の講座を開いて現在約三百名

の生徒を擁してゐる、この邦樂科については今回の第六十九特別議會に追加豫算として提出され議會通過次第官制その他を發表して六月一日から愈々開科するまでに漕ぎつけたものである。

新設^{せうせき}邦樂科は初年度一萬圓、二年度二萬圓、三年度三萬圓の豫算で三年後には完成する筈である、その内容は能樂、絃曲の二部に分れ能樂部では謡仕舞等能樂全般、絃曲部では長唄、箏曲の二分科をそれぞれ教授するものである、教授は初年度教授三名、助教授一名、二年度三年度には各教授を二名、助教授一名宛を任命するが、三年後には教授七名、助教授三名、それに書記一名を擁する立派な獨立科として完成する

初年度は中、女學校四年修了者中から能樂約五名、長唄箏曲各約五名の割りで約二十名以内を他の學科と同一條件の入學試験によつて入學させる又開設と同時に第一次任命を見るべき教授三名、助教授一名に就ては目下乘杉校長の手もとで内々に選考中であるが、今のところでは大體現在神田分教場に講師として勤務中の觀世左近(能樂)吉住小三郎、稀音家六四郎(長唄)中能島欣一(宮城道雄(箏曲)の五氏のうちから任命を見る模様である、併し完成のあかつきには各派各流からの代表的大家を網羅して豪華な邦樂教授陣となる筈である

(『國民新聞』昭和十一年四月二十一日)

音樂學校の邦樂科新設 閣議で決定

十九日の閣議で決定した直轄學校職員定員令中改正の件は既報の東京音樂學校に邦樂部を新設し謡曲科、絃曲科(長唄、箏曲)

を置き新たに教授三名、助教授一名を増員するものであるが右は向ふ三ヶ年間に教授七、助教授四、書記一を以て完成するもので初年度の教授三、助教授一は且下夫々銓衡中である

(「都新聞」昭和十一年六月二十日)

(東京)

(「大阪朝日新聞」昭和十一年六月二十四日)

長唄も制服で歌ふ『官立邦樂専門學校』が實現

國體明徴は樂壇から

官立邦樂専門學校がいよく出来ることになつた——上野の東京音樂學校の邦樂科は今までアマチュア相手の選科だつたが故松田前文相の音樂による國體明徴實現の主旨を體して乘杉校長年來の宿望が成就、本科に邦樂の二科を新設することになり、諸準備完了二十四日付官報で「邦樂科新設のため教授三名、助教授一名の増員をなす」旨發表される

同校ではすでに二十一日から入學試験を開始、二十三日第一回の發表を行ひ受験者三十三名中十九名合格、二十四日口答試問をして最後決定の後二十五日午前八時から入學式舉行、直ちに授業を開始する

この新設邦樂科は「絃曲、長唄、箏曲」「能樂」二科に分れ修業年限は三年、學生定員四十五名を原則とし中女學校四年終了者を入學資格者としてゐるが選科は一般アマチュアのため從來通り存續させる

このお師匠さんが教授へ、お弟子さんが學生へといふ邦樂數百年の傳統を破るエポックメイカーたる大恩人故松田文相のお墓へ二十五日入學式後乘杉校長は新學生、選科生を伴つてお禮詣りをす

る、なほ教授は且下交渉中であるが觀世左近（能）、稀音家六四郎、吉住小三郎（長唄）宮城道雄、中能島欣一（箏曲）諸講師中から三教授、一助教授が任命され、七月初旬發表のはずである

箏曲が東京音樂學校の正科になる迄

宮城道雄

此度いよく東京音樂學校に邦樂科が本科として置かれ箏曲も採用されて、既にこの六月二十五日に入學式が行はれ、その當日から授業開始といふ事になつて、私共も一層忙しくなりましたが、併しこのわが箏曲が愈よ文部省直轄の官立音樂學校の正科になつたといふ事は、一般箏曲界の爲め、大いに祝福すべき事で殊にわが國邦樂教育が開發され、是で年來の希望もこゝに達せられ實現されたといふ事は、誠に御同慶に堪えぬ事でありまして、箏曲の將來に對しても大きな光明を得た感じが致します、然しそれを思ふても私共の責任は一層重且つ大を加へた譯で、十分にその責任を感じておりますが、すべてに於て諸先輩の指導や御意見なども伺つて、偏へに斯の道の明るい發展を願つておる次第であります。

私も常に箏曲の將來性なども考へておりますが、やはり單に現在の世間受けばかりを考へてゐる譯には行きません、一方には又古曲保存といふ仕事もありますし、新舊兩方面を考慮に入れて時代の流れを將來にも及ぼして邦樂としての立場から慎重に考へて進みたいと思つております。

幸ひ此度の官立音楽學校の正科として箏曲科が設けられた事は則ち邦樂教育音樂として國家に認められた事で、箏曲界としては欣幸に堪へない事です、然しその今日に至る迄の東京音樂學校の校長乗杉嘉壽先生の御盡力は實に大したもので、先日の入學式當日の訓示のお言葉の中にもそれがうかゞはれましたが、この發案は實に乘杉先生が校長として奉職された時に既に決意されてあつたといふ事であります。

音樂學校としてその中に邦樂が無いといふ事は大きな缺陷で、その學校の向ひに在る美術學校でも洋畫科もあれば日本畫科もあるのに、音樂學校で邦樂を認めないといふ事はどうした事か、それに對して不満があつたとの事でした。

そこで早速邦樂を本科として採用する運動を起されたので、先づ最初に選科としての存在を明らかにしてそれを盛にする爲めに整備されました、もつとも其の以前から選科として邦樂はあつたのですが隨分寂れてゐたので、そこで乘杉校長は講師を入れ替へて整頓し漸次に盛大を加へて參りました、その蔭には同校教授の高野辰之博士の大きな御盡力もありましたが、最後にそれらの運動に理解を以て決をされたのが今は故人になられたが前の松田文相で、當時未だ文部省内には異論を持つた人もあつた様子ですが、既に松田文相は俺一人でも押通してやると云ひ切つておられたといふ事です、その後内閣が交迭して現内閣も十分に邦樂に對する理解があつて、それを認めて通過させて貰つた事は現政府にも厚く感謝せねはならぬと乗杉校長は述べておられました。

既に邦樂が本科になるといふ噂の最中に例の事件があり内閣の交迭があり、校長も種々心配されてゐた様子ですが、遂に多年の宿望が果されて、今日その入學式を行ふといふのですから乘杉先生の感慨も亦深いものがありましたでせうし、それ迄の苦心や感想やその日の訓辭などを聞いて、全く私どもは涙ぐましく感激した次第であります。

當日は校長の發議で、入學式を終へた一同は憶ひ出の故松田文相のお墓へ參拜した事も、邦樂が本科になる迄の追憶を新たにして、感喜感謝のうるはしい場面が現出されました。

先づこれでいよいよ箏曲も、文部省直轄のわが國唯一の官立音樂學校の本科になつて、前途はますます明るく開けて來た譯で、箏曲界全般としても感謝の念を共にして大いに喜びたいと思ひます、勿論私どもゝ一層責任の大を加へた事で、それにしても諸先輩皆様のお力に俟つ事が多いと思ひます、箏曲界の皆様にもよき理解を以て共に進んで頂きたいと思つております。

此度の本科入學者は山田流三人に生田流五人で、その五人の内で三人は選科を學んだ人、他の二人は他からの入學者で、つまり選科の人でなくとも誰でも入學出来るのです。

本科は上野の本校で、選科は從前通り駿河臺分教場に在つて、この方は自由に箏曲が修得出来る様になつております。

今度の本科入學試験は生田も山田も皆立會ひの上で隨分厳格でした、各科で三十五人の受験者の内約半数が入學許可されておりますが、演奏の方も相當進んだ人が多い様です、無論本科ですかくすべ

ての學科があり、洋樂の方も選んで兼修する事になつておるし、卒業後例へば女學校の先生になつたとしても普通の洋樂教師の代理位は務まる譯で、之からの邦樂教師としては堂々たるもののが廳て世に送り出される事と思ひます。

(『三曲』昭和十一年七月 一四〇—一六頁)

東京音樂學校邦樂科概要紹介

音樂文化の向上と日本精神の作興とに資する目途を以て東京音樂學校に邦樂科を設置するといふ事は同校々長乘杉嘉壽氏の就任當初よりの計畫であつて、愈よその多年の懸案が決せられてこの七月より授業開始の運びとなつた、由來邦樂は我が國民精神の發露であつて國民的情操陶冶の爲め教育上之を等閑に附する可らざるものといふ乘杉校長の意見が貫徹された譯で、從來僅かに選科であつたのを、此度は更に新たに東京音樂學校邦樂科として、洋樂の教授研究と相俟つて理想とされてゐた新國樂創成の方策を樹立するといふ意圖もある由で、樂界の爲め慶賀に堪えぬ次第である。

校舎 邦樂科上野公園の本校、選科は神田區駿河臺二丁目の分教場

修學年限と學科目 修業年限は各々二箇年授業時數一週二〇時間

で、必修科目として修身、能樂・箏曲又は長唄、音樂理論、音樂史、國語、外國語、體操を課し、隨意科目として美學、音聲學、音響學を課する。

研究科 邦樂科卒業者中學業優秀なる者は修業年限二箇年の研究科に入り更に研究を續けることが出来る。

入學の資格と試験 邦樂科に入學し得る者は中學校又は高等女學校の第四學年修了者、高等學校尋常科修了者、同高等科入學試験合格者、專門學校入學者検定規程に依る試験検定合格者、並に専門學校入學に關し中學校又は高等女學校卒業者と同等以上の學力ありと文部大臣から指定された者等で、口頭試問及身體検査を受け入學試験に合格した者。但女子は夫なき者に限る。以上上の資格を有しない者と雖も特に音樂の才能ありと認めた者は試験の上入學を許可することがある。

授業料 年額金八拾圓
檢定料 金五圓。
入學科 入學料金三圓。
寄宿舍 女生徒で父兄又は相當な保護者の家から通學することの出来ない者の爲めに、本校構内に寄宿舎の設けがある。寄宿料は年額金三十圓、食費は月額約十五圓位。

學友會は生徒相互の親睦を厚うし、心身を練磨する爲めに設けたもので、生徒は皆會員となつて入會金三圓、會費年額金五圓を納める。

入學試験科目と程度

箏曲第一回 箏曲を専修する者に箏（彈き謡ひ）。山田流にありてはほととぎす、八段、近江八景、菊水、都の春、江の島、生田流にありては夕顔、末の契、春の曲、みだれ、四季の詠、磯千鳥の中一曲を志願者をして選擇受験せしむ。

箏曲第二回 箏曲を専修する者に箏（彈き謡ひ）。前記六曲中一

曲を指定受験せしむ。

國

語 中學校又は高等女學校第四學年修了の程度。

外國

語 英語、獨語又は佛語の中一を選び、中學校又は高等

女學校第四學年修了の程度。

二、次の詩の意を説明せよ。

1、ふるさとをはるばると、隔ててこゝに隅田川、都鳥に言問

はむ、君はありやなしやと。

東京音樂學校邦樂科第一回入學者
箏曲科（生田流） 松尾清二 網野操子 鈴木嘉代子

塚越清子 中村禮子

箏曲科（山田流） 中島泰子 東條夏子 山用美智子

其他（能樂及長唄） 淺見重信 太西信辨 清水郁三

西垣勇藏 堀 菊江 遠山美津子

橋本たけ子 原澤百合 藤江多恵

横山芳枝

（國文英譯）

（1）、早寝早起きは健康によろしい。

（2）、どうぞ上野の音樂學校へ行く道を教へて下さいませんか。

（3）、あの方は咽喉を痛めて居ましたか

生田流五名、山田流三名、其他十名の入學者發表があり、六月廿五日午前八時より入學式が行はれ當日より授業開始された。

同入學試験は去る六月二十一日第一回試験（六曲中より志願者隨意撰擇一曲受験）六月廿二日國語及外國語六月廿三日第二回試験（六曲中より一曲を指定して受験せしむ）

□移しの傳授から科學的な教育に
本科になつた邦樂

果して三年で「先生」の藝が生れるか？

音樂學校にいまと専科として僅に存在してゐた邦樂はいよいよ開設され、三ヶ年卒業の新式師匠を養成することになった。三年後にはハイヒールの長唄の師匠、パーマネントウエーヴのお琴のお師匠さんが洋館のポーチに『指南』の看板をあげるやうになるであらう、それについて専門家はどんな意見をもつてゐるか――

一、次の文章中、括弧を施してある語をぬき出して其意を解釋せよ。

それ「青陽の春」になれば、「四季の節會」の事はじめ、「不

老門」にて日月の光を天子の御覽にて、「百官卿相」に至るまで、袖を列ぬ。其數一億百餘人、「拜をするむる萬戸の聲」、一同に拜する其音は天に響きておびだし。

音符の統一 長唄と三味線

松竹下加茂 杣屋正一郎氏談

『音楽學校の長唄と三味線は稀音家六四郎、吉住小三郎兩氏が指導されるさうで大變結構だと思ふ、現在長唄を教へるに用ひる符號はまちまちで、研精會は唄の文句を堅書きにしてその右横にドレミ

フアを現した數字と棒とを付けてゐるし、杵屋彌七さんは三味線の棹にいろは四十八文字を配し『い』の場所を押へるとか『ろ』のところを押へるとか教へてゐる

西洋音符を使ふのもあるし、口三味線で教へるのにもトン・テン・シャンと教へる流義とタン・テン・シャンと教へる流派とがある、こんど音樂學校で教へるのは研精會だから、學校を卒業しても研精會以外の音符はわからぬといふのでは困る、だから音符をまづ統一しないと、邦樂を大衆化する上に不便だ、また洋樂は他人の作詩、作曲でも、よくできたものはどんどん一般音樂家が採用し門弟にも教へてゐるが、長唄界は偏狭なところがあつて、他流の人を作曲物は絶対に採らぬ、國家的に邦樂教師を養成する以上、大乘的立場に立つて貰ひたいと思ふ、和洋樂を同じ學校で教授すれば、雙方の理解が深まり、將來タクトをとる人、作曲家になる學生は幸福であらう』

理論を學ぶ 琴

箏曲音樂學校主事 藤田斗南氏談

『琴は盲人のお師匠さんが多いため音符にするのに不便だが、箏曲の師匠はあまり流派は關踏せず、他流のでも長所は採り入れる風がある、宮城道雄氏は生田流、中能島欣一氏は山田流だが、兩氏の

手腕は一般に認めてゐる、三年位で素人から師匠になるのは無理だが既に師匠の腕のある人が、理論を學び技もさらに練るために入学するのだつたらよいであらう』

女をどうする 能樂

金剛巖氏談

『能樂を國家が官立の學校で教へてくれることは能樂關係者の一人として私は深く感謝する、なぜ觀世流だけを採用するのか、との非難もあるが私は今その問題にはふれたくない、たゞしかし三ヶ年位で師匠になれるかどうかが問題だ、私らについて十年、十五年と日夜專心稽古したものでも免状を與へ得ないものもあるが音樂學校ではその點をどうするだらうか、能は

男本位に仕組まれてゐる、男と女とは聲が違ひ、顔の大きさが違ふので面も作りかへ、囃子方の笛の調子もかへなければならぬ、女學生を入學させることになると、その問題もひつかつてくると思ふ』

(大阪朝日新聞 昭和十一年六月二十六日)

學生歌作曲當選者に賞牌

先月號紹介の如く本校學生歌作曲當選者兎束龍夫、林松木、山田和男の三君に對し夫々學校長より、銀製賞牌を贈られた。

因に右の中山田君は過般日本放送協會の作曲募集に應募し、一等賞を獲得し、その管絃樂曲は三月二十二日夜AKより放送された。

校内食堂

丸ビル・キアツスルより出張

百足競争　借物競争
パン喰ヒ　リレー、レース
綱引

何十年と言ふ間本校生徒や卒業生にお馴染みの深かつた、初代の金龜亭は、一昨年圓満に穩居して第二代目と變つたが、日々の食事の良否は、生徒の福利に關係する處が甚大なので、今回丸ビル内キアツスル紹介で同店で、鳴らしてゐたコツクに庖丁の腕を振はせることとなり、三月十五日より校内で開店させる事になつた。そこで從來の處は狭きに過ぎたので、諸設備の充實やらお客様を歓待せしめる意味で十八坪の食堂を校舎裏に新築したから（學友會出資）卒業生各位が御來校の節には、是非御立寄相成り度い……と一言提灯をもつて如件。

（「同聲會報」第一三二号 昭和十二年三月 四七頁）

運動會の事ども

師三 山下生

本校設立記念日
十月四日の佳日に當り本校設立紀念祭は左記の順序で盛大に舉行された。

一、式 典 午前八時三十分

(一) 學校長訓示

(二) 設立紀念の歌 合唱

右終つて校庭の花環美しく飾られた初代校長胸像前で一同萬歳三唱。

二、運動會 午前九時三十分より
盲啞競争 二人三脚
空罐タタキ 提灯競争

三、模擬店 午前十一時三十分より
四、演劇 午後零時三十分より

郭公 勸進帳

恩讐の彼方に

シネオペレツタ「ア・ソウ コント」

修善寺物語

本科豫科有志 師二男
師三男 本三、師三女

本一女

一年中教室の中にまたは家の中にもとぢこもつてピアノの練習をやつてゐる吾々に「明日繰變へ休講」といふ今日のおとづれ何と聞くらんとばかりに秋晴れの好天氣がやつて來ました。
まづ下級生諸君の御手傳ひによりコースを引き、砂をまき其上旗を立てたです。遺に萬國旗だけはやめました。

曲目ぢやない番組は回を追つて素晴らしい盛況を呈したですが、生徒諸兄姉のはりきり様もまたいと物凄きものでした。就中本一年の近藤娘の如き竹の棒でもつて石黒氏を追ひかけ廻してなぐる仕末、その上眼かくしをとらないで女生徒諸氏のたまりに飛込んだやふんですから、實に板額の如き奮戰振り、然もこの板額ヴァイオリーンは右で彈くのに竹の棒は左手で振り廻すんです。眼をふさがない

で見てる吾々は爆笑哄笑。御蔭で「場は笑ひに満つ」といつた有様でした。校長先生も見てるだけでは收まらなくなつてか、プリン教師、フライ若老輩^{ド・ショリ}と共に、またわが尊敬する萩原教授共々自らの御出馬、轟砲一發、悍馬は残つたたてがみをしつかと鉢巻きで眼かくしてワシリ～竹は細いし罐はブラン～するしプリン教師は行き過ぎて綱にひつかり校長先生とフライ氏とは幸運にも一度でやつづける。蓋し校長先生は保田の合宿以來頓にその好調を傳へられ特に相手が西瓜取の様な肉彈戦でないだけになんていらぬ御世話を考へた奴もあるそうです。

因みに此の競争の方法を申上げて置きます。といふのは一度おためしになればわかる様に素晴らしい効果のある競技だからです。オリムピックにも是非参加させろなんて途端につけあがるのは誰ですか？

でまづ二組を同人數（何人でも可）にして、眼かくしをし出發點から空罐をつってあるところ迄行きます。さうして盲滅法に之を竹の棒（三尺位の長さ）でなぐります。なぐれたらめかくしをとつて、出發點へ歸り次の人棒を渡します。空罐は空中にぶらさがる様になります。唯それだけですが片山先生のスロー振りと山下先生の心理學應用振りは蓋し物凄い人氣でした。

その他パン喰ひ、リレー、借物競争綱引き等。

此處に一つ名文を紹介すれば音樂學校運動會史上に於ける稀に見る健闘、校長をして、功勞賞を出さしめた澤崎教授と秋月卒業生氏の争ひを見よや、

……。（前章略）

他の數人は既に早や賞に入り或ひは棄權したるもかの兩氏の鬪ひは未だ續行せられぬ。兩手は之を縛し有りたるをもつて既に一人の口中にパンの落ちんとするや他の一人は烈しき體あたりをもつて之に對ひ虚と實と相鬪ふ様は恰ら龍虎相搏つと見えたりき。斯くして何時果つべきとも見えざりけるこの鬪ひも遂ひにパンの地上に顛落しては致し方なく事此處に終り兩將軍堅く握手をかはしけりとぞ。

借物の競争は馨先生に何があつたかしらないが先生のところへ借りに行つた生徒を引つぱつて、先生が走り出す勢ひに集圍の男生徒ヤンヤ～。最後の綱引きは一對一で無勝負のまゝ、或る男生徒「もう一ぺんやりたいけどもう腹が減つた」ですつて。以上をもつて午前中の行事たる運動會を終りましたが相憎くグラウンドのコンディション並びに範囲がせまくりレーのメンバーの方々にはまことに申譯が御座るませんでした。御詫び申上げて置きます。

今になれば白狀もしますが運動會の前日のあの雨水は約三寸もあつて風がふくと恰ら大海の如き觀を呈して居つたのです。それに小生等の組は芝居もあり、小生としては舞臺の裝置、裝飾等實に多忙だつたのでもう運動會はやれまいと自分で定めてゐたのです。所が校長先生の御命令で山下先生と馨先生とがわざ～御檢分の上御心配下さつて小生の手間隙無しに自然と水がひいて砂がまけたわけなんです。賞品と道具一切はその朝のうちに有馬君（師三）が女人とやつて呉れるし唯殘念なのは芝居稽古の爲めリレーに師三の組が出られなかつた事です。最後ですから出て欲しかつたんですが……。でも芝居の方でも各先生から頭がいゝとほめられて皆賢くなつたつもりで満足してますし運動會もリレーでひつくり返つた三宅

君に感想をたゝいたら皆面白がつて喜んで呉れたといふので小生も喜んで嬉しくなつちやつた様な次第です。

相憎く時日が過ぎちやつたのと短かい時間のうちに準備してやつた事ですから印象に強と残つたものしか出て来ません。大いに皆さんに感謝して此の項を終ります。續いて午後は御芝居でしたからどうぞそちらへ。

珍版舞臺裏風景

本二 森 一也

「記念祭には君に舞臺裏の大役を頼むから、そのつもりで」と牧野理事から申し渡された時には、しをらしくも私は頗る煉瓦を散らして喜んだ。それにしても舞臺裏の大役とは、何だらう？ 監督の事か知ら、後見の事か知ら、照明係なのか知ら、と考へて見たが見當がつかない。何故つかないかと言へば、牧野理事が其處迄仰言らなかつたから、見當がつかないのである。さて當日になつて私の任命した大役と言ふのは何と、スキッチ係であつた。詳しく言へば、客席の千燭電燈を、點けたり消したりする役だつたのでアル。

開幕直前の舞臺では、本一女生徒の方達が、イプセン作「郭公」の衣裳をつけて、右往左往の忙しさなのに、幕一つ距てた客席からは、模擬店で御腹を満たした觀衆の拍手がしきりに聞えて来る。開幕のベルが鳴る。

「スキッチ」三宅照明係の命令一下「心得たり」と私は樂屋を飛出し、階段を駆け降りて、配電盤に手をかける。役を果して舞臺裏へ歸つて來ると、もう名臺詞が洩れて來る。僅か三日の練習とは思

へぬ位調子良く、臺詞が受渡されて、客席からは咳一つ聞えない。初秋の事だから、風邪を引いて居る人が或は居なかつた故か知れないが、兎に角大成功で、夫の死に泣きくづれる妻、遠くの教會から讃美歌が聞えて來るクライマックスにホロリとして居たら、「スキッチ」と言ふ聲にハッと吾に歸り、階段を馳け降りた。プログラムの第二は「勧進帳」で、これは名優陣を誇る師二が、月餘の猛練習を重ね、その度に叩かれた義經は、遂に頭の恰好が二〇三高地の如くなつたと言ふ傳説もある位だから、意氣込の凄さは申すに及ばず、地の長唄には特に御家元の御出演を辱ふして、萬點の効果を得た。

但し御家元の御出演が、レコードを通してある事は御断りする迄も無からう。富樫が頭をさげたトタンに冠りが落つこちたり、辨慶が勧進帳を取出すハズミに、ハンケチを落つことしたりした點でも、ヤンヤの喝采を受けた。

一部の掉尾を飾つたのは、本科男生徒合同大顔合せの「仇討以上」で、今村バス氏の妖婦、細井カザルス氏の若女房は何と言つても他の追隨を許さぬ出來であつたし、川氏の主人公、又良く性格を生かした決死の大熱演で、その上に、松浦女史が特別出演の爪彈きは、いやが上にも情を添へて、觀衆嘆賞の聲が舞臺裏の私達に迄よく聞へた位であつた。小憩の後、清水氏が番外にハーモニカを演奏して俄然アンコールを受け、續いて師三のミュージカルプレイ「あゝそうコント」に移る。何しろプログラム中唯一のナンセンス物だけに、豫想以上の大受け。フイナーレの「一九三六年の珍放送」では、ヘチマコロンビア、ビッククリシターレコード等の迷歌手

と名乗る男達が怪しげにも現はれた所、客席の内に正真正銘の本人が来て居らつしやつて、偽物が本物の前で、歌はして頂く等と言ふ珍景に満場は、哄笑鳴りも止まず。餘興芝居の最後を務めたのは、寄宿舎女生徒諸姉を中心とした有志の「修善寺物語」で、舞臺照明から、裝置に至る迄、女らしい心配りが誠に良く行き届いて居た。短

時日によくあれだけの臺詞を諳記したものだと舌を捲いて居たら、何と夜叉王作のお面の裏に、臺詞が一杯書き込んである機智には更に舌を捲いた。これでは夜叉王が出来上つたお面を差上げたがらない筈である。姉娘の最後の場面では、姉思ひの妹や、天才肌の夜叉王の名技が存分に客席の涙を頂戴した。チヨンと這入つた拍子木の音に私は「ソレツ」とばかり階下へ駆け降りて、客席の千燭光をアカアカと點けた所、名演技に酔はされて、涙拭ふ暇もなかつた觀衆は一人残らず「あなうたてなきスキッチ係かな」と恨まれたさうな、成程スキッチ係は大役である。

しばるを彌次る

本一 今 村 「・清二」 生

プログラムを手にして、まるで化學實驗室の様に、外部の光線を遮断した奏樂堂否餘興場へ入る。おでんや燒鳥を鱈腹喰つた後の口の滑る事大したものだ。遠い廊下で開幕のベルが鳴るのは情緒を唆つて嬉しい。

1 郭 公

曾て築地が好評を博したヨキものである。開幕にパイプオルガンと、合唱をつかつて嚇したのは頭がいゝ。善良な老夫婦デビッド、

本一 女

アニーのすばらしい熱演で、客席あちこちに涙をすゝる音がきこえたのは、どうしたものか。それにしても幕になつてアニーが樂屋へ歸つても、未だ泣きが止まらなかつたといふ嘘の様なほんとの話をきいたが、どうかと思ふ。

2 勸 進 帳

師二 男

市川宗家の耳にでも入らうなら、早速訴訟沙汰の代物。「旅の衣はすゞかけの……」の「のう」あたりで俄然亡伊十郎の美聲がウーッとばかり轉落してストップして大笑となる。辨慶、富樫が車輪になる程滑稽で、こゝでは歌舞伎十八番も茶番である。それでも「いゝわね」と云ふ囁がきこえる、さてさて音樂學校は平和ではある。

3 恩讐の彼方

本・豫 男有志

毒婦お何もどきのお弓氏も、足がすつかり外輪ですこぶるインチキだ。旅の若夫婦の嫁さんは首振人形。市九郎が刀を裏返しに差した、あれが強盗の作法かな。其他大勢は臺詞のやり取りに戸迷ひして、折角のところに穴があいた。大根、牛蒡の競演だ。

4 アゝ、ソウ、コント

師三 男

さつぱりまとまりの無いところがナンセンスの賣物か。今年の様に本格的(?)の劇の間にこんな呼吸抜きも悪くない。フイナーレの一九三六の珍放送は傑作に近い。併し生真面目に流行歌なんか喰られちやこつちがあてられて見物も樂ではない。舞臺にのせられてゐる當の御本人が見物席にあるとは氣毒千萬。

5 修禪寺物語

高島屋の十八番を撰んだ度胸の良さに先づ敬服する。衣裳も良し流石に舞臺は綺麗。役者揃ひで特にかつら、夜叉王の演技は今日の

白眉とも言ひたひが、あれで臺詞の間におきまりのアリアでもとび出したら、正しく寶塚だ。いやこれは失禮。

〔同聲會會報〕第二二八号 昭和十一年十月 一五〇(頁)

指摘された缺陷

東京音樂學校の改造問題①

鹽入龜輔

近頃の東京音樂學校の動き方を見てゐて、その何れからか破綻を來しはしないかと云ふ危險性を感じてゐた人は可なり多い事であつたらう。事實我々は既に數年前より屢々それ等の點に就て忠告を試みてゐたが、當事者の反省をうながすには至らなかつたのであつた。それが今回學校内部から其の缺陷が指摘暴露されたこととなつたのは皮肉である。しかもそれは三月前に新任した指揮者シユウイーガー教授によつてなされた點においてより以上皮肉なものを感じるのだ。

本邦唯一の官立音樂學校の内部的缺陷が外人教師によつて指摘されたことは日本の樂界全體としても恥かしいことではあるが、それを恥かしいとのみ考へずに、内部から斯ることを發言した唯一の、そして最初の人として、しかもそれが地位を棒に振つての犠牲的行動によるものとして、東京音樂學校に關心を持ち、その健全な發達を希ふ人々は彼の言を好意と感しその指摘された方向に向つて十分に考察することが必要である。

シユウイーガー教授は東京音樂學校に於る基礎的教育の缺陷を先づ指摘してゐるが、少くとも此の言はアカデミーたる東京音樂學校

の心臓を衝くものである。

アカデミーのアカデミーたる所以は先づ基礎的教育にあるわけであつて、そこに欠陥があるとしたならば、それは致命的な問題と云はなければならない。そして彼の指摘した事は我々として見ても十分客観的に容認し得ることなのである。

それならば東京音樂學校が現在その基礎的教育を失つた原因は何處にあるのだらうか。創立以來約五十年、その初期に於ては十分アカデミーとしての本質を發展させつゝあつたのであつた。それが此處数年間に著るしくアカデミーたる本質からはづれて、一種の興行團體化して來た事實を我々は見てゐるのである。例へば「東京音樂學校の街頭進出」、曰く「日本初演」、曰く何々と書かれた音樂學校製作のポスターが街頭に貼りめぐらされた。

そして此等の世俗的活躍の裏にあつて數人の得意滿面者があつたかも知れないが、それ等の人々の胸をそらせてゐる足下には多くの學生が年數回に及ぶ公開演奏會と自分達の腕前以上の難曲に追はれて奔命これ疲れてゐる有様で、あれでは全く基礎的な練習を學生個人としても積み重ねる事は出來なかつたであらう。音樂學校の校則に學生の公開的席上での演奏を禁じてあるが、その意は基礎的教育の確立にあるのだ。その點現状は學校當事者自身が校則を犯してゐる有様であると云ふ事が出来るであらう。來朝したばかりの新鮮な考へ方で指揮棒を執つたシユウイーガー教授が、その藝術的良心から遂にその地位を去らうと決心した事は我々にも十分理解出来ることなのである。

〔東京朝日新聞〕昭和十二年十一月十九日

無批判な態度

東京音樂學校の改造問題②

鹽入龜輔

シユウイーガー教授が就任した東京音樂學校の指揮者の地位は年來外人教師によつて占められてゐたのであるが、その責任範圍に於て欠陥を指摘し、職を賭してまでその改革を叫んだ指揮者はシユウイーガー教授を以つて嚆矢とするのである。その時に彼が不満を持つたものに對し、何故前任指揮者達が何等の意思表示をも爲さなかつたのかと云ふ疑問に逢着するのであるが、我々の如く常に東京音樂學校管絃樂團を客觀的に觀察してゐる者にとつてはシユウイーガー教授の率直な態度に共感するとともに、前任者達の不實の態度も理解し得るのである。

嘗て同校の管絃樂團が上野に籠つて演奏をしてゐた頃は、それは云はゞ學生の管絃樂的練習のためのものであり、その成績發表の機關であり、指揮者もその意味に於て招聘され、その外人教師もその意味に於て指導をしてゐたのであるから、そこに何等の矛盾も起らなかつたわけであるが

現校長の時代となり、プリンスハイム氏が指揮者として就任するに及び、同校管絃樂部は非常に活潑な活動を示し始めたのであつた。然しその活潑さは常に外面的なものであつて、新交響樂團の向を張つての「街頭進出」となり、「本邦初演」となつて現れたのであつた。先きに東京音樂學校の發表する所によると、同校創立以來本邦初演は百曲に達し、その内五十曲はプリンスハイム氏によつてなされたとの事であるが、P氏が在任六年間に於いて總

初演數の半分の初演を敢行した事は素晴らしい活躍と云ふ前に、却て異常なものを感じるのである。それが日本唯一のアカデミーに於ける事であるが故に尙更その感は深いのである。

正しき基礎的教育の原點に立つならば、その指揮者に常識がある以上、初演をのみねらひ、ましてや現在なほ歐米に於ても批判の渦中にあるマーラーやクルト・ワイルの作品を勉學中の學生に與へるべきもので無い事は誰でも氣附く事であるのだがそれを敢て爲したのは學校及び學生を考へずに、たゞ自己の對外的名譽心或は自己満足としか考へられないのである。

さうだとした場合、指揮者としては記錄さへ殘せば良いのであるから學校の教育方針に對する鋭い批判等は起り得よう筈は無いのである。ただその場合、指揮者は事情を知らぬ外人教師であるといふ理由で情狀酌量の余地ありとしても、その無軌道な態度を容認し、或は拍車を掛けたとも考へられる學校當局の批判力が改めて俎上に上せられるわけである。

少くとも徐々にではあるが進歩を示してゐた同校の管絃樂部が斯る行動のために中斷され横道にそれてしまつた時にシユウイーガー教授が來任したのであるが、アカデミーの傳統からすればそれ迄無駄な足踏みをしてゐた事になるわけで、この點に於て外人教師の選擇と云ふ事が大きな問題となるのである。

今迄外人教師の選擇には何等の標準が無く、便宜的に留學中の同校關係者の推薦のみに委されてゐた様であつた。然しこれは推薦者の身邊的選擇に終ると云ふ悪い結果を縷々示してゐるのである。

それよりも駐^{ちゆう}日大使館の手を通じての、云はゞ國^か國家的^か推薦依頼^{いらい}によつて來朝した人々の方に良き外人教師を見るのだ。例へば村上校長時代にゾルフ大使を通じて來朝を求めた洋琴家のディツク教授や或は今回^{くわい}のシユウイーガー教授の如きはその良き例である。自主的に選擇した外人教師に感心し得ない人々の多い事は皮肉なことではないか。

(『東京朝日新聞』昭和十二年十一月二十日)

基本的改革案

東京音樂學校の改造問題③

鹽入龜輔

シユウイーガー教授の爆彈的辭意表明によつて多年我々の希望であつた東京音樂學校管絃樂部の改革問題が改めて取上げられるやうになつた事は喜ぶべき事ではあるが、この管絃樂部以外に、現在の同校としては改革を必要とする面の多々ある事を見るのである。

例へば現在有るか無きかの様な存在である作曲科の振興策も必要だ。音樂が可なり普及した今日でありますから國民音樂としてのものを殆どまだ持つてゐない現状はアカデミーとして怠慢の結果であると云ふべきだし、國民音樂を創り出す土台を建設する事はその責任であると云ふべきだらう。又、音樂を學問として研究する面に至つては何等の施設も爲されてゐない有様である。今日音樂を學問的に研究してゐる人とは總て自主的に開拓をして來た人々のみである現状は此の事を良く物語つてゐることであらう。

そして斯る學問的面を持たぬ音樂學校は、恰も頭腦を持たぬ人間に比すべきでは無い。更に邦樂科の無批判な取入れ方は邦樂を振興する所か、却つて逆効果さへ感じられ、同校に於ける盲腸の様な存在になり得る可能性の有る事を思ふのである。

斯の如く、改革されなければならぬ幾多の面のあることを我々は觀てゐるのであるが、それ等は個々の問題であつて、それよりも先づ第一に爲されなければならない事は、唯一の官立音樂學校として何の爲に、そして何を目的として存在すべきであるかといふ事を再検討する事であり、然る後に全面的な改革が行はれなければならぬ。それは東京音樂學校として持つてゐる現在の考へ方を否定する事であり、新らしい考へ方を以つてそれに對する事である。

現在の音樂學校は全く無理想であるといふ事が出來るであらう。たゞ規定に従つて學生を入學せしめ、規定の技術を習得させて卒業といふだけの事である。そしてその卒業生の大部分は貧弱な個人的な音樂活動しかしてゐない有様である。

音樂學校創立以來約五十年、其間千を超ゆる卒業生を出しながら社會的、大きく云へば國家的な音樂生活に於て何等の進展も示されてゐない有様は、音樂學校卒業生達の無氣力、無理想に對しても差支はないであらう。明治初年に音樂取調所が創立された時の「國民の情操教育を涵養する」と云ふ考へ方が今日まで徹底して學校の教育方針となつてゐたならば、今日の様に理想を缺いただ「日本^{おほが}の音樂生活」を現出せしめないで済んだかも知れない。

今日我が國の音樂を向上せしむるために最も必要な事は數人の世界的名手を生み出すことよりも、國民全體の音樂的標準を向上せ

しめることである。これは國民體位向上と同じ考へ方であつて、樂界の上部構造が幾ら進歩しても一般大衆のレヴエルがそれに伴はない場合、それは全體として跛行的な音樂生活と云ふべきである。そして東京音樂學校が結局は國民の租稅によつて成立つてゐるものである以上、國民大衆の音樂生活を豊富ならしめ、それを向上せしめる事に學校としての目的が置かねばならない。そして此の目的に沿うてそこに教育方針が決定されるべきであり、此迄に東京音樂學校改革案の基本的要件があると考へられるのである。（終）

（『東京朝日新聞』昭和十二年十一月二十一日）

創立當初に禍根

音樂學校邦樂科の改造問題（1）

辻 莊一

東京音樂學校邦樂科を改善しようと云ふ心持がどこかにでも存在する所では、それは三つのものを含んでゐなくてはならない。即ち邦樂科に何か缺陷があること、缺陷を認めるからには邦樂科があるべき有り様またはその本來の任務についての明確な一つの觀念が儼然と存在すること、最後にこの缺陷を埋めるには現在の邦樂界の現勢を如何に運用するかといふ方針、この三つのものが含まれてゐなくては改善具體案は成立しないだらう。

ところが私は無精なため現在の邦樂科が如何なる組織をもつて運用せられ、また如何なる人物が如何なる教授法をやつてゐるかといふやうなことを、かれこれ批判するほど明確には知らないし、その上邦樂界全般についての認識も十分でないからして、政策めいたこ

とを此所において考へることは出來ぬ。

また自分はいつでも一學究の立場を離れたくないと思つてゐるから、以上のやうなことを努力して知悉しようと思はぬ。たゞ一つ自分が考へて良い問題がある。

しかもこれが十分に解答せられかつその答へが邦樂科關係者に把握されない限り、如何なる制度上及び人的條件を變更しても、邦樂科はその本來の任務をより良く果すことが出来ないであらう。それは云はずと知れたこと、邦樂科の本來の任務の確たる把握である。或はより根本的に考へるならば邦樂科の本來の任務たるべき邦樂の正しき傳承とは何を意味するかをはつきりして置くことである。

音樂學校及び文部省當局者は今組上にある東京音樂學校邦樂科の設置に先んじてその目的及任務に關して十分なる検討を行つたであらうか。これが自分の先づ最初に知り度いことなのである。勿論議會其他の機關の承認がなくては費用が出ないから、議員其他大藏省の官吏に設置目的及び組織をよく解るやうに説明したことであらう。けれども議員や役人たちには音樂はわからない。設置をもくろんだ人が、東京音樂學校は西洋音樂ばかり教へてゐたのでは日本の音樂學校として不備である、須らく邦樂科を設置しなくてはならぬと云ふやうな趣意をもつともらしく云ひあらはせば、少しは謠曲や長唄などをたしなんでゐるやうな連中は、それは至極結構、日本人の稅金で設立してある學校で日本固有の音樂を教授しないのは實に怪しからん、音樂學校長は良い處に氣がつかれたとばかりに賛成した位が關の山であらう。これが禍根になるのだ。

今表面に出なくともいつかは必ず出るに相違ない。つまり教授要目や施行細則などを規定し統一すべき根本觀念、即ち邦樂の正しき傳承とは何を意味するかに對する解答を良い加減にして置いて、制度だけを恰好よくつくり上げたのではいつかはぼろが出来るに定つてゐる。

一體然らば何が證據に指導觀念の把持が此處に無いかを斷定するか。自分は設置目論見書のやうなものを見たことがないから文書の上の材料を持たないが、夫よりも有力な材料が存在すると信ずる。それはかつて音樂學校に附設せられてあつた邦樂調査委員がいつの間にか解消してしまつたことである。この委員は如何なる顔觸れであつたかよく知らないが、近世邦樂年表といふ非常に立派な研究報告を出した。(筆者は立教大學教授)

(「東京朝日新聞」昭和十二年十二月二十四日)

傳承の困難さ

音樂學校邦樂科の改造問題(2)

辻 莊一

音樂學校に附設されてあつた邦樂調査委員はまた雅樂の調査をやつてゐたことをも聞知してゐる。學的な調査機關でしかも對象が邦樂と來てゐるから五年や十年ですぐに成果が擧がる筈がない。これにしびれを切らせて一舉に解消したといふことは取りもなほさず、邦樂の眞髓を把捉しようとの熱情が足りなかつたことを證據立てるものではあるまいか。

かかる不熱心なる當局者が邦樂科を設置して、邦樂の傳承をや

らうといふのは烏滌の限りである。傳承を行ふからには傳承されるものゝ正體を見極めてからのことにして貰ひたかつた。その性質上洋樂どちがつて傳承の困難の大なる邦樂を教授しようとすることは、音樂學校が單なる所謂師匠たちの無秩序なる集合でないかぎり、よほどの覺悟と研究が必要なのだ。傳承の困難には各種の弊害が影の如くにつきまとふ。技術のすぐれた師匠たちは全く非常識な威張り方をなし、大した要求を弟子に向つてなす。かゝる横暴の存する所邦樂は衰頽するばかりである。

そして音樂學校はかゝる弊害を芟除することを敢てなすにあらざれば、邦樂科を新設する意義の一部が失はれてしまふ。しかしこゝでは自分は先づ邦樂傳承の困難なる事實をわかつて貰ひたいだけで、それに附帶せる弊害に關しては深入りしたくない。

日本音樂と西洋音樂との差異は色々の點から考へることが出来るがそのうちの一つのものだけについて取敢ず考へて見よう。雅樂の器樂(これは大陸的色彩の濃いものだ)箏曲及び尺八樂のあるもの等を除く外、邦樂は純粹の音樂ではない。といふ意味は邦樂は他の藝術即ち文學や劇や舞踊との關聯において成立してゐるので、音樂に内在せる法則はかなりの程度に無視せられてゐるといふことである。洋樂は所謂印象派や表現派の音樂を除き概して構成的であり、一の樂想を中心として、それぞの時代や作曲家が分有してゐる處の音樂の法則に従つて展開構築されたものである故に、この展開の法則さへ心得てゐる人が耳にする限り、音樂は整然たる一の組織である。

文學との總合藝術である所の歌曲においてすら、概して音樂の

論理が優位を占めてゐることを看取ることが出来る。従つて音樂の内容と外形とは大體において正比例の關係にあつて、特例を除く外、形式的に見て複雑なものは内容も複雑である。従つて演奏技術も困難である。

しかるに邦樂は上記の如く音樂それ自身の法則が無視せられるから、外形と内容、演奏技術間の正比例關係は殆ど認められないといふも必らずしも極言ではない。一寸耳にした限りにおいて單純なふしまはしが、文學的に複雑な詞章に附せられてゐる時、この單純なふしまはしは無理な負擔を荷はなければならぬ故極めて微細な陰影を附して歌唱せられることが頻々とあり、洋樂の耳をもつてすれば捕捉し難き藝術現象が發生する。これに類する現象が頗る多數に在るため、易より難に進むと云ふ教育の根本策を邦樂教授に取入れることが困難となり、單なる便宜等から考へられた傳統的な教程が既存する外教授のための工夫が全くなされてゐない。そのため弟子はたゞ機械的に師匠の範奏範唱を模倣し、これによつて呑み込めない弟子はいつも師匠に叱られるが自分でどうして良いかわからず、師匠もこれを指導する方法を知らず、結局辛抱第一と云ふ非能率的な諦めに達するの外はない。

(「東京朝日新聞」昭和十二年十一月二十五日)

教科書編纂私案

音楽學校邦樂科の改造問題（3）

辻 莊一

かかる非能率的な教育は原則として師匠には經濟的に有利であり

弟子には不利である。この、利益關係の不均衡から各種の暗影が発生し、これが邦樂界に牢固として根をおろしてゐるのである。即ちこの暗影は日本音樂の性質から當然派生するものであつて、避けられざる惡であるが如くに思はれる。もし音樂學校邦樂科が公の機關として明朗ならんと努力する氣があるならば先づこの點に注目しなければならなかつた筈である。故に如何に制度を完備し、師匠を教授と改命しても傳承されるものが日本音樂なる限り、この惡は避くべからざるものとして附き纏ふに相違ない。この事實の前に辟易して手を束ねること、或は臭いものに蓋をして置くだけで我慢してゐること、この双方とも自分の取らない所であり、また音樂學校當局も賛成して呉れることと思ふ。

蓋し學校は公器でありそこでは不條理や私曲は絶対に許さるべきではないからである。もし音樂學校邦樂科教授以下の教員が從來の師匠の氣質を固持して居る限り、名稱が如何に變更されようとも學校として忍び難い不道理が起る。

我々の考をこの點まで押しつめて來るならばどうしても教へ方を變更しなければ邦樂は益萎縮すると云ふ結論に進まなければならぬ。しかし昔からの教へ方も非教育的であるとは云へ邦樂の形態から當然派生するものであるから、よほどの思ひ切つた方法を取らぬ限り現状を開することとは出來ぬ。これに關して自分は一の私見を提出する。

それは外でもない、邦樂教授法研究委員を設けさきに存在した邦樂調査委員と協力して次のやうな仕事をして貰ひたいのである。それは全然西洋音樂の影響をうけない所の音樂で、しかも音樂上か

らも文學上からも單純なものから始め、次第に高程度に進んで行く教科書を編纂せしめることである。高程度のものは現存せる邦樂古典である。初步はこれを地方民謡の中から取捨選擇することは必ずしも困難ではない。

しかしこの編纂に當つて西洋音樂理論の介入を許してはならぬ。即ち樂曲を一つの構築物と見てこれを分解したりするやうな態度を取つてはならぬ。これについての實施方案はあまり専門的に涉るから省かせて貰ふ。

かかる教科書をつくり上げたならば、易より難に進むと云ふ教育の根本に即することになるために、教授は生徒に無理な注文をして困らせることはよほど減ずるであらう。また音樂の教授と共に國文學の鑑賞及び其根本たる所の日本文化の理解に思ひきつた努力をしなければならない。つまり學生をして古典的日本人としての教養を浸潤させねばならぬ。

くどいやうだが邦樂科のみならず上野の音樂學校はその内部に技術の外に教養を重んずる空氣を醸成すべきである。教養のある所技術も自ら向上する。しかして教養は明徹せる科學的精神と、豊富なる生活感情とから生れる。人間を制度組織のために用ひたのでは教養は高くならない。(終)

(東京朝日新聞 昭和十二年十二月二十六日)

時局に對應して!!!

事變勃發一周年

蘆溝橋事件から正に一周年を経た七月七日、正午を期して職員生

徒一同奏樂堂に參集し、一分間默禱、時局の重大性に對して更に思ひを深くするとともに、戰歿將士の英靈に對し嚴肅なる感謝の意を表し、了つて學校長の訓話あり、晝食は「日の丸辨當」を開いて將來を期する所があつた。そして毎月七日を「握飯辨當デー」と定めた。

七月九日第一學期終業式の勢頭に於て、七日に御下賜あらせられた勅語の奉讀式を舉行した。

經濟戰對處生活實踐要項の申合せ

經濟戰に對處し、併せて帝國將來の大飛躍を期するため、職員一同「生活改善要項」を申合せ、日常生活の刷新、物資の消費節約と活用、貯蓄の勵行等に關する要項を申せた。

生徒の消費節約要項を設定

職員の生活改善要項の申合せと同時に、生徒の「消費節約要項」をも設定して生徒に指示する所があつた。左にこれを掲げる。

一、校用、自己用の別なく樂器類の使用を一層丁寧にすること。
二、制服、制帽の新調を見合せ修理補綴して之を用ふること。新生徒に在りては實情に應じ有合せのものを利用せしむる豫定なること。

三、皮革製品に在りては鞄其他學用品等の新品を購入せず、運動具に付ては極力差控へること。

四、綿製、麻製、羊毛製、ゴム製及金屬製の學用品等の購入を極力差控へること。
五、皮革製の靴及ゴム靴を購入せぬこと、事情に依り登校の際下駄、草履等を使用することを得。(此の場合に在りては校舎内

に於ては必ず上草履を用ふること。)

六、學習用の用紙又はノート類の節約を一層強化すること。

七、衣服類の高價華美なるものは勿論出來得る限り新調を見合せること。

八、集會は成るべく回數を減じ且質素健實を期すること。

九、成るべく間食を廢すること。

十、暑中見舞状、年賀状を廢すること。

十一、女子は化粧品類の消費を節約すること。

十二、自動車の使用を慎むこと。

十三、其他學用品及使用物品を活用し、教科書、樂譜等は成るべく古本を使用し且彼此融通使用すること。

職員の貯蓄組合を新設

七月から職員の貯蓄組合を設け、一同規約郵便貯金を行ふことにした。現に組合員九十四名、一箇年の貯金額五千餘圓に達することとなる。

集團勤労作業の實施

七月九日から一週間実施した。詳しい状況は別記する。

物資の節約

國策に對應して物資の節約、殊に石炭、ガソリン、紙類等の節約は一層これを强行することとした。本會報も發行度數を減少し、紙質頁數等も出來得るかぎり節約を加へることにしたのである。御諒承を願ひたい。

樂徒の勞作

全體主義に於ける集團勤労作業は實踐的な精神教育の具體的實施である。

即ち生徒をして勤労作業—勞作の體驗を通して團體的訓練を積ましめる事に依つて心身を鍛錬し日本人としての國民的性格を練り上げる事を旨とするものである。であるからこの訓練は現時局並に教育刷新上極めて重大な意義をもつもので、本校では當局の意を體し別記の通り集團勞作を行つた。

集團勤労作業の實施

本校では左記の通り七月九日から同十五日まで男生徒は長野縣輕井澤町南輕井澤高原寮、女生徒は本校寄宿舎に宿泊、集團勤労作業を實施したが、烈日の下に流汗淋漓、青年の熱意と純真とに溢れてレコード吹込に、激しい練習に或は校舎の清掃、校庭の除草に全生徒が一生懸命に作業する姿は感激せずにはゐられなかつた。蓋しその心身鍛錬なり規律的訓練なりの上に多大の効果があつたと信ずる。なほ第二次作業として例年の通り九月三日から同九日まで一部生徒は千葉縣保田海岸に合宿訓練を行ふ。

集團勤労日程表

男生徒

七月九日（土）
午後十一時三十分

上野驛出發

勤労週間レコード吹込
今年は七月九日から集團勤労の作業が行はれたが、其一事業として連日赤坂三會堂に於て全生徒のレコード吹込があつた。其曲名等は左の如くである。

七月十三日及七月二十二日

長唄 小鉛治 邦樂部長唄科生徒

同 楠の薰 同

同 皇軍必勝 同

同 箏曲 六段 同

花三題 同

七月十四日 邦樂箏曲生田流生徒

同 同 同

邦樂箏曲生田流生徒

山田流生徒

謡曲 橋辨慶 同

羽衣 同

七月十四日 邦樂謡曲科生徒

同 同 同

洋樂科男女生徒

混聲齊唱 空の荒鶯 同

東亞の盟主 同

同 三部 日本讀歌 同

同 四部 曙光 同

洋樂科男女生徒

同 同 同

地主忠雄

野外演習記（その一）

支那事變も既に一ヶ年を経過した。その間我が皇軍は未曾有の戰果を收め、内外人をして文字通り驚異の眼を睜らせたのである。斯くて長期戰が第三段階に入ると共に國民は舉つて更に一段の決意を固め堅忍持久、以て事に當らんとの肚を据えたのである。

思へば昨年の七月富士山麓演習地に於て重大なる事件の勃發を知つた。當時は大陸政策と列強との關係に就て事が非常に難かしい困難な物に考へられ、此處に満一ヶ年を経過して事態が斯くも進展するとは到底想像の及ぶ所ではなかつたのである。

本校では夏季休暇中一部管樂生徒及絃樂アンサンブルのメンバーに對し暑中訓練を實施したが、夫々の當該教官指導の下に酷暑を克服して連日猛練習を續け、技術の進歩、精神鍛錬の上に多大の効果を收めた。

暑中訓練の實施

開催、又さきには陸軍病院に於て慰問演奏を行つた事は既に報じたが、去る七月十五日本校では乘杉校長引率の下に邦樂各科五十三名が横須賀海軍病院並海兵團に於て戰傷病將士の爲に慰問演奏會を開いた。

因に本校は先年の上海事變の際も同病院に於て慰問演奏を行つた。

（同聲會會報 第二四四号 昭和十三年七・八月 六〇一四頁）

海軍將兵慰問演奏

集團勤勞作業第七日目

今回の支那事變に於て皇國の爲に尊い血を流した皇軍の盡忠報國に對する銃後の感謝については今更言ふ迄もない處であるが、本校ではその萬一に酬ゆる爲銃後奉仕演奏會を數回日比谷公會堂其他に

九日、隊伍堂々、學校を後に勇躍演習地輕井澤へ向つたのである。七月九日、此の日に第一學期の終業式並に新入生の本入學宣誓式

が行はれる。豫科師範科の生徒は喜色満面に溢れてゐる。全男生徒の半數にも及ばんとしてゐる新入男生徒は、誠に頼もしい存在である。

又此の日、昨年九月より本校の軍事教官として、日々御懇切なる、御指導を與へて下すつた家所大佐の、晴れの御出征、歡送の儀も相加つて我等の勇途を一段と多彩ならしめ且緊張せしめた。

午前十一時半玄關前校庭に整列、校長先生の御訓話を戴き、直ちに上野驛に向ふ。音樂學校義勇軍總勢百十八名、之を三個小隊に編成、進軍は堂々と開始されたのである。左窓に妙義山を眺めながら、松井田、横川を過ぎて列車はいよいよ高原地帶に入る。此の附近から車内に流れ込む風は非常に涼しく、つい先程迄経験された東京の蒸し暑さは全くどこかへ忘れ去つてしまふ。

輕井澤驛に着いた頃は、大分夕暮近くなつてゐた。海拔九百米餘の高原は陽が落ちかけて一しほ涼しさを加へる。都會を離れて廣大なる自然に接した時、誰しも黙つてゐる事は出來ない。心ゆくまで大きな聲を張り上げ度い氣持に驅られる。此處からいよいよ南輕井澤に向けて戰備行軍が開始される。南輕井澤、押立山に通じる道路は廣いが大變に悪い。此の様な悪い道路が音に聞く避暑地輕井澤を訪れる客を運ぶのかと大いに疑問を持つたのであるが、何と避暑地と稱するのは之と反対の方向ださうである。南輕井澤は専ら演習場として使用されるわけである。此處の入口近くから小隊は展開から更に散開に移り猛烈なる攻撃戦が開始されたのである。状況が終り宿舎である高原寮前に整列した時には日は全く暮れ、夜風は相當に冷たかつた。

時間が遅くなつてるのでひどく空腹を感じる。食後一風呂浴び浩然たる氣分で各部屋に戻るや、腕角力、錢廻し等で、早くも部屋中ごつた返しの騒ぎが始まるのであるが、斯うした休養の時間もわざかにして直ちに夜襲を敢行せんと武裝を整へ集合、之より夜間接敵行動の演習を行ふ。

夜に入り霧は益々深く立籠め、眼の前にある廠舎の明りさへも判然としない。空は黒く濁り四圍は深邃として無氣味な沈黙が續けられてゐる。こんな日は特に夜襲を敢行されるのであらう。

夜間の戦闘は終始全くの沈黙を守らなければならぬ。一音も一言も發せざして敵を葬り去るのである。廠舎に歸還したのはもう十時前であつた。

一同疲れてはゐるが騒ぐので仲々直ぐに眠る者は見當らない。然しこの間にか騒ぎも静まり、不寢番の劍の音のみが鋭く闇に響く。

七月十日（第二日目）快晴

起床喇叭が眠つたい頭をぐわん／＼打ちつける。斯うやかましく、がなられては厭でも起きざるを得ない。無意識的に時計を見れば定刻の五時半である。水を溶かしたやうな冷い水で顔を洗つても未だ眼がはつきりとはしない。

點呼は直ちに行はれるので急いで戸外へ走り出た。突然今までの眠氣は一氣に何處かへ飛んで行つてしまつた。廣々とした高原と美しい山々が明朗に我々の視覚を呼び起したのである。

昨夕來の霧も忘れたやうにからりと晴れ遙か北西方には淺間の煙が望まれる。南方には押立山と、その頂上旭日に映える眞白いホテ

ルが繪のやうに浮ぶ。

高原の朝の爽やかさは又格別である。國旗掲揚、宮城遙拜の後、朝の體操を行ひ、六時半には打揃つて朝食に舌鼓を打つ。東京で食べる朝食とは大分味が違ふ。

八時からは今度勤労奉仕として、吹込まれる歌曲の練習が城多先生指揮の下に行はれる。合唱練習後は短時間、校長先生の御訓話を戴く。

音楽學校が今から四年前、初めて習志野に於て演習を行つた當時は實に不自由なもので、それに比べて、現在の廠舎はまるで避暑客のやうで、勿體ないと云ふやうなお話もお伺ひしたのであるが、富士に比べて見ても此の廠舎は格段に良いのである、まして習志野に比較が出來ないのは當然であり、斯うした恵まれた演習地であつた爲に晝夜の教練は最大の意氣と努力とを以て、終始頑張る事が出來たのだと思ふ。

九時から、午前中の演習は分隊の散開及突撃の動作である。之を基本とした小隊の陣地攻撃は晝食後殆んど休む間もなく續行されたのである。

高地を占領せる敵を攻略するのに附近の非常に不利な地形に阻まれて攻撃軍は非常な苦戦に陥つたのである。中でも擲弾筒分隊は湿地に入り、敵前渡河を敢行したのは誠に目覺しいものがあつた。

又突撃直前に、高地上の校長先生が白いハンカチ（之は機關銃の意味）を振りながらドン、ドン、と機関銃ならぬ、口關銃の雨を浴せかけるのには攻撃軍大いに面食つた次第であつた。

夜間は所謂、小哨の對抗である。今夜も昨夜に増して深い霧が立

籠め、一間先が明瞭に見えない位である。九時全般の状況が終り廠舎に歸る。風呂を浴びて床に入るとさすがに今日は一日の疲れが利いたと見えて、間もなくぐすりと寝込んでしまつた。

東京の夢を楽しんでゐる者もあるだらう。目前に控えてゐる楽しい夏休みのプランを夢浮べてゐる者もあらう。或は明朝行はれる、押立山の華々しい山岳戰を夢見てゐる者もあらう。明日も亦、晴天に違ひない。

野外演習記（その二）

原 繁義

七月十一日（第三日目）快晴

(1) 朝の一時

無情なるラツパに夢を破られる事二度。布團をたゝみ——洋服を着る——洗面を済ませる——舍前に飛び出す。驚く勿れこの間の所要時間十分、五時四十分には整列が終る。それ迄殆ど夢の中で無意識の中である。

初冬を想はせる様な涼風が頬をなでゝ通るので、厳格な點呼の始められる頃からはホツと意識を取りもどして思はず高原の朝を満喫するのである。

西の空のかなた紫煙の山『淺間』を背景に今日登らうと言ふ目前の押立山にはギリシャ建築の様な白堊の殿堂、南輕井澤ホテルが聳え、雲間を縫ふ種々の小鳥の聲も快よい「朝の交響樂」である。

かうした朝の自然に包まれて肅然と「君が代」のラツパが鳴り響くと「日の丸の旗」が靜々と掲げられて行く。吾等はこの國旗の下

に「今日一日の、戦線將士に恥ぢざる覺悟」を誓ふのである。

(2) 午前の山岳戦と小隊野戦

午前七時、武装を整へ憚れの押立山へ强行軍開始。山麓から一列縱隊になつて延々長蛇の如く間道を縫つて進む。皆汗ダクになりながらも山頂へへと心は、はずむ。一步毎に視野が廣まつて先程歩いた自動車道路も帶の様に原野を縫つて見えポツリ／＼建つてゐる人家の點在してゐるあたり箱庭の様な感じと言はうか。

突然山頂に銃聲が起り輕機が唸り出す。先着部隊が敵地攻撃の火蓋を切つたのだ。吾等も遅れじと思はず駆登る。壯烈なる一聲鳴り響く一と事が展開されると敵陣は一たまりもなく潰滅する。

× ×

歸路、競馬場跡をはさんで小隊の戰闘教練に移る。

下級組の北軍は石本小隊長の指揮の下に北方の小山に陣地を占據し、上級組の南軍は山本小隊長に率ゐられて攻勢を取る。

廣い競馬場の草原に散開して見ればこは如何に荒れるがまゝに放りつ放しの馬場は草が生ひ茂つてゐて、人を没する深さである。然し皆の意氣は實に天をつくの慨がありズドン／＼と盛に撃ちながらザリ／＼つめ寄つて行く。しばらく行くと草原の中には縦横にクリークが通つてゐて徒涉が出來ない、敵迄は四百か五百位しかない。

氣丈あせつて仲々進撃は出來ない、敵からの銃火は益々激しくなつて来る、皆が泣き出し相な顔をしたのも、實戦さながらの苦勞をなめたのも實にこの時である。

然し狂氣の様にいきり立つ隊長の進撃命令にクリークもトーチカも何のその小一時間の後にはさしもの難關も突破して敵陣地直前に

肉迫する。「突撃に進め」の號令一下壯烈極り無き肉彈戰が展開されると見るや敵も味方も入り亂れて陣内戦に火花が散る。あゝこの一太刀！ この一突き！ 支那の野に戦ふ彼の將士の體驗をこの銃剣この刀にまざ／＼と感ずるのだ。

(3) 午後、馬越原に於ける戰闘教練

カレーライスと澤庵の中食に午前の疲れを忘れると直ちに午後一時から馬越原に向ふ。下級組西軍は馬越原の西方小高い丘に陣地を占據し、上級組東軍は東方より相對して進む。

西軍松井小隊長、東軍は山本力小隊長が率ひそれぐ金子教官殿、内山小尉殿の指揮の下に戰端は開かれた。西軍は馬越原後方の小山三つに陣取り、各輕機を前線に配り、遙か七百米前方より進撃し來る敵軍を今や遅しと待ちかまへてゐる。嵐の前の靜けさとも言ふ様な沈黙が續く。東軍は前面の沼澤地に一部の兵を散開せしめて主力は左翼より迂廻して包圍の體形を取る戰法らしい。

五百米位近づいて來る頃けたゞましい輕機の第一聲が鳴り響く東

軍は膝をも沒するクリークを徒涉、言語に絶する苦戰らしい。伏し轉びつする姿が手に取る様に見える。突然右翼をついて敵の主力が現れて來る。西軍はやゝたゞ／＼の體である。

兩軍待期のまゝ漸時銃火のみで應戦してゐる。「戰友！ ヤラレタ！ 天皇陛下萬歳！」と言ふ様な劇的シーンの展開するのもこんな時であらう。突撃準備が完了したものと見えて、奮然山本小隊長の號令一下さつと突入する。天にも響けと怒號する喊聲、何れも負けじの氣概賞す可し。

(4) 夜の一と時

夕方から雷雨になつて演習は中止になる。夜は新入生歓迎の座談会が開かれて種々の餘興が飛び出す。或は「ヂエスチヤー」に或は「錢廻し」に或は「漫談」に花が咲き點呼の九時半迄樂しい一と時を過した。

七月十二日（第四日目）快晴

(1) 拂曉戰（中隊戰闘教練）

深夜午前三時起床。昨日は夕方から雷雨になつたのでとても朝の演習はないものと思ひ込んでゐたのに無情にもカラリと晴れて上天氣である。

上級組白軍は山本力君が小隊長となり、下級組赤軍は、中隊長金子教官殿、第一小隊長松井君、第二小隊長清水君、第三小隊長原の編成で一個中隊になる。

昨日戦つた馬越原に兩軍相對し各狀況を渡される。赤軍は馬越原西方の小山に占據した白軍に對して密集體形のまゝ接近し不意討にしようとする戰法を取る。

霧が深くて一寸先も見えない。黙々とし唯露をふみしだく靴の音のみが「ザタ／＼」と無氣味に耳に這入る。遙か前方の小山をすこして見ると白軍はそれ／＼の部所につかんとして右往左往してゐる所だ。突然中隊長の疎解の命令が下つて一線に一・二小隊、二線に三小隊が位置する。もう三百位しかないと思はれる程の距離だ。い

よく散開して輕機が唸り出す、小銃が火を吹く一瞬にして突撃に移り敵陣地に突込む、殺氣がサツとあたりに流れる。時恰も午前四時半。

×
×
×

十五分休憩の後、中隊の密集教練に移る。壯烈なる戰闘教練に比してこれは又整然とした部隊教練である。

行進、分列、何れも意氣に満ちた力強さが浸み出して來る様である。指揮官も兵も見てゐる人も皆一元化されて、この快よい朝の大氣の中に我を忘れて動いてゐる様に見える。

(2) 歸路

宿舎に歸つて最後の食事をする。今朝は皆が實に朗かである。或は銃の手入れをしたり、荷物を作つたり、手分けして宿舎の清掃をしたり歸校準備に大童の中にも皆笑顔である。

午前十時集合して旅次行軍で輕井澤へ向ふ。さすがに疲れが出たと見えて車中では居眠りが連發する。學校に歸り着いたのが午後四時。先生方や女生徒諸子の出迎への中を肅然と校門を這入る感激は實に凱旋將軍の感慨にも似たものがある。

結び

この四日間を省みてその成績は「殆ど完全に近い」と言ひ得る位に立派に過し得たと思ふ。

「藝術家なるが故にルーズな事が許される」と言ふ様なともすれば傾き易い誤った考へ方は今や全く消え失せて事々に規律的にそして眞面目にやつてのけられた。皆が快よい想い出を持ち得たと思ふ。

こんなに學校全般の氣分が引き締つて來た原因は種々あらうが第一に各自が時局の認識をはつきりつかんで居る事だらう。それに級友清水君が出征したし、出發の日は家所大佐殿も部隊長として出征されたし教練が我々と縁の遠いものでなくなつてゐると言ふ氣持も

あらう。それにもまして最も我等の心を打つたのは終始一貫して我々と行動を共にして下さった校長先生の御行動である。或は夜間演習の霧の中にも、或は膝をも没するクリークの中にも、押立山の山岳戦にも、常に御姿を拜見した。かうした御教訓が強く我等を鞭打つたのは言ふ迄もない事である。

手前味噌の様ではあるが兎に角、こんな方面からも、立派に報國の出来る社會人としての修養を完成しつつあると言ふ信念を持ち得たのである。終り。

(「音楽」第十九号 昭和十三年十二月 八一〇八五頁)

能樂の傳統を破る “女性のシテ” 登場

音楽學校 邦樂科初の卒業生

昭和十一年六月故松田源治氏が文相時代の置き土産として東京音樂學校に設置した邦樂科は觀世左近(能)稀音家六四郎、吉住小三郎(長唄)中能島欣一、宮城道雄(箏曲)の諸氏を斯界から教授に招いて大きな話題を提供したが、それから三年、松田元文相の遺志はここに實を結んで今度初めての卒業生を送り出すことになり廿三日午後一時から同校で卒業演奏會を舉行する運びとなつた。

榮えの第一回卒業生は清水郁三(大西信辨)、淺見重信(能樂)

松尾清一、中島泰子、東條夏子、鈴木嘉代子、中村睦子、塙越清子(網野操子(箏曲)西垣勇藏、梶菊江、藤江多恵子、遠山美津子、横山芳枝、原澤百合子、橋本たけ子さんら十七名で)いづれも成績良好だが、なかでも能樂の三君はその道でいふ職

分の位置にまで達してゐる堂々たる専門家であるとのことである、卒業生は大體研究科に残つてあと二年間研鑽を積むが、早くも箏曲の松尾君は千葉縣市川の關東學園で教鞭をとることにきまり、また長唄の原澤百合子さんはお師匠さんとして市井に出るといふ

卒業演奏會の演奏種目は觀世流能樂「小袖曾我」山田流箏曲「岡康祐」長唄「鞆猿」生田流箏曲「八重衣」長唄「土蜘蛛」で長唄組は十八日午後三時から神田分教場で最後の練習を行つた

また本年の邦樂科入學志望者のうち能を志望してゐる女性が三人あるが、能樂界多年の傳統は女性がシテを演ずることを許さなかつたのに對し乘杉校長、觀世教授の努力によつて成績さへよければ入學せしめる方針に決定、能が始つて以來初めての『女のシテ』が養成され得ることになつた

乘杉校長談『松田さんによつて邦樂科が新設された當時とやかくいはれたものだが、やつてみれば順調にいつてこの通り卒業生が出ることになつた、志望者もだんく増えてきてをり素質もいゝ、今度の卒業生がどの方面に進むか、研究科へ行くのが大部分だからもうしばらく様子をみなければわかるまい』

(「東京日日新聞」昭和十四年三月十九日)

“觀世” の流れに二女性

邦樂科が彩る上塾音樂學校の春

東京音樂學校の本年度入學試験合格者(豫科五十五名、師範科五
十一名、邦樂科十八名)の氏名發表は一日午後六時行はれたが邦樂科の能樂合格者四名中に二人の女性がパスした

二人はいづれも故觀世左近師の秘藏弟子の淺草區馬道町二の八蒲團商丸山光太郎氏長女里子さん（二九）と澁谷區向山町の故觀世左

近師方大和美咲さん（三一）で

里子さんは府立第一高女卒業後、能のもつ文學と精神修養に魅されこの道に志し故左近師の下に分教場を首席で卒業、家庭ではお能部隊長として弟妹七人を指導してをり美咲さんは愛媛縣立高女卒業後、觀世流を慕つて八年から左近師の内弟子となつたインテリ女性、この二女性は交々語る

『お蔭様で合格しましたが先生がゐらつしたらとそればかりが殘念です、必ず先生の遺志をついでこの道のため一生懸命勉強いたします』

（『東京日日新聞』昭和十四年四月二日）

口紅や、お白粉ご法度

東京音樂學校に「長期戰の曲」

岡田厚生次官から男子學生のイガ栗頭論が述べられ學生間に話題を巻き起してゐる折柄、東京音樂學校では乘杉校長の英斷？で同校の師範科、本科、邦樂科女子生徒二百五十名に『今後は白粉、口紅を用ひるべからず』のお洒落御法度が布かれ、學生自肅ののろしがまづ上野の杜からあげられることになった。

明治十二年音樂學校の前身音樂取調べ掛として誕生して以來花やかな音樂家養成といふ學校の性質上音樂學校の生徒は流行服飾の尖端を行かぬまでも、とかく華美の方で、その昔颯爽と自轉車で通學した若き日の三浦環女史のことなど今に至るまで語り草となつてゐる（東京）

（『大阪朝日新聞』夕刊 昭和十四年六月十四日）

夏休を全廢して 錄後へ送る新日本リズム

東京音樂學校の藝術勤労奉仕

イガ栗あたま斷行紅白粉廢止！の狼火をあげた東京音樂學校がこんどは『音樂勤労奉仕』として録後の日本精神昂揚に資するの明朗健全な音樂をレコードに吹き込み世に贈ることになった

同校の集團勤労は昨夏一週間の合宿訓練で経験ずみであるが今夏

にも言及したもので、近く正式にお洒落御法度のお布れが校内に貼出される模様である

（『東京朝日新聞』昭和十四年六月十三日）

は断乎夏期休暇を全廢し教授とも男女學生約四百名が七月中旬から八月末まで一ヶ月餘を付近の寺院に合宿管樂、絃樂器、プラスバンド、オーケストラと各自専門の猛練習を行ふかたはら男子は軍事教練、女子は薙刀術で體位向上を計るほか名士の時局訓話も織り込み、レコード吹込みは從來の代表的日本歌集から特に嚴選したものばかり、吹込期間は七月十一日から十五日まで、洋樂科選定歌は

一、明治天皇御製歌

一、大日本の歌（同校作曲）

一、日本の秋（下總院一作）

一、婦人從軍歌（同校編曲）

一、勇敢なる水兵（橋本國彦編曲）

一、かもめ（下總院一作曲）

このうち明治天皇御製歌には箏曲三絃かもめには箏曲と洋邦樂生約三百名が合奏、合唱するといふ豪華さで指揮者は下總院一、木下保、澤崎定之、橋本國彦教授と名譽の隻手教授伊藤武雄氏である

邦樂科でも近く曲目を選定吹込むわけでこの“象牙の塔”的神祕の調べがやがては銃後の人々の耳に、心に緊張一人のひゞきをつたへてゆくのである

（『讀賣新聞』昭和十四年六月二十四日）

上野に管絃樂部
松田文相時代に邦樂科を設置した上野の音音樂學校では時局の進展

に鑑み、明春から管絃（オーケストラ）部を新設する事になり、この豫算を計上、文部省では目下大藏省と折衝を進めてゐる。

科目は木管樂器（フリュート、オーボー、クラリネット、バズー）金管樂器（ホルン、トランペット、トロンボーン）絃樂器（第一、第二ヴァイオリン、ヴィオラ、セロ、コントラバス）打樂器科等で樂長格に當る教授一名の外樂士に當る助教授六名助手九名といふ陣容、豫算が承認されば明春より三十五名を募集する

（『東京朝日新聞』昭和十四年九月九日）

振袖捨てゝ制服姿 六十年の傳統破つて

上野音樂學校女生徒に時局の風

派手な振袖に紫紺の長袴、フェルト草履といふ六十年の傳統を斷乎破つて、こんど上野の音樂學校に女生徒の制服ができた。男の方は先刻すでに背廣の制服があるが、女生徒の方は昭和五年洋裝が許されて以來、和裝、洋裝色とりどりこれでは「服裝の簡易化」が叫ばれる時局下、ましてやこの夏あつさり青坊主に自肅した男生徒の手前も面白くなからうといふのが乘杉校長の“斷”の理由だ

新制服は純毛紺サージのワンピース、白襟つきといふスマートなもので一着廿五圓也、學校當局のご自慢によるとデザインのはしにも傳統を誇る上野好みの和風趣味が加味されてゐるといふ、今後は演奏會にもこれが正式の服裝になるわけで、廿二日同校でひられた學友會の演奏會にデビューしてアツといはせたが、來月廿三、四日日比谷でひらかれる開校六十年祭の大音樂會には“制服の處女”二百六十名のビッグ・パレードで滿場を壓しようとい

ふ

乗杉校長の話『當分は制服と呼ばずに規準服といふ形式で、時局

柄強制はしません、派手くらべがなくなつたわけで研究科の生徒

や卒業生たちもこれにならふでせうから樂壇としても大改革です

ヨ』

(『讀賣新聞』昭和十四年十月二十六日)

“盛典”を全國へ

A K の奉祝放送陣

大日本放送協會では奉祝プロの編成を終り盛典中継放送にも萬全の準備を整へてゐるが式典に參列出來ぬ全國各地の同胞に送るプログラムは既報の如く十日の式典は午前十時四十分から十一時五十分迄天皇、皇后兩陛下出御、開式奏上最敬禮、君が代奉唱、近衛、首相の壽詞奏上、紀元二千六百年頌歌齊唱、萬歲三唱、最敬禮、終了奏上天皇、皇后兩陛下入御までの皇國歷史上永久に記念すべき式典の實況を宮城外苑から島浦アナウンサーが中継する

十一日の二千六百年奉祝會は午後一時四十分から三時迄で天皇、皇后兩陛下出御、開會奏上、最敬禮、君が代奉唱、奉祝詞奏上、

開宴一、紀元二千六百年奉祝舞樂「悠久」二、吹奏樂「大歡喜」

三、同「二千六百年頌歌行進曲」四、同「奉祝讚歌」奉祝國民歌「紀元二千六百年」齊唱、萬歲奉唱、閉式奏上、天皇、皇后兩陛下入御の御有様を同様宮城外苑から安齋アナウンサーに依つて中

感激にふるへる盛典の模様を全國に傳へることになのだ、又同協

繼

會では十日から十六日迄一週間夜の講演並びに演藝の時間を奉祝特輯番組とし朝と夕方の子供の時間を奉祝週間にすることになつた

榮の奉唱團 感激の待機

悠久二千六百年を壽き奉る曠古の式典當日、謹んで「紀元二千六百年頌歌」を奉唱する東京音樂學校生徒は男子一四〇名、女子二六〇名の合計四〇〇名で、何れも感激のうちに、上野の同校講堂で練習を重ねた結果、八日を以てすべての準備を終へ、あとは晴れの日をひたすら待つのみとなり、また翌一日の奉祝會場で、奉祝國歌「紀元二千六百年」を謳唱する齊唱團は第一集團六六〇名、第二集團九一六名、第三集團一四五五名の總計三〇三一名の大合唱團でこれに參加する者は全國津々浦々の府縣の代表者や東京、帝大を始め全國の大學、高等學校、男女專門學校、師範學校、また小學生代表としては東京市内の小學校から男女兒童各八九名宛が選ばれて、既に各校毎の練習を續けてゐるが十日の午後二時からは神宮外苑競技場で最後の綜合練習を行ふことになつた

(『國民新聞』昭和十五年十一月十日)

東京音樂學校「報國團」には各校と同様教職員、學生を打つて一丸の修練體制を布くことに變りないが、日頃の音感教育を特に役立たせる爲に國防訓練部で防空聽音電信、電話、ラヂオの發信、受信、信號の研究と訓練を取り上げてゐるのが注目される

(『中央新聞』昭和十五年十二月七日)

高鳴る答禮樂曲

「海道東征」音樂學校で吹込み

曠古の式典『紀元二千六百年奉祝式典』を樂符に寄せて壽いて
來た盟邦ドイツのシュトウラウス、イタリーのピエツティ、ハン
ガリヤのヴエレッヒュ、フランスのイーベル四氏に對し日本文化中
央聯盟では昨報の如く心からの謝意をこめた樂符の答禮を決定、奉
祝藝術祭に演奏した曲のなかへら北原白秋氏作詞、信時潔氏作
曲の交聲曲「海道東征」を贈ることとなり同曲は十一日午前九時
から上野東京音樂學校演奏場で同校教授木下保氏指揮のもとに同
校管弦樂團五十名、男女合唱團百七十名によりレコードに吹込まれ
た

レコードは近日完成次第直ちに奉祝會や聯盟等わが朝野の謝意を
こめて前記四氏に寄贈される筈である

(都新聞 昭和十六年一月十二日)

樂器持つ手に銃

音樂學校の臣道實踐

音樂學校の職員、生徒がタクトやヴァイオリン持つ手に銃やレ
シーヴアーを持つて、いざといふときの用意のため練成されるとい
ふ非常時風景——上野の東京音樂學校では一般學校の學友會の廢
止に順應して學友會を改め、この四月新學期から

臣道實踐 職域奉公の實を擧げる目的の下に報國團を結成した、
その機構は總務部、鍊成部(鍛鍊班、訓練班)文化部(學術班、
演奏班)生活部に分かれ乘杉校長を團長、生徒主事、教職員が各

部長、班長となり連絡、實行指導の任に當る、鍊成部の鍛鍊班では
質實剛健の氣を涵養するため體育運動や勤勞奉仕の作業に從事し、
訓練班にあつては狙擊、防空、聽音、電信、電話、ラジオの受信發
信

信號等の研究、訓練をなし、文化部の學術班では一般知識の
吸收、演奏班は音樂の修業をなすと共に年數回に亘つて發表演奏
會を開催し、生活部では職員生徒の生活各般に亘る指導を行ふ
ものである

尙この報國團の結成記念演奏會が卅日夜日比谷公會堂に開かれ教
職員生徒を動員して邦人作家の作品のみを選んで上演することに
なつた

「特別攻撃隊を讃へる歌」音樂學校で作曲

圓盤は五社で普及

眞珠灣に散つた特別攻撃隊九軍神の盡忠報國を歌曲によつて永
世に傳へるため本社が日下一般から募集中の「特別攻撃隊を讃へる
歌」は早くもその壯舉に應へる感激をこめた應募作品が殺到してゐ
るがその當選歌の作曲についてはとくに上野の東京音樂學校に委
嘱、同校作曲科教授を動員し、音樂報國の熱誠こめた名作を生み
出すことになつた

また同歌の普及については全レコード會社が協力することになり
十一日本社にコロムビア、ビクター、キング、大東亞(舊ポリド
ール) テイチクの五社が參集、海軍省軍務局第四課の濱田小佐を

迎へて種々打合せをとげた、なほ應募締切は三月廿日、宛名は本

社企畫部（封筒に「應募歌」と朱書のこと）

（讀賣新聞 昭和十七年三月十一日）

國都に芽生える

遠 藤 宏

敵機來襲について

四月十八日は朝未明に警戒警報が發令せられたので警戒して居つたが、午後零時半遂に空襲警報の發令を見るに到り、殆んど同時にノース・アメリカンらしい大型飛行機がアメリカ機のマークもハツキリ認められた程の低空飛行で、非常に大きな爆音と共に本校屋根上數メートルを北から南へ駆進し、高射砲の音もあちこちに聞えたので敵機の本土空襲を知つた。本校職員生徒は即刻豫ての訓練通りの部署に着いて再度の來襲に備へたが、其後は何事もなく午後三時三十八分空襲警報の解除となつた。此日は午後一時から上野兒童學園の授業もあり、明治天皇上野公園行幸記念會及下谷區役所主催の櫻魂祭記念演奏會の催もあつて、已に演奏の準備もでき、全國中繼に付放送局員も待機して居り、間もなく閑院若宮妃殿下並に李鍵公妃殿下の台臨あらせられる筈であつたが、警報發令と共に直に右演奏も授業も中止と決定、それぞれ其の手續きをすませ、兒童は一時校庭の防空壕内に收容したが、其中途中危険のない事も考へられ省線電車も運轉を開始したので、職員が上野驛迄兒童を見送り歸宅せしめた。此日來襲の敵機九機を擊墜したが我方にも多少の犠牲を出した事は實に遺憾であつた。しかし各校報國團並に隣組防空群等の活躍も目覺しく頼もしい限りであつた。

（「同聲會報」第二六二号 昭和十七年五月 五八頁）

八月九日満洲建國十周年慶祝音樂使節團の一員として大連に上陸して以來、旅順、新京、哈爾濱、奉天、平壤、京城を経て帰つて來た。

東京音樂學校の合唱と管絃樂が海を渡つたのは今回が初めてだし、それに國家的使命を帶びてゐたため各地における慶祝演奏、皇軍慰問演奏、學生、生徒のための演奏等廿数回はいづれも多大の感激と興奮をもつて迎へられた。一般公開演奏の場合でも會場外に溢れた來聽者は無数であつた。マイクロフォンを使用して場外の人々にも聽かせてあげた。黃金山下の公園の廣場の大群衆、白系露人の多かつた大連會場外の森などを思出す。文化の力を何の説明もなく、直感的に感動せしめるには音樂が一番いい。音樂をもつて日本の光を輝かし、またその光に浴せしめ得たと私は信じてゐる。

哈爾濱には音樂の好きな白系露人が十万もある。彼等は彼等の哈爾濱交響樂團を世界一と思つてゐると聞かされた。所が彼等も信時潔作「海道東征」、橋本國彥作「交響曲、二調」、ベートーヴェン作第五交響曲その他を熱心に聽きに來た。巴響の團員は心から親切に演奏の世話をしてくれた。

忘れ得ぬ印象は、日没時のゾンガリー河畔のヨツト俱樂部で私達のために特別出演してくれた男聲合唱の数々であつた。彼等は日常実務に就き好きで歌つてゐるのださうだが、その中に一人バランスのすばらしい歌手がゐた。旧教寺院の鐘の音、キタイスカヤ街

を馳せる馬車の鈴の音も亦思ひ出深い。昔を知る人の話では街はまたなくなつたさうだ。しかし、歩道の石の上に寝てゐる貧しい満人も何にか自然な氣がした。

報道部に勤務する友人紙恭輔少尉とめぐり合ふ。浪曲、万歳、アツコーディオンと流行歌手も皇軍慰問にはならうが、感激に溢れた藝術的音樂が必要だと話し合つた。十六日（日曜日）の新京での一般公開演奏にまで若い皇軍將兵の來會者の多かつた理由もよくわかるのであつた。今は一等兵のバスの中山悌一君なども母校の演奏會に馳せ参じた一人であつた。

國者新京——この雄大な都市には主として希望を述べたい。巨大な文化の歩みを見せてゐる滿映を初めとして、放送局も滿洲蓄音器會社も音樂文化のためには非常な努力を拂つてゐる。市公署のオーケストラは今回滿映の副事業に移り、内地よりも優秀な音樂家をむかへて山田耕作氏の指揮で慶祝演奏を行ふことになり既に練習を開始してゐた。樂團の前途を祝福したい。新京では音樂學校設立案が眞面目に考へられてゐた。内地から優秀な藝術家、教育家が参加することを希望してやまぬ。うるさい樂壇の一部分たりとも渡満させてはならない。

（筆者は東京音樂學校教授）

（東京日日新聞 昭和十七年九月十三日）

律と服従との下に挺身以て臨戰體制の一翼たらん事を期するものである。已に八月七日、十四日、十五日の三回に亘り在京男女生徒を召集して學校長より種々訓示する所あり、引續き消火法、救急法、毒ガス弾、爆弾、燒夷弾等の知識、防毒面着面法等の講習を行ひ、更に八月廿八日より毎日職員と男生徒全部を召集し防空壕工事、耕作、教練、合唱、ブラスバンド、管弦樂の勤勞作業を行ひ流汗淋漓として若人の意氣を發揮しつつある。九月十一日からは女生徒全員もこれに加はるが、十一日當日は報國隊結隊式を舉行國旗掲揚、宮城遙拜、君か代奉唱、默禱の後隊長訓示、本部長の「誓」、閱兵を行ひ、引續き學校より靖國神社に向ひ行軍、職員、男女生徒一同同神社に參拜を行ふ。

報國隊は本隊と特別警備隊とより成り、本隊は二個大隊、第一大隊は男生徒で二個中隊、四個小隊、十五個分隊より構成され、第二大隊は女生徒で五個中隊、十個小隊三十六分隊より構成され、他に本部が設けられてゐるが、この幹部は左の通りである。

隊長 乘杉學校長

本部長 山下主事

本部員 高折、川上、馨、遠藤、妹尾教授、町田事務官、三橋

配屬將校、豊田教官

本部 本部員 高柳、高橋、津田書記、金谷技手、井出、窪田囑託、

山崎、長谷川、齊藤雇

第一大隊長 妹尾教授（附）吉田助教授

第一中隊長 城多助教授（中山富補助）

第一小隊長 柴田囑託（高田富補助）

第二小隊長 山本囑託（渡邊補助）

東京音樂學校報國隊の結成

今般文部省の指令に基いて本校報國團を強化する爲に東京音樂學校報國隊を結成し職員生徒全員を隊組織に編成した。

これは吾等が父祖より傳承せる盡忠報國の精神を具現し厳格な規

第二中隊長 橋本助教授（中山悌輔助）

第一小隊長 鈴木技手（中田補助）

第二小隊長 藤井囑託（栗本補助）

第二大隊長 真篠教授（附）田中教授

第一中隊長 風巻教授

第一小隊長 井上助教授

第二小隊長 小澤助教授

第二中隊長 福井教授

第一小隊長 細川助教授

第二小隊長 今井助教授

第三中隊長 井口教授

第一小隊長 水谷助教授

第二小隊長 永井助教授

第四中隊長 平井教授

第一小隊長 下總助教授

第二小隊長 永田講師

第五中隊長 澤崎教授

第一小隊長 木下教授

第二小隊長 橋本教授

（『同聲會會報』第二六〇号 昭和十六年六・七・八月 一三一～一五頁）

の演奏會が如何なる意味を持つてゐたものか、又如何なる雰囲氣をそれが醸してゐたのか、想像に難いだらう。現在でも時々この昔馴みの奏樂室で同校の卒業式の演奏會の如きものが開かれてゐるやうだが、それで華やかなりし旺時を想像しようとしても、それは無理な話である。上野奏樂堂の演奏會は、既に述べたやうに、その内面的な意義は勿論のこと、その外的的な情況迄が、即ち出演者の顔觸れは申す迄もなく、聽衆の層から奏樂堂の外貌迄が今ではすつかり變つてしまつた。

尤も、さうは云ふものゝ、この内で一番變化を見せてゐないのは奏樂堂それ自體だが、それでも局部的には相當改變の遺が窺はれる。今の奏樂堂は、あれでも以前より餘程綺麗と云ふより清潔になつてゐる。乘杉氏が現校長に赴任された頃にあの壁と天井の梁や窓枠が塗り變へられたやうだし、それから疊込たたみみの机の如きものが附いてゐる聽衆席の長椅子も、それと同じ頃に新設されたと想ふ。更に舞臺の前面で時折そろりくと引かれる例の田舎芝居の引幕は元來は無かつたのだが、現校長以前に多分クローン氏の指揮でベートーヴェンの第九交響曲が初演された頃、あの舞臺をもう一間ばかり聽衆席の方へ張出した時に、前後して取付けられたものであつたらしい。舞臺は以前は現在よりもつと狭かつた。これは上野で組織してゐた管絃團が成長して段々大物を手掛けるやうになるにつれて膨脹する樂員が今迄の演臺には乗り切れなくなつた爲、遂に舞臺それ自體迄擴張せねばならぬことになつたからである。さう考へると、あの演臺の繼足しは、吾が國の管絃團發達史を象徴してゐるこ

自傳四

野 村 光 一

四 上野奏樂堂の想ひ出

日比谷の公會堂や青山外苑の日本青年館邊りで音樂を聴いてゐる今日の若い人々には、一昔、二昔前の上野音樂學校奏樂堂

となるのであつて、私の知れる限りでもこの約三十年間に一度擴張されたから、それ以前にも行はれたことがあつたらう。兎に角、昔はもつと狹隘だつたと想像される節がある。その外、舞臺正面の壁の龕の中に安置されてゐるパイプ・オルガンは、徳川頼貞公の寄附になれるイギリス製品であつて、元來は麻布の舊尾張邸内南蔡文庫の奏樂堂に設置されてゐたのを、關東大地震でこの建物が大破して取毀しの止むなきに至つた際、上野に寄贈されたものであることは周知のところである。従つて、あの同琴は、奏樂堂内の備品中では、現在用ひられてゐる、ベツヒシュタインのコンサート・グランド二臺と共に最近の設備になるものだが、様式が古く甚だ取扱ひが不便である爲、今では實用に供給され難いと云ふことで、結局床の間の置き物になつてしまつたのだが、あの置物がない時代の華やかな活氣ある演奏會を知つてゐる私には、見た目には古めかしいが、あれは矢張り無い方が昔らしくて良いと思ふ。それと同じ意味では、取り變つた長椅子も、例の引き幕も、更に壁や窓の塗り變へも、餘り有難くない。今よりももつと穢らしくて素朴だつた昔の奏樂堂の方が、これも昔の粗笨な同校管絃團や、昔の教師、ピアノのショルツ氏、指揮者のクローン氏などの何處か髣だらけのブームスの肖像畫を想起させるドイツ人の質朴さの風格と共に、親しく想はざるを得ぬ。ところが、それ等は今日一切合切あの奏樂堂から消え失せてしまつたのである。(中略)

逢ふ人々は、樂壇の或る一部の御常連を除いて一般聽衆中常々
顔知り越しの人は殆んど居ない。斯ふ云ふところから考へると、現今の聽樂層は甚だ不安定であつて、新響の如きそれが最も尠くて然る可き最高の藝術鑑賞機關に於てすら、聽衆は三四年内に入れ替つてしまふものらしい。且つ、その層も種々雑多な階級と云ふ風で、これでは映畫館の顧客と相去ること遠からずなのである。然るに、昔の上野奏樂堂ではまるで陣容が變らない。何時行つても同じ人達ばかりだ。尤もこの同じ人達も五年とか六年とか或ひは十年も経つ間には何時の間にか消え去つて、別の人達に入れ替つたが、兎に角この狭い奏樂堂に集つた之等の見覺えのある人達は、音樂に對して熱愛を持つてゐたインテリ層のやうであつた爲、私に特殊のしたしさを覚えさせ、惹いては斯ふ云ふ人達と一緒に光輝と威嚴のある上野の演奏を聞くことは、今日、日比谷の公會堂で、種々雜多な聽衆と共に新響を聞くのとでは全く異つた、俗塵俗臭の感じがしない、藝術的洗練性と親睦性を満喫させられたのである。斯う云ふなつかしい雰圍氣が今日の樂界から消滅してしまつたこと

は、實に歎しい。〔中略〕
扱て、上野全盛時代の根幹をなす同校附屬の管絃團であるが、これは現今日比谷邊りに於て見られる陣容になる迄には、樂員の上にも指揮者の上にも幾多の變遷を見せたのである。私が上野詣でをし出した大正四五年頃は指揮者がクローン氏、樂員は絃が職員諸氏であつたが、管は殆ど全部海軍軍樂隊の樂手であつて、その中に一二ちらりほらり上野系が混入してゐるに

過ぎなかつた。この管の海軍依存主義はつい近年迄繼續され、日比谷に進出してからでも相當續いたが、授業科目に管の部門が設置され、その方面に専門にする人が出現するやうになつてから、海軍からの協力を仰ぐことを斷然中止したのは上野の大英断である。けれども今だにその結果が目に見える程上つてゐないのは、如何なる譯であらう。それは兎に角、長年月に亘る管の海軍依存主義が上野管絃團の發達を阻害したこと極めて明瞭であつて、同團發育不完全の原因は外にあるが、管が折角或る時期の間薰陶してアンサンブルもソロも多少巧くなつたと思はれる頃に海軍の都合で新研究生と交替せざるを得なくなると云ふ特殊事情が、この管絃團の發達を毒したことは甚だ疑へない。然し、當時は陸海軍軍樂隊以外には管樂器の吹奏者を求むるよしなき時代であつたから、上野が吾が國唯一の管絃團結成に、管を海軍に依存したのは止むを得ざる處置で、これは吾が管絃團發達史に於ける過渡期の一現象として容認す可きことであらねばならない。けれども、斯様にして音樂學校が海軍軍樂隊を管絃樂演奏で訓練したことが、後年彼等をして新交響樂團始め都下の諸管絃團の奏手として華々しい活躍を行はしめる素因を醸したとも看過し難き事實であつて、上野は結局管のパートに於てはそれ自體の裡に何等實を結ばず、それに後續して樂界に意義ある活動を行つた他の管絃團に大なる收穫を上げることとなつたのである。この見地から計れば、それ自體の成果は兎も角、上野の音が管絃樂界全般に及ぼした功績は、實に計り知れざる程盡大だと云はねばならぬ。(中略)

斯ふ云ふなつかしい姿も今ではもう見られない。想へば上野の管絃團も永い間に隨分烈しい變りやうをしたものである。

(『音樂公論』第二卷第五号 昭和十七年五月 九八〇一〇五頁)

海鷺志願音樂學徒の決意

戰ひは日に日に苛烈を極め、生産力の膨大を唯一の據り所として我に反撃を加へんと奮鬥する敵米英は、今や全學生を總動員して航空決戦挑んでゐる。この決戦の秋に際會し、我が學生も續々或ひは海鷺に志願して、質的に敵を壓倒せんば止まぬ決意を示してゐる。そのなかにはかつては戰争に縁なき衆生かの如く目されてゐた音樂學生の力強き蹶起も數多く認められる。われわれはいまそのなかから二三の海鷺志願音樂學徒の堅き決意を聽かう。——編輯部

東京音樂學校研究科一年 伊 達 良

小さい頃から兩親や先生に何かしら世の中のお役に立つ人間になれる様に教へ育てられて來た僕は、現在まで自分で擇んだ道、音樂でもつて世の中の爲に盡す決心でその勉強に努力して來た。然し今我が祖國は、敵米英撃滅のために若い男を、學生を、軍人として一人でも多く要求する時代なのだ。この非常の秋、幸いに強い肉體に恵れた自分は何を抛うつても、大君の御楯となつて祖國を護り敵米英を一刻も早く打倒して御辰襟を安んじ奉るに微力のすべてを捧げたい心に燃え上らずに居られない。

兄の純は、自分にも増して音樂を熱愛し、殆ど音樂に溺れる位音樂に没頭してゐたが、一度お召しにあづかるや、全く喜び勇んで凡てを捨てて出で征き、今は中支の戰野にあつて、自身も戰場の空の

下に居る幸福を感じつゝ銃をとつて戦つてゐる。

自分は、此度、今まで赤子として育てゝ下さつた天皇陛下に對する一番の忠の道であり、兩親に對する一番の孝の道であり、先生に對する御恩報じと考へ、又兄に對する愛の一つだと信じて海軍豫備學生を志願する決心をしたのである。

敵米英撃滅が果され、彼等が無條件降伏した後再び自分に音樂を勉強する事が許されるならば、其の時こそ自分には今よりももつと強いもつと偉大なもつと高潔な音樂が與へられ、それでもつて我が日本の音樂のために盡し得ることを信する所の者である。

(『音樂公論』第三卷第八號 昭和十八年八月 六四～六五頁)

堂々霜柱を蹴つて 銃とる乙女ら

音樂學校の耐寒教練

肩、々々に揃へた銃先も勇ましく、早朝の霜を蹴つて進軍する時ならぬ女子部隊、氷のやうな鉄の床尾をグツと握りしめて、潤歩する隊伍には、皇國の乙女の血潮が強く脈打つてゐる、東京音樂學校女生徒の耐寒軍事教練だ

二十六日朝七時すぎ霜柱立つ校庭で、まづ一年生五百名の乙女部隊の基本訓練が始つた、列にまじつた乘杉校長も一々生徒の手を取つて教官の助手を相勤める

寒さに痺れた眞赤な手に力をこめては銃身を柔かな肩に叩き込む「擔へ銃」「立て銃」の反復だ、琴を爪彈き、ピアノの鍵を叩く日頃の調子とは違つても、教練の精神は教室の精神と變りはない、たちまち要領を呑み込んで、やがて部隊は東照宮參拜へ、堂々

＼の行進を起した……

(『東京朝日新聞』 昭和十八年一月二十七日)

野營演習及集團訓練

七月十二日—二十一日

昭和十八年度野營教練は七月十二日より十六日に至る四泊五日間長野縣輕井澤に於て馨、橋本、三浦、鈴木外各教官統率の下に男生徒百六十餘名によつて行はれ十六日午後三時無事歸校した。其間女生徒は多摩行農場三島農場の作業及各種教練行軍救護訓練看護學等を行ひ、帝室博物館、演劇博物館の見學等をなした。

霞浦航空隊慰問と見學

支那事變から大東亞戰爭へかけて海鷺の赫々たる戰果は世界の驚嘆する處、一億國民齊しく感謝と感激とに燃える秋、音樂を通して國民感謝の至情を捧げると共に將來皇國民の鍊成の重責を擔當すべき本三、師三の最高學年生徒をして海鷺魂に直接觸れしむることは、決戰下最も意義ある事なので、母校では乘杉校長作詞、橋本教授作曲「英靈讚歌——山本元帥に捧ぐ」を提げて管絃樂部と共に一行百六十餘名は去る七月二十二日七時上野驛發十九時七分歸着をもつて霞浦並土浦航空隊の慰問と見學とを實施した。

荒川冲下車六臺の大型バスに分乗、「霞空」に到り九時講堂で副長兼教頭の前田大佐から挨拶を受けた後、會てこゝに勤務され海軍航空隊の基礎を作られた故山本元帥の提唱に成る「霞ヶ浦神社」前に一同額づき、合唱「海ゆかば」を奉納、次で灼熱の太陽下の飛行場にて○○大尉、△△中尉さては××少尉等々實戰の勇士から航空

術その他詳細にして懇切な説明を聽いた。斯くてこそ此所から世界

を震憾させ米英の青い目玉を顔色ながらしめ有史以來未曾有の大戦果を錄しつゝある勇士が雲の如く出たのだと思つて感慨を新にした。

晝食は一同兵食の響應に預り十二時二十分より十三時四十分迄慰問演奏。新築中の○○を會場として聽衆は將兵約○○○名、誠に決戦下らしい演奏會である。

「大東亞戰爭海軍の歌」「海軍航空の歌」——唱ひ方指導も併せ行ふ——其他數曲の後「山本元帥に捧ぐる英靈讚歌」は管絃樂伴奏で橋本教授指揮の下に演奏。聽き入る將士達に對し實に大きな感動を與へた。一般聽衆が受ける感じとは別な——元帥の直接部下であつた將兵にとつては現實的に如實に、切實に迫つてくるものがあるからであらう。

「この演奏を聽いて、海鷺たちは從前の何層倍かの戰果を擧げる

こと必定です」と某海軍大尉が感慨を漏してゐた。音樂、敵機を擊墜し、敵艦を轟沈す。まことに音樂は軍需品である。これ程具體的に大なる音樂報國が他にあらうか。

かくて感激裡に演奏を了り十四時から十五時半迄土浦航空隊を男女二班に分れて隅々まで限なく見學。訓練の關係上演奏は行はなかつた。十六時霞空に戻り一同夕食の接待を受け、前田大佐等の見送りのうちにバスに分乗、十七時三十二分發にて歸京した。

(『同聲會會報』二六五号 昭和十八年九月 二〇~二二頁)

音樂學徒の出陣

學徒諸君の出陣の日は來た。

この出陣學徒の中には勿論澤山の音樂學徒諸君がある。私はこれらの諸君に對して特に一言したいと思ふ。

由來音樂は往々にして有閑徒輩の遊びごとのごとくに思はれてゐたが、事變この方その眞價が追々に認められ、藝術としての音樂以外に、それがいかに力強く直接軍隊に働きかけ、又いかに銃後國民の精神作興に役立つたかは今や萬人の知るところとなつた。しかして今や更に諸君の位置は一轉して直接大君の御楯として召し出さるゝに至つた。諸君の責任は重大なる時機に直面したといはなければならぬ。諸君の今まで學んで來た音樂とは何ぞや、單にピヤノを彈じ、歌を歌ふことだけであつたろうか。否々それは末葉である。その奥底にひそむ精神力の發揮こそは眞の音樂者のつとむべき使命であつた。

諸君は實にかかる教育を特に學んで來た筈である。其處にこそ音樂學徒の信仰があり、矜持があることゝ思ふ。しかして今や諸君はその信仰と矜持とを實踐の上に現はすべき時期が來た。敵米英の前に敢然として立ち、大君のために、戰ひに戦ひぬき、勝利の榮光を收めて大東亞の建設を達成しなければならぬ時期が來たのである。今こそ諸君の精神力を現さん時である。いかなる他の方面の學徒よりも優れた精神力を現し、天晴れなる武勳を顯はすべき時である。以上は精神力方面より見たところであるが、更に實際的方面より見るも音樂學徒は自から他の學徒諸君とは異なりたる特徴を所有してゐることゝ思ふ。即ち諸君は音樂教育そのものゝ所産として極め

て鋭敏なる聽覺を所有せらるゝ筈である。しかして此の鋭敏なる聽覺は現代の戦争に於ては重大なる役目を果すこととなるのである。現代戦争の機械化に伴つて飛行機、潜水艦の如き兵器の操作は凡て鋭敏なる聽覺を必要としてゐる。其の他電信機、火砲等にしても等しく鋭敏なる聽覺を最も必要としてゐる。これは皆諸君の特殊の才能、技術を活用するに最も好適なる場所である。現今の戦争はあらゆる點に於て眼でだけではなく耳の戦争に移りつゝある。

音樂學徒諸君、崇高たる任務の前に諸君の前進すべき光榮の門は開かれた。さらば征け、我等は謹んで諸君の武運長久を祈るものである。

(小 松 耕 輔)

(『音樂文化』第二卷第十一号 昭和十九年一月 一頁)

職場に活かす “音感”

東京音樂學校の女子挺身隊

日立製作所○○工場に鋭い音感を働かして鑄物の良否を聞き分ける優秀な“音感女子挺身隊”が現れた、鑄物の山にモンペの足をつゝ込んで金槌、片手に鑄物の成品を叩き続ける姿は普通の検査工と變りはないが、槌の響に應じてキラリッと光る理智の眼、手捌きの柔かさに特徴がある、東京音樂學校挺身隊がピアノや三味線で鍛へた得意の音感を職場に生かす、これは専門學徒動員の一駒鑄物に洲があるかどうか、品質の良否を音で聞き分ける検査工は一人前になるのに少くとも半年はかかるといはれるが、音樂學校卒業者ばかりで組織するこの挺身隊は、去る十一日入所したそ

の日に検査のコツを覚えてしまひ、まだ半月だといふのに一人前以上の働き、いまのところ隊員八名が“人間聽音器”的威力を發揮して検査をもり／＼推進させてゐるが、近く後續部隊がどしきはいる豫定

工場から隊員の働きぶりを聞いて氣をよくした音樂學校では乘松校長以下教授連がさきごろ慰問激励に乗り込んだ『ほんとに働き甲斐を感じて疲れません』言葉少く答へて必死に働く隊員達、『僅かに皆の人相が違つてしまつた、青白いあの顔が見るからに強く逞しくなつた、これを戦ふ面魂といふのではなかろうか』と乘松校長もほと／＼感に堪へぬといつた表情でいつまでも立ちつくしてゐた

(朝日新聞 昭和十九年四月二十七日)

聽覺と戰力を説く楳田教授

サイパン激闘、中部太平洋侵攻の敵邀撃等まさに今や超非常の決戦のとき、記者は鬱蒼とした綠樹に圍まれて静まりかへつた帝大醫學部内の奥まつた一室に「音樂は戰力なり」といふ發聲學の權威者帝大教授楳田博士の熱論を訊く。

× ×

如何なる科學兵器、精密機械といへども、結果に就ての最後の判定は、常に人間の感覺器官に頼らなければならない。そこで五官器のうち直接戰力として働くのは視覺と聽覺だが、その中でも夜暗、雲霧等の條件で妨げられやすい目に比較して耳の活動範囲は非常に廣く殆んど有通無碍である。即ち聽覺は、唯一の戰力的感覺器となつてくるのである。

かう云ふと或る人は「電波兵器が聽覺よりも一層有效な働きを持つてゐるのではない」といふかも知れない。しかし、電波兵器は海水の中では殆んど無力である。空氣中でもこれを妨害するのに色々な方法がある。かういふ際にも充分使用しうるのは聽覺のみである。そこで聽覺の鍊磨を目的とする音樂が近代戦では戰力そのものであると言つても決して過言ではないと思ふ。なかには飛行機の速力が音響の速度に近いものとなつて來ると空中聽覺器などは用をなさないと云ふ人々があるが、それは變んな話があつて、たまには敵の飛行機がまさに聽覺器めがけて飛んで來るといふやうな場合があつて、音を聽き得た時には殺されてゐるといふやうなことがあるかも知れないが、それは極めて稀な例外的偶發であつて、その時でも他の聽音器では悠々敵機の方向は勿論、速度その他をも測定することができるるのである。聽覺の必要は將來益々増大する。

×

私はいま、戰時研究員として「聽覺と戰力」といふことを主に實驗してゐるが、音樂的に訓練された耳が水中に於ても空氣中に於ても驚くほど優秀な結果を擧げ得るといふことだけは既に斷言することができますのであって、在來流布せられた樂音で訓練した耳は、「戰爭音のやうな雜音に對して全く用をなさないであらう」といふ憶測が全く根據のない誤りであることを實驗によつて知つたのは誠に本懐である。

音樂で修練された耳が、激しい雜音の中にあつて、他の遠距離にある微音を聞きわけ、音感覺によつて敵機、敵艦の種類、方向、速度等の認識を如何に精密に判定してゐるかは今次大戰の終結後、聲

を大にして發表せられる機會があると思ふが、これはたゞ洋樂のことだけではない。日本音樂の三味線などにしても、演奏者が瞬間的に撥音と稱する打擊音の中から音高は勿論、微妙な音色をも容易に把握し得る能力は、正に戦力的なものであつて、この方面の時局的应用もまた極めて大切である。（文責在記者）

航空機の爆音と小幡博士

近代戦の花形は何と云つても航空兵器であらう。今次大戰下に於ても航空兵器の長足な進歩と共に、近時益々重要視され、いろいろな角度から研究されてゐるもの一つに「音響に關しての問題」がある。

そこで記者は敵サイパン上陸の憤激に湧く警戒警報下の某日、我國音響學界の泰斗理學博士小幡重一氏をお訪ねして粒々たる辛苦の御研究についてお話を伺ひして見た。

博士は明治四十三年東京帝大物理學科を出られると直ちに遞信省電氣試驗所に入り、大正十年まで丁度十二年間ここに居られた。學位を得られたのは大正九年で、その當時の御研究は音にはあまり關係のない「電氣測定」であつたが、もともと音樂が非常に好きであった博士は電氣試驗所から航空研究所へ移るに及んで同研究所の完備した大施設に着目し、早速この大施設を利用して『音響』の研究を開始したのである。

廣大な航空研究所の一室にどつかと腰を降ろされ、研究書類の整理に餘念のなかつた博士は記者の往訪を非常に愛想よく迎へ入れて下さつた。そして記者の問ひに對してもはつきりと、てきぱき應答

され、まことに決戦下の科學者らしい賴もしさが感じられて、限りなき力強さが思はれた。

「音樂が兵器として利用され、熱心に研究され出したのは第一次歐洲大戰からで、大砲の音によつて敵砲の所在地を發見したり、或は潜水艦や飛行機の位置を發見することなどの研究は第一次大戰の時にも盛んに試みられたのであります。一方ラジオ、トーキー、蓄音器レコードの電氣吹込みなどの大進歩によつて、この方面からまた音響が非常に關心を持たれる様になりこの兩面からの研究が相俟つて非常な進歩を遂げて來たのであります。

特に今次支那事變から歐洲戰爭、大東亞戰爭と戰局の進展について音響の方は更に長足の進歩をなしつつあるの現状であります」

ここで記者は音樂に關しての面の御研究に就いて博士にお伺ひして見たのであるが、博士は「音樂に關しての研究では『東洋言語と音樂に關する研究』があります。この研究のためには啓明會、有栖川宮記念獎學會、服部奉公會などから資金を出して貰ひました。また『日本樂器の性質』の研究を行ふためには中尾都山、片山雄山、宮城道雄、中能島雅都、杵屋佐吉諸氏をわづらはしましたが、この研究では服部奉公會賞を戴きました。其の後大倉喜七郎男の援助で『音の高低、強弱を直示する裝置』の新機軸を研究考案しこの裝置を應用して東洋音樂の研究をしたのです。其の間航空研究所にあつては一研究として、音に關する研究を行つて來たわけです。昭和八年第五回太平洋學術會議には日本代表として出席、『東洋諸言語の物理と音聲學の研究』を發表しました。目下は『航空に關する音響』或は『振動』等の研究に日夜全力を擧げてゐます……」

かう語つた博士の眉字には、前線將兵の勇武に應へ、敵米英の兵器を完全に壓倒すべき決意の程が漲つて居られた。

(『音樂知識』第二卷第七号 昭和十九年七月 五〇七頁)

音樂學徒の勤勞挺身—手記—

東京音樂學校師範科三年 鳴 宮 克 郎

卒業を間近にひかへて勉學に勵んでゐた男生徒に○○工場への動員令が下つた。われわれは六月一日元氣一杯工場に入所した。仕事は可鍛鑄鐵を槌でたゞく事によつて出る音響により、その製品の材質の良否、キズの有無等を判別する作業である。日頃鍛へた耳をこの生産戦になんとかして活躍させたいものと思つてゐた矢先、音樂學徒にとつて最適の仕事を與へられたので、吾々の喜びは非常なものであつた。

大東亞戰爭以前は、「音樂は情操を純化する力はあるが、戰時下の日本にはあまり必要でない」等と云つて、音樂の價値を觀念的に考へてゐる人が多かつたが、大東亞戰に入つてからは、戰争は體力ばかりでなく目耳鼻すべて五官の銳敏な感覺の戰ひであることがよく認識され、音樂の價値も次第に認められて來た事は誠に喜ぶべき現象である。しかし更に工場で仕事の成果をあげることによつて、生産戦に於ても威力を發揮するのである。

世の中には相當の地位にありながら「音樂等は役に立つ所か質實剛健な氣風を破壊して、人間の心を墮落させ、むしろ害があるから不要であり又音樂學校も必要でない」とさへ主張した人があるといふ事を耳にした。吾々はこの言をきいて唯々啞然とするばかりであ

るが、よく考へて見ると一般の音樂者が今まで如何なる自覺を持つてゐたかを一應反省せねばならない。又音樂學校の傳統が如何なるものであつたかといふ事も同時に反省せねばならないが、吾々はこんな理解のない人を相手に音樂を勉強してゐるのでないと云つてしまへばそれ迄の話である。しかし大きな立場から考へて見ると少數理解者を相手に音樂の向上を計つてゐるだけでは偉大な日本音樂の發展は望まれるものではない。日本のすべての國民一人々々が音樂に對して正しい理解と認識を持つてこそ始めて日本音樂の創造發展が期せられるのだと信ずる。今度の吾々の仕事には大きな使命がひそんでゐるのだ。

第一日に入所式が行はれた。工場長各課長を始め海軍側から堀江大佐殿、學校から鑿教授妹尾生徒主事が參列され、嚴肅な式が舉行された。その時色々の方から責任の重い事を話され、吾々はしびれる様な感激を覚え増産の決意を一層強くした。その時細川検査課長の話によると、吾々の仕事は音響検査で、大量生産するにはなくてはならぬ仕事で、之を他の方法ですれば一個三四十分もかかり、緻密にやれば一日位かかるのであるが、之を音響検査でやれば一瞬にして正確^{ママ}の良、不良を識別できるのである。吾々の手によつて早く正しく不良品が識別され取除かれればそれだけ不良品を次の工程に廻すことがいらなくなり、その爲石炭の○頓は忽ち節約出来、又無駄な労力を省くことが出来るといふ。又吾々がこの検査によつて不良品、例へば目に見えないやうなワレの入つた品を見逃して合格品として送つた場合に、之が第一線に於て忠勇なる將士を大死させたり傷つけたり、又兵器を無駄なものにするやうな恐るべき

結果を生ずるとの事である。

最初簡単に見えてなかなか深みがあり、自信をもつて處理するには並々ならぬ苦心を要した。殊に製品が何十種類もあり焼を入れない前と後では音響に大變な差異があるため、二通りの音色を會得しないではならないのでなかなかむづかしかつた。しかし吾々は音樂の勉強と同じやうにねばり強く反覆練習した。十日間位で大體の見當がついてきた。

しかし何より辛い事は音樂の勉強が思ふやうに出來ない事であつた。この事は工場にゆかぬ前から覺悟はしてゐたが、一週に一日登校して授業をうける關係上、色々と慾が出て夜疲れた體に鞭打つて勉強を始めたが、一ヶ月もたつと疲れが出て、遂に病氣になり工場に大變な迷惑をかけたのである。この事あつて以來、夜勉強したいといふ氣持は立派な考へではあるが、之が爲めに次の日の工場の仕事に影響する様な事があるとすれば、國家に相濟まぬ、勉強は餘力ある時のみにして、卒業までは兵隊になつたつもりで増産に一意専心せねばならぬと痛感し、このために病氣をした事が自分乍ら恥かしくなつてきたのである。かう考へると前途には明朗な光さへ感じられ、工場の生活も楽しいものになつてきたのである。

最初工場に入った時、一緒に働く工員や挺身隊の人々の中に何だか陰鬱な暗い氣持が感ぜられ、自分達迄が暗い反面にひきずられさうになつてくるのである。こんな時には「音樂學徒であるといふ誇を失はぬ様に働き」との校長先生の御訓示を思ひ出して學生らしく朗かに働いてゐる。工場の人達を音樂で慰問したり、又休みの時間に國民歌謡等を歌つてやつたりするので工場の人達と急速に親密の

度を増し仲よく仕事が出来る様になり、工場の空気が明るいものに
變り、皆愉快に働くやうになつたので誠に喜ばしい事だと思つてゐ
る。

工場の人達は何時も「音樂をするやうなあなた方にそんな仕事を
させては誠に氣の毒あまり無理をしないで少しお休み下さい」等
と同情してくれるが、吾々は却つて澤山仕事をしたくなり、勇氣百
倍するのである

かうした吾々の元氣な仕事振りが、逆に工員に勇氣を起させる大
きな原動力となつてゐることを思ふ時、非常に嬉しい氣がして、あ
くまで學徒らしく純心に働くといふ決意が一層強くなつてくるの
である。

(『音樂文化』第二卷第八号 昭和十九年八月 二五〇二六頁)

兵器と聽覺

理學博士 小幡重一

まへおき

讀者の熟知される通り第一次歐洲大戰が在來の戦争と違つて居た
ことは、それが科學戰であつた事である。即ち當時戦争の各方面に
科學が應用せられたのであるが、音響の應用としても大砲の音に依
つて敵砲の所在を發見するとか、或は音に依つて潜水艦や飛行船、
飛行機の位置を探知すると云ふやうな事が試みられた。然し斯様な
新方法は第一次歐洲大戰中には餘り多くの成果を挙げ得ない中に大
戰の幕は閉ぢられてしまつたが、斯ういふ仕事は戦後段々根本的の
研究が積まれ、從つて各種の音響研究の機運を非常に促進したもの

である。一方に於てラジオ、發聲映畫及び蓄音器レコードの電氣的
吹込、再生等に促されて優秀なるマイクロフォン並に再生裝置等の
出現と共に音響に關する各種の技術は躍進的進歩を遂げ吾人の文化
が著しく深みを増加したが、同時に音響に關する各種の基礎的研究
も、亦着々として行はれ樂器、言語等を初め各種の複雜なる音響の
性質が明らかにせられるに至つた。而して音響に關する是等客觀的
研究が一大進展を成すと共に、その主觀的方面即ち吾々の聽覺の性
質の徹底的究明が各種の進歩した電氣的方法等の利用に依つて盛ん
に行はれ聽覺の性質が大いに明らかにされた。

斯かる情勢の下に於て勃發したのが支那事變である。支那事變の當初上
海、南京攻略戰の當時に於ては支那兵の使用するチエッコ製機關銃と味方
の機關銃との音の違ひ、迫擊砲と野砲との音の相違など、今迄經驗した事
のない新しい戦場の音が語り傳へられて、吾國民の音に對する關心が急激
に高められ、從つて國民の聽覺の問題が大いに世人の注意を惹くに至つ
た。續いて第二次歐洲大戰が起り大東亞戰爭が勃發するに至つたのである
が、是等の戦争が未曾有の科學戰である事は周知の通りであり、從つて音
響の利用される事も亦實に目覺ましいものである。空中地上水中の立體戰
の各分野に於て攻防共に音響の利用されて居ること實に驚く許りである即
ち敵の銃砲聲によつて其種類や位置を探知することを初め飛行機、潛水艦
の發見、推進器音による敵艦船の種類の判別から、魚雷の爆發音による命
中の確認をなすなど攻撃用として音響の利用が行はれる一方に於て〇千メ
ートルの遠距離から敵魚雷音を感知して是れを回避する等の防禦御用手段
が講ぜられて居る次第である。而して是等の場合に各種の優秀なる電氣機
器が利用される事勿論であるが、直接吾々の耳を利用すること亦頗る多
く、以下述べるやうに場合によつては吾人の聽覺は他の如何なる機械にも
増して優れた機能を發揮する事が珍らしくない。從つて國民聽覺向上の
必要が痛感され、國民學校に於て音感教育の基礎が施されると共に、國防

上各種の目的に對し軍部附屬の學校等夫々の機關に於て聽覺向上的猛訓練が行はれるに至つた事は屢々新聞紙上などにも報ぜられ讀者の熟知される所であらう。

耳と目

吾々人類は云ふ迄もなく、耳も目も共に頭の兩側に夫々二つ宛與へられて居るが、是等二つの器官の構造の相違は別として、機能が著しく相違するものである事を良く承知して居られない人々が多いやうに思はれるから、茲に冒頭に當つて是等兩器官の機能の著しい相違に就いて先づ讀者の注意を惹かうと思ふ。

目は光を感じる器官であり耳は音を感じる器官である事は云はずと知れた事であるが、その感じ方は根本的に違ふものである。周知の通り目では赤色光線と綠色光線とを同時に受けると、丁度その中間の黃色の光線が來たやうに感ずるものである。然るに耳の場合、即ち音の場合では状況が全然違ひ、高さ即ち振動數の違ふ二つの音（單純光の色に該當するものは單純音では振動數である）が同時に存在すると耳は決してその二つの音の高さの中間の高さを持つ音があるやうには感ずるものではなく一種特別な音色を有する音として感ずるものである。而して耳の訓練の出來て居る人であると、斯かる場合に容易に二つの音が交つて居ると判斷し得る事は苟も音樂に關心をもたれる讀者諸君の先刻御承知の事であらう。單に二つの音と云ふやうな簡単な場合でなく、もつと多數の音の集合したものを受けた場合吾人の耳は其の天與の構造上無意識の中に一々是れを分析して感じて居るもので、各種樂音の音色の判別、飛行機の機種の識別、機械の故障の音による發見等は何れも聽覺の分析機能の致す結果である（後述、蝸牛殻内の刺戟の分布の項参照）。

猶聽覺の分析機能と云つても、單に或る瞬間に於て到來音を分析感知するばかりでなくもう少し廣い意味での分析、即ち音色の時間的變化を鋭敏に感すること、言葉を換へて云へば、音のリズム感の銳さも多くの妨害音中に敵艦船の推進器音や魚雷の音を探知するに大いに役立つものである。

次に注意すべき事項は音に對する方向感である吾々は生れ乍らにして、到來音の方向を判別する能力を持つて居るものであつて、此の能力は吾々が兩眼の作用に依つて可視物の距離を判定するのと均しく、全く二つの耳の存在が必要條件であるが方向感知と云ふ作用たるや所謂兩耳聽覺若しくは兩耳效果と呼ばれる聽覺に置ける特殊の感覺に依るものである事は存外知られて居ないやうである（兩耳聽覺に就いては後に空中聽音の項に於て述べる）。

以上は耳と目の機能の著しい相違であるが先づ是等の兩器官が防空機關として用ひられた場合の機能の比較として對空監視哨に於ける調査の結果を述べよう。

對空監視と聽覺

本邦各地に配置されて居る對空監視哨は終始目と耳とに全身の注意を集中してその重大な任務を遂行して居る者であるが、航空研究所特別研究員朴澤一郎氏は是等對空監視員の適性並に訓練に關する基礎的資料を得る目的を以て先頃東北地方の某二縣に於て當時服務中の監視哨員若干名に就き調査を行はれ種々興味ある結果を得られたが、茲に立哨作業の調査結果の一部を摘録し防空上耳と目の機能の相違を示さうと思ふ。

最初の發見	機數判定	機種判別	高度判定
耳 八八・八%	六三・〇	四二・八	四・一
目 五・六	三三・六	五〇・三	九三・九

右の表で「最初の發見」の項は飛行機の飛來を初めて知るのは耳でその音を捕へることに依るか、或は目で機影を認めるかを問ひ回答を求めた結果である。第一の「機數判定」の項は飛來機が單機であるか編隊であるかの識別、第三の「機種判別」とは双發か單發か

爆撃機か戦闘機かの識別、第四は云ふ迄もなく飛來機の高度が何百米、何千米かと云ふ判定である。此表に依つて明らかなやうに高度判定は殆んど目測に依らなければならぬが、「最初の發見」とか「機數の判定」は耳による率が甚だ大である。最初の發見は勿論電波兵器の活用に依つて速かに行はれるが、この防空上最も重大なる事項が視覺に較べて然聽覺の領分である事は注意すべき點である極めてよく晴れた澄んだ空では耳にも聽音機にも感じない様な二〇糠程度の遠距離に於ても機影を認め得たと云ふ特殊例もあるにはある（朴澤氏の報告ではない）が監視哨舎の地形的條件の外に天候條件及び夜間の如き目視に不都合な状況を考慮に入れゝば防空上聽覺の占める役割は極めて大きいと言ふべきである。機種の識別に就いては筆者の行つた研究と共に後に詳しく述べる。

空中及び水中聽音機と兩耳效果

曩にも述べたやうに空中聽音機によつて飛行機の位置を探知するのは、兩耳效果と云ふ聽覺に於ける特殊の性能を利用して居るものであつて、決してあの大きなラツパを上下左右に振り廻して飛行機の音の一番強く聞える方向を探し求めて居るものではない。兩耳效果とは音が兩耳に達すると頭の中の特定の場所にその像が結ばれると云ふ現象であつて、顔の正面から音が來る場合には音像が後頭部の中央にあるやうに感じ（前頭部の中央と感ずる人もある）、音が右側から來る場合は音像は右に移動し左側から來る場合は左に移動する。此の作用に依つて吾々は音の到來方向を判定するものであつて、此の兩耳效果の生ずる原因としては兩耳に於ける音の強さの相違に依るか、位相の相違に依るか、兩耳に音波の到着する時刻の相

違に依るか、色々の説があり、此の効果に關しては非常に澤山の文獻があるがその原因是今猶十分に釋明されて居らない。兎も角以上三作用のその何れもが缺くべからざる要素であり、且つ到來音が純音の場合と噪音（非樂音）の場合と衝擊音の場合とで夫々趣を異にするものと考へられて居る。猶兩耳の間の距離が大きい程、方向感知の精度が高くなる事は兩眼で距離を測る場合と同様である。従つて吾々の兩耳の間隔は大體十五粁であるから、空中聽音機のラツパの間隔はその十乃至二十倍程度に擴げ、夫々のラツパで集めた音をゴム管で一方の耳に導いてある。然し目の場合と異り兩耳に達する音波の位相の關係上、空中聽音機の兩ラツパの間隔はこれ以上に大きくしても精度は上がらない。又ラツパの大きさも無闇に大きくしても風による共鳴で音を發し、遠距離の飛行機の幽かな音を探知するに却つて妨害となる。

水中に於て到來音に依つて音源の方向を探知する所謂水中聽音機にも亦此の兩耳效果が利用されて居るのであるが、水中聽音機を使用するのは大部分艦船であつて、自分自身から到來音と同種の音を發して居り又波浪が自分自身の船體等に衝突する音等も交つて来る爲に到來音の感知は仲々六ヶ敷い。後章聽覺に於ける隠蔽作用の項参照。

飛行機の爆音と聽覺

世間では一般に飛行機の音の事を爆音と云ふ慣習になつて居るが、あれは誤りである。飛行機の音の主なる部分はプロペラの音と發動機の排氣音である。而して此の後者は正に爆音であるが、この排氣音は振動數の多い高調子の成分から成り立つて居る爲に遠距離には到達しな

い。依つて空襲などで問題となるのは主としてプロペラの音であるが、これはプロペラ翼の前面と背面との間に強い圧力差が周期的に発生される爲に起るもので爆發の音ではない。

音に依つて飛行機の種類、數、距離、高度等が判定出来るか、殊に敵機と味方機と區別出来るかと云ふ事は飛行機の音に關して屢々問題とされる所であるが、殊に一昨年四月十八日吾國民は初めて敵機の音を耳にし、その姿を目にして以來、此の問題は大いに一般世人の注意する所となつた次第である。今や大東亞戦は日に日に苛烈の度を加へ此時に當つて日蓄工業株式會社（舊コロムビア）では耳に依る防空訓練用に使用する目的を以て千葉陸軍防空學校後援の下にボーリングB-17、ロツキード・ハドソン、カーチスP-40、バツファローの鹵獲敵機の爆音を錄音して昨夏敵機爆音集第一輯として發賣され、其後續いて呑龍、鍾馗などの陸軍現用機爆音集を發賣されたのは飛行機の音に對し世人の精密なる注意を喚起するに役立ち眞に啓蒙的であつたと考へる。

是等の音盤は前述の通り元來防空訓練用として製作されたものであつて科學的研究の對象としては聊か遺憾の點もあるが、兎も角仲々良く錄音されて居ると思はれるので、先頃筆者は是れに吹込まれて居る各種の飛行機の音を最新の電氣的方法で詳しく分析してみたその分析結果の詳細は餘り専門的になるから茲にはその一端を御紹介しようと思ふ。此の音盤の音の電氣的分析を行ふと共に、一方に於て音感教育の權威者笠田光吉氏を煩はして音感教育を受けて耳の鋭敏な絶対音感所有兒童に是等の音盤を聽かせてその音を分析させてみた。音感教育を受けた兒童が複雜な音を聽取分析するには實

に驚くべき能力を發揮しピアノの數個の鍵を一緒にヂヤンと鳴らすとそれが何と何とあると云ふ事を言ひ當る事などは容易なことであるし、机を叩く音とか人の足音と云ふやうな複雜な噪音をも直ちに分析回答すると云ふやうな事は讀者もよく知つて居られる事であらう。

飛行機の音の性質に就いて茲に詳しく述べて居る暇はないが、元來飛行機の音は數千メートルの遠距離ではプロペラの音だけで餘程樂音的であるが、此の音盤に錄音されて居るやうな千とか三千メートルとか云ふ様な近距離では音の性質は一般に頗る複雜であり、而も大氣の性質の不均一を初め色々な原因で強さも音色も刻々に頗る變動して居るものである事は是等の音盤を一度聽かれば何人も直ちに氣付く通りであるから、是れを分析する事は電氣的裝置によつても、また兒童が聽取しても仲々困難な事柄である。

即ち電氣的分析方法は何ぶん一回の分析に少くも十數秒の時間を必要とするので飛行機の音のやうな刻々に變化してゐる音を分析する方法としては決して完璧なものではなく、斯かる十數秒の間に現れる音の平均値のやうなものを示すに外ならないが、兎に角是れによつて複雜な飛行機の音を形成して居る成分音の高さ及び強さを數量的に詳しく知る事が出来る。

此の音盤は地上に据付けたマイクロフォンに對し飛行機は遠方から（色々な高度で）巡航速度で直線的に飛行しマイクロフォンに近づきやがてその直上を通過して遠ざかつて行つた場合の音を錄音したものであるから所謂ドップラー効果（音源が聽者に對し近づく時は音の見かけの高さは靜止の場合より高くなり、逆に遠ざかる時は

低くなる)が認められ、且つ此の場合飛行機はある高度を持つて居る關係上、音の高さは音盤の始めから終りに向つて段々と下つて行く筈であるが、電氣的分析の結果でも音響スペクトルが漸次移動し、音の高さが音盤の始めと終りとでは四度強乃至五度弱も違ふ事が良く現れて居る場合もある(第一圖)。猶斯様なドップラー効果に依り錄音の際の飛行機の速度も推算出来る。〔詳細は近刊、航空研究所彙報及び日本音樂學會誌に發表〕。

笈田氏の試験では此の音盤を完全絶對音感所有兒童七名(但し斯かる噪音的音響判別を經驗した事なき者)に聽取せしめ各自が記憶に便なる特徴音を記錄せしめた所、年少者程「記錄音符數」多く、即ち抽出し得たあらゆる音をお玉杓子に書き上げ、機種に依る特色判定と云ふ様な此の試験の目的には該當しなかつた。此の結果は斯かる複雜な音の性質上當然あり得べき事であり決してその兒童の能力不足を示すものではないが、當方の目的には適しないものとして次の年長者(中學程度)二名の記録を第二圖(甲)(乙)夫々右左に示す。

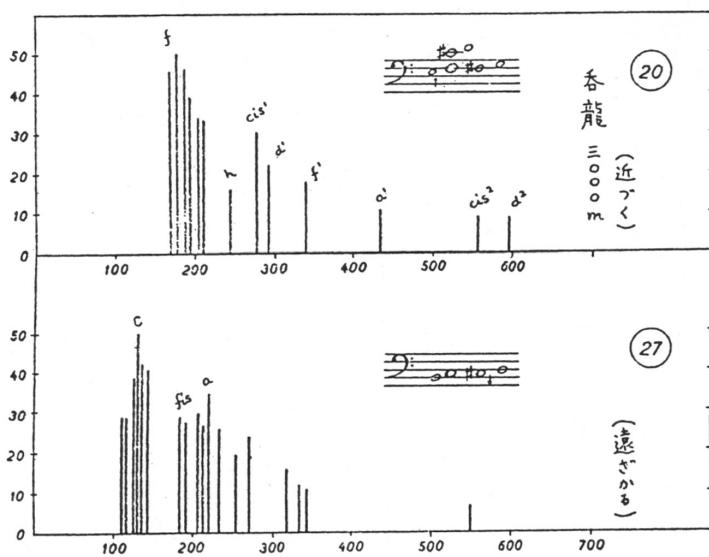
以上の兒童の爆音聽取分析の結果は誠に示唆に富んで居るものであつて、斯かる目的には耳の鋭さの外に教育の程度が大いに影響する事は眞に注意に値する事項である。絶對音感所有者である幼兒は成程複雜な音の中から高低多數の成分音を抽出する點では驚くべき能力を發揮はするが、音色の重點を示す事が出來ない。これに反し中學程度の少年となると飛行機の音の勢力の大部分の含まれる低音部(ヘ字記號部)に注意を集中し各機種の特色を抽出せんと努力して居り、ドップラー効果に就いても恐らく無意識に或る程度感得して居る。

て居ることが此の圖で認められる。若し斯かる少年にして機體や發動機の性能等に關し一層深い豫備知識を持つて居たら更に驚くべき能力を發揮し得たであらう。

吾々の聽覺、視覺を初めその他の五感は何れも訓練によつて驚くべき能力を發揮し得るに至る事は周知の通りであるが、五感の力を極度に發揮させる訓練と共に夫々の目的に適應した知識の涵養が大いに望ましいものであつて、現下の科學戰に於て各種の精巧な科學兵器を十分に活躍させる上に斯かる訓練の必要が一層痛感される次第である。

第三圖は前述の電氣的分析の結果と兒童の聽取分析の結果の一例とを比較對照したものである。圖の左側は電氣的分析結果の代表的のものであり右側は是れに對應する聽取分析結果である。

電氣的分析結果は通常第一圖に示したやうな音響スペクトルとして各成分音の高さ(振動數)並に強さ(壓力振幅)を図示するものであるが、茲には聽取分析と比較の便宜上音符を以て示し、お玉杓子の大小を以て強弱の大體を示す事にした。音符の傍の小さな矢は音符の高さより四分ノ一音程度の高低を示す。猶ほ此圖に就いて注意すべき事は電氣的分析の結果は夫々分析所要時間なる十數秒間に現れる各種の成分音の高さを時間的前後の區別なく五線上に見易く書き表したものであり、是れに對し聽取分析の方は音色の刻々の變化を考慮に入れ、普通の樂譜としての規約に従つて書き示されたものである。從つて兩者が必ずしも精密に一致しなくとも絶對音感所有者の能力價值に何等影響ないものである。勿論是れだけの分析能力のある者であれば是等の音盤に錄音されて居る各種の飛行機の音



第一圖 重爆撃機「呑龍」の音（ドップラー効果を示す）

第二圖 (甲)



第二圖 (乙)

陸軍現用機爆音集

Victor-Electrola 跑轉數 78回轉

① 戰闘機「鍾馗」No.100824

1000m 3000m 5000m

② 吞龍 No.100824

1000m 3000m

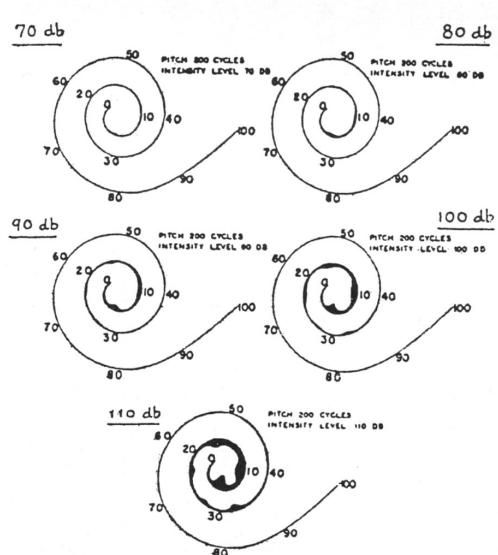
③ 新司令偵察機 No.100825

3000m 5000m 8000m

④ 戰鬥爆擊機 No.100825

3000m 5000m

第四圖



第三圖 電氣的分析結果 韻律分析結果

[吞龍, 3000m.]

[Boeing, 1000m.]

[Curtiss P-40, 5000m.]

[Buffalo, 3000m.]

を記憶し機種を區別する位の事はいと易いことであらう。然しそか

る近距離で機種の區別を判定する事が實用上役に立つのは地方の監視哨が是れによつて爆撃の目的地たる大都會に警報を發するやうな場合であつて、爆撃を受ける土地自體に於ては三千メートルとか五千メートルと云ふやうな近距離で敵か味方か區別出來ても早やその時分には爆弾が頭上に落下して居る筈である。

以上は絶對音感所有者に對する試験であるが、次に前記の朴澤氏が和音感教育法が對空監視員の聽覺訓練法として果して如何なる役割を擔當するものであるかと云ふ問題に關連して行はれた試験の概要を述べよう。

試験の方法は爆音識別試験としては機種を異にする四種類の爆音を夫々甲、乙、丙、丁とし一定の順序で二回宛提示して後、是等を前と違つた任意の順序に鳴らし甲、乙、丙、丁を都べて十個の爆音を聞かせ、その一つ一つが甲、乙、丙、丁の何れるかを識別判断せしめた。和音識別試験は主要三和音（ハホト、ハヘイ、ロニト）をピアノで一定の順序で二回宛鳴らして聞かせた後、順序を變へて五個の和音を鳴らし其の一つ一つが提示三和音の何れに當るかを識別判斷せしめた。

斯かる類似の方法によつた二つの試験の成績の相關係數を求めてみると $r=0.041$ となり兩試験成績の間には殆んど相關がないと云ふ結果になつた〔原著には詳しい成績表が掲げられてある〕。

此の朴澤氏の結果は唯一回の試験であり、是れによつて和音感教育の價値に就いて云々するは早計であるが、此の結果だけからでは和音の識別成績優秀者、必ずしも爆音の識別成績良好とは限らない

と云ふことを示すものと云へるであらう。

聽覺に於ける隱蔽作用

汽車、電車、地下鐵、飛行機、喧しい工場内と云ふ様な烈しい騒音のある所では、吾々は或る程度聾になつて居ると同様で話が通じなくなるものである事は讀者の日常經驗される事であらう。此の現象は古くから知られて居つたもので、騒音のある場合に限つた譯ではなく一般に甲乙二つの音を同時に聽く場合には、其の一つ例へば甲を單獨に聽く時に較べて乙音の存在によつて甲音に對する聽力が多少減少すると云ふ現象である。乙音の強さを段々増して行くと遂に甲音が聞えなくなるが、此の場合に乙音に依りて甲音が隱蔽されたと云ひ、此の現象を聽覺に於ける隱蔽作用と云ふ。従つて甲を被隱蔽音、乙を隱蔽音と云ふ事もある。

此の隱蔽作用は後に述べるやうに複雑な音に對する吾々の感覺、延いては各種の實際上の問題に關して頗る重要な事項であるが、極く大雑把に言へば一般に低い音は容易に高い音を隱蔽するが、是れに反し高い音は低い音を隱蔽しにくいと云ふ事になる。

扱て此の現象の關係する實用方面としては、第一に通信關係である。電話に雜音が混入して通話が困難になつたり又遠隔地からのラジオ放送が雜音の妨害即ち隱蔽作用によつて不明瞭になる事は讀者諸君の日常經驗される所であらうが、兵器の一部としては最小の電力を以て最も効果的に敵の通信網を攪亂する方式の考究、又逆に隱蔽作用の巧妙なる應用によつて味方の祕密電話の祕密度を高めると云つた様な事が考へられる。

又曩に述べた様に空中聽音機に於ては風の音その他各種の妨害音下に敵機の幽かな音を探知するものであり、又水中聽音に於ては感知しようとする敵艦船の推進器音或は魚雷の音と極めて類似した音を自分自らの船が發して居り、また波浪が自分の船に當つて同種の妨害音を發し隱蔽作用を逞

しうして居る次第である。

従つて嘗ては單に交通機關や工場等に於ける騒音防止等に關連して研究の必要が認められて居つた隱蔽作用は今や軍事上に於いても頗る重要な研究項目となつて來た次第である。
申す迄もなく隱蔽音の性質に依つて色々な隱蔽作用を生ずるが、一方に於て今や電氣的方法に依つて隱蔽作用の測定が容易に行はれると共に色々な純音（噪音）を容易く出す事が出來、而もその性質を科學的に秩序立つて變化させる事が出來るので、筆者は先頃より各種の噪音の隱蔽作用を詳しく研究中であり、その結果の一部は既に發表してある。

隱蔽作用は以上の様な實用問題を離れて、聽覺機能の研究に又重要な役目を持つて居る。吾人の聽覺は實に巧妙、神祕の極地であり、その機構は古來の學者がこれを究めても今猶究め盡せない状態であるが、隱蔽作用の研究に依つて蝸牛殻内に於ける神祕の扉の一部が開かれる。今夫等に就いて詳述して居る暇はないがそのほんの一例として先年米國ベル電話研究所で純音に依る隱蔽作用の測定の結果から推定した蝸牛殻内、基礎膜上の刺戟の分布を第四圖に示す。第四圖の蝸状線は基礎膜を示し傍の數字は蝸牛殻頂（蝸牛殻の最奥）からの距離であり、従つて一〇〇と云ふ位置が内耳の入口即ち卵圓窓近くに當り、最高音に感ずる部分である。圖は振動數二〇〇の純音の強さを七〇デシベルより一一〇デシベルに亘り色々に變へた場合に基礎膜上に起る刺戟の分布を示すもので（黒い部分の高さは其位地に於ける神經の反應の大小を表す）、純音でも其強さを段々増加して行くと基礎膜上の色々な部分が刺戟されて來る模様を表して居る。

最後に兵器とは全く關係ないが、この隱蔽作用は音樂に關しても

亦極めて重要な意義を持つものである事を述べて此稿を了らうと思ふ。即ち管絃合奏等に於いて一つの樂器の音を構成する各部分音の間の隱蔽作用、並に一つの樂器と他の樂器との間の隱蔽作用は合奏全體の音響效果に大なる影響を持つ譯であるから隱蔽作用は作曲上にも演奏上にも重大なる意義を有するものである。
管絃樂等に使用される各樂器の音の物理的性質は詳しく述べて居る今日此の問題は研究題目としても頗る興味あるものではあるが、何分心理的、生理的因素を多分に含んで居るのでその充分なる解決には多くの困難があるものである。

（『音樂文化』第二卷第八号 昭和十九年八月一日 三〇一頁）

眞の日本音樂

小宮豊隆氏に聽く

東京音樂學校長に就任した小宮豊隆氏は從來の慣習を破つて同校卒業生以外からも教授を起用することになり、まづ廿十一歳の巖本真理さん（ヴァイオリニスト）を招いた、また軍閥に追はれた外人教授の復歸も交渉してゐるが、日本の音樂文化について同氏は次のやうな見解を述べてゐる

『現在の日本の音樂文化の程度は國際的に見て高いものではない、各人の趣味は雜然とし、また低級でもある、日本在來の音樂と西洋音樂が日本では入り乱れてゐるのだが、これが綜合されて新日本の音樂が出來ればいいと思つてゐる、今のやうに西洋音樂の形式に從ひ日本のメロディーを探り入れて新しい音樂を作つてゐるやうな氣になつてゐるが、それらは決してわれわれの考へる新日本音樂

ではない、小手先や頭の器用さでくつつけ合せたものが新日本音楽の第一歩であるなどと考へたら大間違ひである、日本の民族性の底に流れる音樂的精神を眞に生かすにはもつと西洋のものを根本的に研究し、根本的に自分のものにした上で出発しなければなるまい。

作曲の面でいへば西洋の作曲に必要な基礎的な知識を採用した上で、その上に日本の民族的な音樂精神を生かして行くのが本筋である。

音樂學校の全面的刷新といふことはやつてみた上で世間の批評を待つほかないのだが、一口にいえば日本音樂の中心となる音樂學校にしたいと念願してゐる』

(『毎日新聞』昭和二十一年六月三日)

全教授辭表取纏め

新進登用 音樂學校再建へ

東京音樂學校校長小宮豊隆氏は去る二月校長に就任以來同校の建直しを企て、ひとまづ白紙に戻つて再出発する方針で全教職員に辭表の提出を求め再建にとりかゝつてゐる、廿一歳のヴァイオリニスト巖本眞理さんが同校教授にきまつたのもそのひとつと見られるが、小宮校長は更に學外から新進樂壇人を迎へて教授陣を建直さうとしており、その成行は樂壇から非常に注目されてゐる。

この音樂學校問題の起りは敗戦後各方面に起つた民主化運動と同様昨年十月から教職員の間に過去十七年間に亘る乘杉前校長のやり方に對する批判が行はれ、五十余名の全教職員が十数回の全体職員會議を開き討議した結果

邦樂科を廢止し別個のものとすること、師範科と本科を分離すること、音樂學校所屬管絃樂團を擴充すること、人事の刷新明朗を圖ること等十一項目の刷新要項を決議、當時の學校長事務取扱田中文部省學校局長(現文相)に決議文を出したが、田中氏は事務取扱だから人事のことは新校長に傳へてほしいとの答があつたので、二月末小宮新校長に委員が傳へた、十一項目中の眼目は人事の点で、これには各科の主任教授である

高折宮次(ピアノ) 遠藤宏(音樂史) 木下保(聲樂) 橋本國彦(作曲) 井上武雄(ヴァイオリン) 平井保三(セロ) の六氏を乗杉前校長の方針にあづかつた責任で退職させること、ピアノ科の井口基成教授を行過ぎた外人排斥のため退職させること等が含まれてゐた(以上の七氏は小宮氏の就任前に辭表を提出してゐた) これに對し小宮校長は

自分には數名のアドバイザーがあるから慎重にこの問題を扱つて行くつもりだ、決定は一任してほしいと回答、その後小宮氏は実行委員や辭表を提出した教授たちと會見、意見をきいた上問題を一應白紙に還し再出発するため、さる四月一日の職員會議で全教授、助教授、講師に對し辭表の提出を求めたもので辭表は現在も小宮校長の手元に留めおかれてあり、去る五月八日行はれた入學試験も今まで通りの方法で行はれ新學期の授業もそのまゝで續行されるが小宮校長としては外部から新人を教授として迎へる一方現教職員中からも再建に必要な者は残留させる方針をとるものとみられてゐる

小宮校長談『全教職員に辞表を出して貰つたのは再建するために都合がよいかで、よい人は残つてもらふつもりです、入學試験やその他に関しても醜聞が傳へられてゐるやうだが、これは音楽學校の名譽のためにも重要な問題で、少しでもその事実があれば勿論やめて貰ひます』

（『毎日新聞』昭和二十一年六月四日）

上野の音樂學校も嵐のさなかにある。自發的に辭表を提出した一部の教授のみでなく、小宮新校長は全教授の辭表提出をもとめて全然獨自の立場から改組を考慮中である。音樂界の戰犯的事實如何となれば議論百出だらう。尠くとも戰時中の軍歌、歌曲は問題になる。があれはむしろいはゆる流行歌の部にぞくし、街の音樂家の仕事が大半だ。上野の巨匠達にしてみれば、あまりにも縁どほい存在だつたとも云へよう。しかし、上野派が戰時中大したうごきをみせなかつたとしても、この際それをもつて改組の要がないといふことはならない。せまい樂壇であつてみれば、小さな動きすらが問題となるのはあたりまへだ。したがつて、小宮校長が獨自の見解と方針をもつて、斷乎改組を計畫しつゝあるのは、むしろ大いに歓迎する。専門家はもちろん、一般文化界において、もつと活潑にその改組の具体的意見が論議されることが望ましい。現在の教授連の改組意見なるものが先日新聞に傳へられてゐたが、その中で一つわれくの腑におちぬ點がある。それはこの改組を機會に、邦樂科を分離しようといふ意見だ。たゞ分離といふだけで、具体的な内容がわからぬが、もし上野の音樂學校には邦樂科はいらぬといふやう

な意思なら、われくは反対だ。邦樂科が設けられたのはいはゆる日本主義的風潮の結果には相違ないが、それだからといって、音樂學校に邦樂科がいらぬといふことにはならない。洋樂の研究、普及むろん結構だ。大いに奨励してよい。一日もはやく世界に誇り得る日本樂壇となつて貰ひ度い。が日本人が日本獨得の音樂を研究し、よりよきものにたかめてゆくことが、無視されてよかるべき筈はない。三絃、琴なるものは、日本人の生活と感情の中にながい歴史をもつて存在して來た。今後も存在の價值をうしなつてはるない。これをいはゆる藝人と盲人の狹い範圍にのみまかしておくべきではない。當然音樂學校の一科として存在さるべきだ。

（『東京新聞』「筆洗」欄 昭和二十一年六月十七日）

上野の樂園・小宮旋風 十一氏に追放の斷

行過ぎと教職員反対

東京音樂學校長小宮豊隆氏は同校の肅正刷新のために全教職員に對し辭表の提出を求め再建にとりかかつてゐたが、漸く罷免すべき教授を決定このほど文部省に對し内申した、その顔触れは

ピアノ科主任教授高折宮次、音樂史科主任教授遠藤宏、聲樂科主任教授木下保、作曲科主任教授橋本國彦、セロ科主任教授平井保三、ピアノ科教授井口基成、ピアノ科教授宇佐美タメ、作曲科教授平井保喜、管科教授永田晴、作曲科教授細川碧、ピアノ科教授中村はま

の十一氏で、この小宮人事に對し独裁的であるとして同校教職員並に同校本科學生七十余名は、文部省に日高學校教育局長を訪問、前

記十一教授中公正有能なる教授数氏の罷免反対並に小宮校長不信任案を提出した

この音楽學校問題の起りは、昨年十月來同校教職員間に過去十七年間に亘る乘杉前校長の独裁的やり方に對する批判が行はれ、五十余名の全教職員が十數回全体職員會議を開き討議した結果、邦樂科の廃止、師範科と本科を分離すること、人事の肅正刷新を圖ること等十一項目を決議したもので、二月末小宮新校長に対し、ピアノ科教授豊増登氏ほか三氏の実行委員がこの決議を傳へた

十一項目中の眼目は人事の点で、高折、遠藤、木下、橋本、平

井、井上の六主任教授を乘杉校長の方針にあづかつた責任で退職させること、ピアノ科の井口基成教授を行過ぎた外人排斥のため退職させることが含まれてゐた、これに對し小宮校長は、乘杉校長の方針にあづかつた責任に對してといふ理由では退職せしめ得ない点を明らかにし、同校にみなぎる不明朗な空氣を一掃するため、全教職員に辞表を提出させ再建にとりかゝつてゐたものだが、この人事の肅正には同校の入學試験にからむ不明朗な問題もからんでゐるものとみられてゐる

小宮校長は前記十一氏以外の教職員に對しては辞表の撤回をすすめ、全教職員これに從ふものと見られてゐるが、実行委員の一人豊増登教授は小宮校長のやり方が全教職員の決議を無視したもので、実行委員としての職責を果し得なかつたとの理由から小宮校長の慰留を正式に拒絕した
なほ小宮校長は再建に對し校外より樂壇人を迎へ清新の氣をとり

入れんとし、さきに巖本眞理嬢を教授に迎へたが、續いてピアノのクロイツァー氏も迎へると見られてゐる

日高學校教育局長談 二週間位前音樂學校の生徒代表十名位が来てゴタ／＼を解決して早く授業を始めて欲しいといふことであつた、また十日前小宮校長から辭任教授十一名の辭職願ひが届けられた、一日も早く円満解決するやうに努力するつもりである

(毎日新聞 昭和二十一年七月十七日)

文化創造の飛躍臺

藝術祭に寄せて

小宮 豊 隆

文部省社會教育局の肝煎りで九月から藝術祭が催される事になつた。雅樂・能樂・歌舞伎などの傳統的な藝術とともに、明治以後日本に移し植ゑられた西洋の藝術、それに刺戟されて生れた新しい藝術——さういふ、言はば舞台の上で示される藝術の殆ど全部が、此處では展開される事になつてゐる。この藝術祭が、日本のこの方面的水準が現在およそどの程度の高みにあるかを人々へ総合的に具体的に示さうとするものである事は、恐らく説明を要しない。

しかし藝術祭の使命と意義とを、單にそれだけに止まらせて置きたくないと、私は思ふ。此所には現在日本の所有する新旧・東西の藝術がひとまとめて展開される。我々はその中のどれがどういふ点で我々の心に適切に觸れて來るか、もしくはどれがどれよりもさらに適切に我々の心を表現してゐるかを、短時日の間に、直接に体

験し検討し比較する事の便宜を與へられる。それは我々に、未來の藝術を創造する上の、重大な指示となるはずのものである。

例へば洋樂の何所に我々は同感若くは反撲するか、邦樂の何所

に満足し若くは不満足するか。それを誠実に慎重に徹底的に追求して行けば、我々はその何を捨て何を撮るべきであるかを的確に知り、それによつて我々の藝術に新生面を拓く事が出来るに違ひない。雅樂・能樂・歌舞伎・翻訳劇・新劇に就いても、同じ事が言へる。

日本の藝術に興味を寄せる外國人は、日本の傳統的な藝術を愛して、西洋傳來の藝術とその系統の藝術とを輕蔑する傾向がある。然るに日本の若い人達の多くは寧ろ西洋傳來の藝術とその系統の藝術とを愛して、日本の傳統的な藝術を輕蔑し勝である。これはどちらにも正當な理由がある。

しかし日本の風土と歴史と民族とに深く根を下した日本の傳統的な藝術が、日本に獨得ないゝものを持つてゐる事は當然であるとしても、それが今日の我々の心に十分適切な表現の器となり得ない事は、論を俟たない。さればといつて特殊な風土と特殊な歴史とによつて長い間生きて來た特殊な民族である我々が西洋傳來の藝術をそのまま踏襲したとしても、我々の心を傾けつくしてそれに同感する事が出來ないのも、また自明の理であつた。我々は、我々自身のために、我々自身による借物ではない、我々自身の藝術を持たなければならぬのである。

無反省に流行を追ふ者は論外であるが、この重大な問題を眞面目に考へてゐる人々にとつて、この藝術祭は多くの絶好な示唆を與

へうるに違ひない。またさういふ立場から眺めてこそこの藝術祭の意義は眞に確立されるのである。藝術祭は閑人のための閑漬しのお祭騒ぎであつてはならない。

（『朝日新聞』昭和二十一年八月二十六日）

東京音樂學校 職員を大量整理

上野の杜に、わが樂壇の搖籃として知られてゐる東京音樂學校では新校長小宮豊隆氏の一部職員に對する罷免問題をめぐつてかねて内紛をつゞけてゐたが、十六日の新學期の開始をまへに三日緊急職員會議をひらき同校長から學内改革に對する大綱が発表され噂にのぼつてゐた新樂壇人の教授登用や旧職員の大量罷免、學園の民主化に對する具体案が正式に表明された、しかし校長の今回の措置にたいしては教職員、先輩樂壇人の中には相當不満を持ち不信任を叫んでゐる者があり、一方學生側でも新學期の開始とともに罷免教授留任運動が行はれる氣運がみえ、揉める音樂學校の波紋は注目されてゐる。

アカデミックな學園として、教授陣を擴充強化するため小宮校長のとつた英断は（一）高折宮次（ピアノ）、遠藤宏（音樂史）橋本國彦（作曲）平井保三（セロ）井口基成（ピアノ）宇佐美タメ（ピアノ）平井保喜（作曲）永田晴（管）氏ら十一教授の罷免（二）演奏家として名高い巖本眞理（提琴）安川加壽子（ピアノ）横田文子（旧姓四家、聲）宅孝次（ピアノ）矢田部頸吉（聲）城多又兵衛（聲）片山詠太郎（作曲）長谷川良夫（作曲）の諸氏はじめ、廿

数氏を講師ないし教務に囑託し教授としての座をひらいた(三)著名な外人教授としてはヴァツ・ペニツヒ氏(聲)のほかアレキサンダ・モギレフスキ(提琴)レオニード・クロイツァー(ピアノ)レオ・シロタ(同)ウイリー・フライト(セロ)の四教授の返り咲き(内定)四教授會を再検討のうへ一層の民主化を圖る(五)師範科の地位を飛躍的に向上させ本科との差別を撤廃する(六)邦樂科を神田駿河台に分離する(七)聲樂、ピアノ、絃、管、師範、邦樂に互選による主任を置く

問題の旧職員の罷免は戦時中時局に便乗した行き過ぎ教授や同校の因襲といはれてゐる入學、及落にからむ情実行爲があつたのを終戦を機に全教職員の決議でこれら教授數氏を具体的に指名、全職員が辞表をとりまとめ人事の肅正の善処方を校長に白紙一任してゐたもので追放者を最小限度に喰ひ止めようとした教職員のハタキ火はかへつて火勢を増し開校以來の大量の犠牲者を出したわけである

同校には小宮校長のやりかたを独裁的なものとして残留教授、一部

學生間には前から同校長不信任の議がもち上り、文部當局との間に折衝が行はれておりこの運動の急先鋒と目されてゐる豊増昇、永井進の両ピアノ科教授も今回は正式に辞任を決定、留任を傳へられてゐる福井直俊、田中規矩士両教授の去就も危まれてゐる

『校長の獨裁だ』

木下保教授談

「我々は戦時中の責任上一應身をひくのが正しいと考へ辞表を提出したが、このまゝ内紛が續くやうなら解決に乗出すつもりで

す、校長は自分には三名のブレン・トラストがあると公言し教授、學生の言葉に耳をかさないばかりでなく、そのブレン・トラストといふのが音樂に對しては全くの素人らしく多くの教授はこのやうな校長の独裁に對して不満をいだいてゐます」

(讀賣新聞 昭和二十一年九月五日)

改革派・文相に交渉

音樂學校の紛糾再燃

一時をさまつた東京音樂學校の紛糾が十六日の始業式を前に再燃した、小宮校長對元同教職員間に組織された改革實行委員會と校長不信任をさけぶ一部學生の對立は尖銳化し委員側では制度改革完遂の連判状をつくり八月廿九日実行委員、元セロ科主任教授平井保三、元ピアノ科教授豊増昇、永井進、元作曲家教授平井保喜四氏が文部省に田中文相、日高學校局長を訪問、改革實行案を提出、経過報告を行ふ等問題は對外的にまで発展、授業開始も危まれるに至つた

ピアノ科の如きは殆ど去り現任水谷達夫氏一名だけなので同科六十五名の生徒を教へるわけにも行かず學校側ではクロイツァー氏門下の宅幸二、安川加壽子(旧姓草間)、遠見豊子、織本豊子各氏を講師にした外矢田部頸吉、横田ふみ子(旧姓四谷)、長谷川良夫、巖本眞理氏等を講師に委嘱

一應授業開始の態勢を整へてゐるが改革派や學生グループ今後の動きが注目される

學校當局の話…十六日始業式を行ふつもりである、一學期は騒

動で授業も満足に行つてゐない状況だから二學期からは豫定通りやる決心だ、有力教授退陣の穴埋めはどうやらついたつもりだ、新學期から學校の運管はすべて教職員の全体會議を開いて決定する

改革派側の話：今回學校側の人事は空いた教職員の席を埋めるといふ程度に過ぎない、これでは何等の改革も期し得ない、これによつて從來より派閥が明瞭になつたことも事実だ、十六日から授業を開始するとしても開校休業といふことになりはしまいか

學生の話：我々は最も敬愛する先生を一時になくしてしまつた、他の學校と違つて師弟の関係は特別である、それがこんどの講師の顔ぶれを見るとこれから師事するに足る方が少いやうだ、一方的な人事を行ひ天降り的に我々に總てを押しつけるといふやう方は承服できぬ、同盟休校のこととも考へてゐるが未だその時期ではないと思ふ

文部省當局の話：音樂學校騒動がまた再燃して困つてゐる〔〕内輪だけの問題として當事者間の解決をのぞんでゐる、先日改革實行委員が見えたがこちらの意向はよく判つてくれたと思ふ〔〕大分先輩達が斡旋に努めてゐるので一應解決するのではないだらうか

（毎日新聞 昭和二十一年九月十五日）

から舉行された、混沌状態を反映して教授の顔は廿名位、生徒の出席も約半数で、小宮校長は約一時間に亘り同校紛争のいきさつについて初めて弁明した

一學期は人事異動が手間取つて殆ど授業が出来ず誠に不愉快な思ひをした、理由は辞表を提出した人々を適格審査委員會にかけなければならず辭職発令が八月末までかゝつたことである、人事の紛糾については先づ私の校長就任に至るいきさつから述べなければならない

私の校長就任は天降り的であるといはれてゐるが私はさうは思はない、少壯教授達が學校改革のために懇談會をつくり、數名の委員が田中文相（當時學校教育局長）を訪問した際、文相は音樂の専門家を校長にしたらどうかといつたが委員達はこれは不可能だから、適當な文化人を校長にして欲しいと話した結果私に話があつたわけだ、一月廿七日私が初めて學校に顔を出したとき實行委員から邦樂科の廢止、乘杉色の一掃、軍國主義的色彩の拂拭等を含む十一ヶ條の改革案を説明、善處して欲しいといふ〔〕とであつた、四月一日教授、講師が集合した席上このことについて話し合つたが、私は邦樂科の廢止は不可能だ、邦樂、洋樂を同じ校舎で授業出來ないなら分教場で行ふ

學内の明朗化については改革派である實行委員だけの話をきくことは片手落なので自分独自の立場から改革を行ふためには一應全部に辭表を出して貰ふことにした、ピアノ科豊増昇、中村ハマ両教授を除いては全部辭表を提出した、相談相手には三人の人を選んだ

辭職組の策動

音樂學校紛糾 小宮校長弁明

二派に分れて紛糾した上野音樂學校も始業式は十六日午前九時半

人事異動について私は後進に道を拓いて退くべき人、いろんな意味で残つて貰ひたくない人を目標にした、豊増、中村両君は辞表を出し澁りながら今度は私が非民主主義的、独裁的だから辞職すると辭表を提出した、ところが辞めた人や、辞めて貰つた人達が寄つて私の排斥運動を起し文部省に陳情したりしてゐるが、私にはこの人達のいふ非民主主義的、独裁的といふ非難の意味が諒解出来ないまた一部では私が外國人の教師を入れない方針らしいから反動的だといつてゐる向きもあるがそんなことはない、近く三、四名の人に正式に来てもらふことになつてゐる

(「毎日新聞」昭和二十一年九月十七日)

小宮旋風 解けぬ樂壇の悩み
上野の杜に新學期は來たが
改革派……學校側 對立愈よ尖銳化

上野の杜にまき起つた「小宮旋風」：東京音樂學校の紛糾はさる九月十六日の始業式に行はれた小宮校長の一方的な経過報告から再び燃え擴がり、十一月美術學校と合同で行ふ秋の藝術祭を控へて同校に大きな波瀾をまき起してをり、そのなりゆきは樂壇からも非常に注目されてゐる—

「小宮旋風」の起りは敗戦後各方面に起つた民主化運動と同様昨年十月同校教職員間に乘杉前校長のやり方に對する批判が行はれ、十數回にわたる全體會議の結果、十一項目にわたる刷新要項を決議、乘杉校長退職後の學校長事務取扱、田中文部省學校局長（現文相）に傳へたことに始まる、その主眼である人事は各科の主任教

授、高折宮次（ピアノ）木下保（聲樂）橋本國彦（作曲）遠藤宏（音樂史）井上武雄（ヴァイオリン）平井保三（セロ）の六氏を校長支持による責任から退職させ、ピアノ科の井口基成教授を行過ぎた外人排斥のため退職させることなどであつた

小宮新校長は着任早々實行委員や辭表を提出した教授連と會見、問題を一應白紙に還しさる四月一日の職員會議で全教授、助教授、講師に對し辭表の提出を求め、前記教授のうち井上氏を除いて、宇佐美ため（ピアノ）平井保喜（作曲）永田晴（管）細川碧（作曲）中村はま（ピアノ）各氏を加へた十一氏の誠意を發表した

このあまりにも獨裁的な人事に對し全校教職員並に本科學生七十餘名が反対した、同校長が前記十一氏以外の教職員に對しては辭表の撤回をすゝめた際、實行委員の豊増昇異教授（ピアノ）はそのやり方が全教職員の決議を無視したものとして慰留を正式に拒絶、ついで夏休中、同校同窓會の席上實行委員の一人平井保喜教授が紛糾経過を述べるに際し小宮校長の退場を求めたが同氏は頑として居残り、平井氏の報告にことごとくに反ばくこゝに小宮校長對改革實行委員の對立は尖銳化したまゝ九月十六日の始業式を迎へた

席上、同校長は約一時間にわたつて同校紛争のいきさつを辯明、一方的な個人排斥や人身攻撃を行つたため一部の生徒や先輩連の間には校長と改革實行委員を全生徒の前で對決させ各々の言分を述べて貰ひ生徒自體の間で採決をしたいといふ氣運がたかまり、同時に同窓會員の間でも連判狀の作成などが行はれてゐる模様である

そのため新學期を迎へた同校もピアノ科の如きは居残り教授水谷達夫教授たゞ一人だけで同科六十五名の生徒を教へるわけに行かず、學校側では急遽關幸二〔宅孝二の誤りか〕安川加壽子〔舊姓草間〕遠見豊子、織本豊子氏等を講師に依囑一應授業を行つてゐるが、學生の集りも教授連の騒動を反映して閑散で、今後の改革派や學生グループの動きが全樂壇の注視の的となつてゐる

絶對退かず

實行委員側談

學校の運營は教授會全體により改むべきを改め、完全なものにしたいといふ當方の意途を小宮校長は踏みにじつた、教職員總辭職の問題も私達の總意でなく校長の壓制によるものだ、私共は學校改革のために選ばれた全教職員の委員として責任感にたち、自己の進退などは問題にしてゐないのであるから、正しきを正しとするまで決して退くものでない、校内及び卒業生の總意に訴へても理非曲直を明かにし満天下に訴へたい

先づレッスン

學校當局の談

校内の問題は校内で片づける方針でやり事實もう片がついてゐるのだ、音樂のやうなものは學内を刷新したからといって技倆わざがあがるとは思はれない、改革派が動いてゐることは承知だが當校としてはまづレッスンだ、

(第一新聞 昭和二十一年十月十一日)

戦争といふ目的の爲めに甚だしくゆがめられた方向に向つて居ました。今こそ教育は平和新日本建設の爲めにその本道に歸らなければなりません。音樂教育は音樂藝術本來の使命に立脚して、この新らしい教育目的の爲めに再出發をしなければならないと思ひます。國民學校に於ける音樂教育の眞使命とは何でせうか。それは兒童の音樂的本性に立脚し兒童の音樂生活に即應して、彼等の音樂的能力を啓培し、以て平和新日本建設に役立つ日本人を造ることでなければなりません。

兒童の音樂的本性、音樂生活とは何かといへば、それは『面白い歌を歌ふことを喜び』、『面白い音樂を聽くことを喜ぶ』といふことであると信じます。

かいうふ目的を貫徹する爲めに現行の音樂教科書が全面的に改變されなければならないことは申すまでもありません。文部省としては教科書の改訂を計畫して居られると思ひますが、今さし當り國民學校の音樂教材をどうしたらよいかといふことは全國の教育者が一番困つて居る問題だと思ひます。文部省としては現行教科書使用上の根本方針として次のやうなことを示して居ります。

○省略削除または取扱に注意すべき教材の規準。

一、國防軍備等を強調した教材

二、戰意昂揚に關する教材

三、國際の和親を妨ぐ虞ある教材

四、終戰に伴ふ現實の事態と遊離してゐたり今後兒童生徒の生活體験と甚だしく遠ざかつた教材

國民學校音樂教材のあつかひ方

井上武士

八月十五日正午、終戰の聖斷を仰ぐ瞬間まで、わが國の教育は、

この方針に則つて國民學校の音樂教材を見直すと消除しなければならないものが多數にあります。何れそれらについては文部省からはつきりと指示されることゝ思ひますが、次に私一個人の意見として何を削除しなければならないかといふものを掲げてみます。

削除すべき歌唱教材

ウタノホン 上（初等科第一學年）

十八 兵タイゴツコ

うたのほん 下（初等科第二學年）

四 軍かん、十五 おもちやの戰車、十七 兵たいさん

十九 日本初等科音樂 一（初等科第三學年）

八 軍犬利根、十四 潜水艦、十六 軍旗、二十 三勇士

初等科音樂 二（初等科第四學年）

十一 靖國神社、十四 入營、十八 廣瀬中佐

十九 少年戰車兵、二十 無言のがいせん

初等科音樂 三（初等科第五學年）

三 忠靈塔、四 赤道越えて、七 戰友、九 大東亞

十二 橋中佐、十五 特別攻擊隊、十九 白衣の勤め

初等科音樂 四（初等科第六學年）

四 日本海海戦、八 滿洲のひろ野、十一 落下傘部隊

十二 御民われ、十四 船出、十六 少年產業戰士

十八 水師營の會見、二十 日本刀

高等科音樂 一男子用（高等科第一學年）

一 海ゆかば、二 青年の歌、三 八紘爲宇、十 空を護る

十二 機械に生きる

高等科音樂 女子用（同）

一 海ゆかば、二 女子青年の歌、七 ますらをの母

十二 星の光に

高等科音樂 二（高等科第二學年）男子用

女子用は編纂されたけれども印刷が間にあはず遂に世に出すにしまひましたが、その中にも削除しなければならないものがあります。

男子用

一 勤勞報國の歌、三 敵は幾萬

五 この戰ひ

女子用

一 女子勤勞の歌、五 すめぐにの花

なほ「初等科音樂 三」以上の教師用書には「滿洲國國歌」が掲げてありますが、これも當然削除しなければなりません。

更に各學年の必修教材として定められたものも一應考へ直す必要があると思ひます。

以上はいはゆる歌唱教材について述べたのでありますが、鑑賞教材についても同様な考慮を拂はなければなりません。

次に各學年の鑑賞教材中削除しなければならないと思ふものを掲げて置きます。

初等科第一學年

君か代行進曲（吉本光藏作曲）

初等科第二學年

軍艦行進曲（瀬戸口藤吉作曲）

初等科第三學年

攻撃（陸軍戸山學校軍樂隊作曲）

ファシストの歌（ブランク作曲）

愛馬行進曲（陸軍軍樂隊作曲）

黃海海戰記念（海軍軍樂隊作曲）

敷島行進曲（同）

分行進曲（ルルー作曲）

凱旋行進曲（陸軍戸山學校軍樂隊作曲）

立派な兵隊（同）

初等科第四學年

國の鎮め（海軍省制定）

日本海海戰（海軍軍樂隊作曲）

水漬く屍（海軍省制定）

鐵兜隊行進曲（ブルーメ作曲）

初等科第五學年

太平洋行進曲（海軍軍樂隊作曲）

海ゆかば（信時潔作曲）

特別攻撃隊（東京音樂學校作曲）

初等科第六學年には別に削除しなければならないやうなものはないと思ひます。

また高等科各學年用の鑑賞教材も數曲づゝきまつては居りましたが、何れもまだ發表されて居らず、特別に削除しなければならないやうなものは無いと思ひます。

鑑賞教材については大東亞戰爭勃發後聯合國側作曲家の手になるもの數曲を削除するやうな指令がありましたが、これらは何れもこ

の際復活すべきであると思ひます。

以上歌唱教材と鑑賞教材との中で、削除すべきものについて述べたのであります。このやうにして多くのものを削除すると、當然教材に不足を生じてくるのであります。そこでどんな教材を補充したならばよいかといふことが問題になりますが、それについても文部省から次のやうな根本方針が示されて居ります。

○教材省略のため補充を必要とする場合は國體護持道義確立に関する教材

文化國家の國民にふさはしい教養等に關する教材

農產増強に關する教材

科學的精神啓培並にそれを生活の面に現す教材

體育衛生に關する教材

國際平和に關する教材

等をそれべ教科科目の立場から適宜に採取補充する

といふのであります。音樂の立場からいふともと心持を廣く、本科目本來の使命に立脚して眞に立派な教材をどんぐりと補充して行くべきだと思います。

なほ最後に一言して置きたいことは、よくこの頃科學教育の尊重といふことが叫ばれます。一般に日本の學者や教育家は科學といへば藝術と正反対なものと考へ、場合によると科學者に藝術は不要のやうに考へる者さへあるといふことであります。およそ平和新日本の建設に當つて音樂のわからぬ科學者音樂のわからぬ文化人ほど厄介なものはありません。第一耳の悪い科學者といふものも困ると思ひます。米國の飛行機やこの頃よく街を走つて居る米國の

トラックやジープの軽快な音に比べて、日本のそれが如何にも鈍重粗雑である。このことについては久しい前から私のしばく提言したことありますが、わが國の科學教育にはもつと音に對する關心を高め、音樂的な耳を訓練することが絶対に必要だと思ひます。

(終)

青年音樂家の結合

音樂が戰争中に何をしてきたかについてはむしろ音樂家よりも大衆の方がよく知つてゐるかも知れない。御承知のやうに音樂家たちは大東亞戰争の始まる少し前から、情報局の指導で日本音樂文化協會といふのを組織し、いろいろの仕事をしてきたが、この團體も終戰後解散し、且下新しい團體の結成をいそいでゐる。

この新團體とは別に戰争中も戰後も樂界の第一線にあつて、正しい音樂、純正な音樂の普及に努めたつた青年音樂家が結合しようといふ若々しい動きがある。かゝる動きは現在のあらゆる方面にみられることだが、わが音樂界にも革新の意氣に燃えた若い音樂家たちが立ちあがつたことは大いによろこぶべき現象である。

去る十一月一日午後三時、東京の朝日新聞社の一室で第一回の懇談會が催され、この集りに對する活潑な意見が交換されたが、會するものが齊しく考へたことは日本には本當の意味の藝術運動がなかつたことである。變に政治的に動いたり、軍や官の壓制によつて、歪められた運動はあつたが、藝術に志すものが藝術の探究を唯一最高の目的とした團體が極めて尠かつた。といふよりは殆んどなかつたといつた方がよい。そこでこの集りを純藝術運動として新しい音

樂文化の中心的存在たらしめようといふのである。大いに期待をかけてよい團體である。その結成式を十一月十五日朝日新聞講堂でひらくが、招請狀を發した音樂家の方々の名前をあげると次の通りである。(五十音順)

朝倉春子(聲)、石井京(ピ)、市川都志春(作)、伊福部昭(作)、巖本眞理(ヴ)、小倉朗(作)、尾高尚忠(指・作)、川崎靜子(聲)、金子登(指)、北爪利世(クラリネット)、近藤泉(ヴ)、佐々木成子(聲)、清水脩(評・作)、高田信一(指・作)、橋常定(チエ)、土田貞夫(評)、豊増昇(ピ)、永井進(ピ)、野呂信次郎(評)、野邊地瓜丸(ピ)、早坂文雄(作)、原智恵子(ピ)、平井保喜(作)、藤井典明(聲)、藤田晴子(ピ)、藤田文子(聲)、星野すみれ(ピ)、三宅春恵(聲)、森正(フルート)、安川加壽子(ピ)、吉田雅夫(フルート)、渡邊曉雄(ヴ)、ピアノ、聲=聲樂、作=作曲、評=評論、指=指揮、ヴ=ヴァイオリン、チエ=チエロ

(『音樂知識』第三卷第三号 昭和二十年十一月 六八頁)

あゝ暁船舶隊

昭和二十年師範科卒 渋谷正夫

太平洋戰爭のさなか、あまりに拡大された戰域のため、陸軍の兵力を輸送し、船團を護衛するため、陸軍自らが組織建設運営したのが、暁船舶隊なのであつた。

敵潛水艦や魚雷をいち早く発見して、これを避けて進むために、最新鋭の水中電波探知機ス号なる機械を操作するため、聽覚鋭敏な

少年兵を動員し、その音感教育を託されたのが我々音楽学校の男子学生達であった。

憲兵が校内を巡察し、乗杉校長が全教官学生達を集めて、中庭の広場で、「伝統ある我校の終焉が遂に来たのだ!!」と今にも泣き出される様な激越な調子の挨拶があつた後・程なく陸軍省からの学生動員命令に応えたのは、当時一般召集出陣学徒として既に兵役に徵集された諸君の他は、若い二十余名と、吾々の様に師範学校卒で短期現役を終へた数名の者達だけであつた。

東京音楽学校報国隊の腕章と「樂」を象った大きな校章をつけた戦斗帽を被り、やがて、兵と同じ軍服を身につけて行動するが、帶剣もなく階級章もつけないところだけが一般の兵と見分けがつくところだが、當外居住を許されたのは、学生は勉強もあるだろうという計算であつた。然し勉強をするという気分的な余裕はとても無かつたというのが実状であつた。

甲陽中学にある聯隊本部と淡路島の仮屋で約二週間の基礎と実地訓練を終えるとそれぞれ五人編成の班に分かれ、兵役経験者ということで、師範科上級生の吾々が班長になり、香炉園に一、二中隊付、神戸、仮屋の中隊と本部付に分散した。

時に引率教官としての隊長格がピアノ科主任の井口基成先生で、途中召集されて、佐官待遇から二等兵になられ、慣れぬ下積生活後配置転換で本隊に舞戻つてこられ、久し振りの痛飲で倒れたそうだ、という噂が学生達の話題になつたものであつた。或る時の出張で井口先生と尾花本部付班長と私の三人で鶴橋の渡し舟に乗り合せた折に、真顔で君達結婚して三年経つても男の子が生れなかつた

ら、僕のところに聴きに来給へ、云々といわれたことが印象に残つていて甲陽中学の講堂で演奏中ピアノの弦がブッ切れた。「f」の感動とは違つた鮮烈さを覚えている。

甲陽中学（甲子園球場の隣り）に船舶隊の本部があり、たまに用事でのぞいた事務室の黒板に輸送船団とその護衛にあたる兵達の名前や船名が掲示され、又その出発日とか、撃沈の情報が印されていて、戦況の思わしくない状態が察せられた。

戰雲否なるにつけ、戰線派遣順は成績の悪いものからということを聞き、護衛に対する矛盾といったものを薄々感じたりもした頃である。

さて、昭和十九年十二月下旬、阪神沿線の香炉園海水浴場を部隊舎に改修し、機材を整備していよいよ本格的活動を初めようとする迄に約二ヶ月を要した筈である。

中隊本部は三菱の職員クラブの建物があつられ、その下の一室が我々の音感教室になつた。

第一中隊付は岩崎成章君（声楽科テナーで現川崎市の住職）赤松安君（弦楽科コントラバス、現尚美学園理事）木内 菁君（邦楽科謡曲観世流の大坂第一人者）と小生四名は、二人づつ宿舎を民間に出て探した。

木内君と私は、隣組長さんの紹介で、隊と道路を一つへだてた奥田さんという染物工場を經營している方の別荘の二階二間を無料で貸してもらうことになる。

主計大尉で応召中の息子さんもいるから、お互ひ様ですと、小柄な未亡人のお祖母さんが気安く引受けてくれた。

お孫さんのお嬢さんと二人で住んでいるが、別荘地の和式で極上の材木で出来た立派な家で、別棟の離れを野菜園の中にあつらえて、丁度七つの部屋があり、本部も終戦後引揚げる迄の期間、上級生達がここでお世話になつたそうである。

音感訓練用のピアノを微発してくる命をうけ、芦屋一円を廻つて交渉にあたつたが、何処も適當な理由で断られ、幸い地元西宮の

「辰馬家」（銘酒「沢の鶴」の醸造元）で、使っていないからと、伯来黒塗りの大型アップライトを貸してくれることになった。

戦況悪化の割にはのんびり整備した兵舎であつたが、海水浴場を接收しただけに砂浜で、足許がしまらないのが難点であった。

北側の遙か岩壁には尼崎の工場の煙突群が黒い煙を吐きながら林立し、南に神戸の須磨あたりが望見されるのだが、白砂青松の瀬戸内の海は確かに風渡り、遠く淡路の島影を見ていると、平和な静けさに溶け入りそうな気分にさせしたものであつた。

宿舎は寝泊りだけで、食事は軍の支給を受けた。学生食管として、手頃な大きさの木製の桶一個を炊事室から貰い、度々宿舎で食べた。

やがて焼出された大家族の食糧の一部になろうとは予測もしなかつたが、喜んでもらえたのはせめてもの慰めであつた。

三月の大坂空襲の跡を辿り、その惨禍に驚き悲しんだ。木内君の実家も全焼して、田舎に引上げたらしい。奥田さんの工場や住宅が焼け出され、義弟の方が焼夷弾の直撃で足をやられ、ガス壊疽の恐れありと足を切断し、間もなく死亡されるという悲劇を目の当りにすることもあつた。

神戸の空襲で、焼夷弾の火がテープの様に地上に舞落ちてゆく様を遠望していると、あだかも大花火かと見まごうばかりで、一瞬空襲されていることを忘れさせるものがあつた。師範科の一年下の菊池君（福島出身）がこの空襲で服に点火して、消そうと海に向つて走つたが、無残に焼死したとのニュースを知り、愕然となる。可哀想なことをした。

ズーズー辯丸出しで、熱っぽく語りかけてくる彼の話しぶりには、獨得の親しみがあり、眼鏡の奥にパツチリ開いていた瞳の輝きが忘れられない。今度の動員では、確か病死をまざると三人の犠牲者が出了た訳である。

陸軍省からの命令で、軍代表で引卒してきた牧嗣人中尉（バス歌手）が、先任将校の隊付中尉を伴つて、報国隊学生の指導（少年兵に対する）案を説明する為に突然一中隊を查察に來たことがある。生憎私は外出中だったから、作成してあつた計画書を提示できなかつた。牧中尉が先任将校になじられ、後刻作成してあつたことを牧中尉が聞き、大変残念がつたものである。

確かにそれは二十年四月八日B29唯一機による空襲で、折角整備された第一中隊の諸施設はメチャメチャに破壊されてしまい、休戦状態止むなしの状態に陥つた。

当日は、快晴の砂浜で朝礼中だつたから、堀りたての防空濠に待避することが出来たが、幸運にも濠のそばに落ちていた爆弾一個は不発であつた。

見習士官が片腕を失い、若干の兵隊が負傷した。騒然たる中で、兵器物資の移動運搬の命が下る。

神戸の夜空に仰いだ油脂焼夷弾が、次から次から降つてきて、本

部のアチコチが燃え出している。同居の見習士官（群大医局員）の指図通りに、重要なものは火の届かぬ場所に集結。さてそれでは

と、我々の大事な借物ピアノを焼いてはならじと庭の砂地の片隅迄運び出す。正に火事場の馬鹿力である。二、三度しか訓練に使えないかつたのが「残念」だった。

二人は目で肯きあうと、宿舎のお婆さん達の安否が気になり、當門を避けて、植込みの垣根を押し分けて道路に出る。

幸い家もお年寄りも無事であった。（ただこれが“戦線離脱の罪”で重賞倉だ」と見習士官に怒鳴られることになる。）

私がお世話をした二中隊の岩崎班の宿舎を見舞い、帰隊すると、非常呼集がかかり点呼の時に居なかつたことが気になつていていたところへ、学生の係である伊藤忠太郎少尉がこちらで「おー皆大丈夫か！」と咎めだつてもされず、反つて慰められたので、思わず内心安堵したものである。

やがて、無聊をかこつていた私と二中隊の岩崎君二名に、八月十四日前十一時千葉県佐倉聯隊に入隊すべくの召集令状が遂にきた。

戦争末期の静岡県三島への米軍上陸作戦に対応しての特別編成部隊下士官要員としてであった。

（『同声会会報』第三三一九号 昭和六十年一月 一〇頁～一二頁）

音楽学校の革新（座談會）

出席者 青砥道雄 井上武士 蘭田誠一 野村光一

司會 清水 傲

無能教授の追放と新人の採用

清水 終戦後各學校とも戦争責任追及と民主化のため相當の動搖を來たしてゐるやうです。この際、今こそ將來の日本の音樂學校の行くべき道を明にしておくべきだと思ひます。先づ教授陣の根本的な刷新といふふうなことからお話を伺ひたいと思ひます。現在官學私學共に無能教授の追放と清新澆瀉な新人の採用といふところに刷新の主眼點があるやうに思ふが如何でせう。

青砥 上野については校長にその人を得なかつたといふことが大なる問題だと思ふ。相當いゝ教授がゐたが、校長の抑壓に會つて野心的意見を持つてゐる人は排斥され、校長に追随する人がはびこつて、音樂の衰弱を來たしてゐる。今後は校長に専門家を以て當て、さうして教授の團體を生かした新しい制度を拵へなければほんたうの教授陣の刷新はできないと思ふ。

清水 校長の権限と教授會の権限を明確にすることが肝要ではないでせうか。

青砥 文部省の考も變へなければいけないけれども、あゝいふ専門的な學校になると、藝術のわかる人を上におき、一方學校行政に對しては行政事務官のしつかりした人をおく乗杉校長は音樂行政はうまいが、藝術のことに對しては信頼できないと思ふ。さういふ校長に對して藝術的見地から主張する組織を拵へることが必要だと思ふ。

井上 藝術家でない行政家畠の人が校長になつても、その下に學

校の教授連をしつかり統制して行くやうな技術家がをればいゝわけですね。例へば前の湯原校長の頃の島崎赤太郎さんのやうな方がゐればよい。しかし私も音楽のほんたうにわかるしつかりした人が校長になることが理想だと思ふ。

清水 音楽學校の教授といへば、外人以外は、音樂學校卒業者が殆ど大部分を占めてをりますが、上野の出身者でない優秀な人を教授に採用することはできないものでせうか。

青砥 さうしないと色彩が舊態依然で、時勢についていけないと思ふ。もつと社會性のある人を入れる。例へば野村さんなんかを音樂學校の教授にすればいゝと思ふのですがね。

野村 それは理想的な計畫だと思ふのです。けれども藝術家であつても必ずしも教授として適當でない人もある。結局いちばん問題になるのはその人選ぢやないかと思ふ。私は近頃考へが保守的になつてゐるのですが、上野には上野の一つの傳統があると思ふ。其傳統は悪いところもいゝところもある。この傳統が上野を今日まで盛にし、日本の音樂を盛にしたと思ふ。外から入つた人がさういふ傳統を崩すやうになると、上野がきづいた音樂技術に動搖を來たしはしないかと心配する。問題は、傳統に更によりよきものを附加へ、日本の音樂技術を高からしむる人材が世にあれば、これは快く入れるべしです。無方針に全然異色的な人を入れると、結局向ふの今までの力を壊してしまひ、また今までの生活や経験が邪魔をして、しつくり行かない惧れがある。兎角黨派的になり勝ちの日本人だから、たゞさへ黨派的な上野の中に更にいがみ合ひを起すやうな事はさけなければならぬ。何といつても上野から出て行く若い人

達に最も技術の優秀な人が多いのだから、さういふ人を次の時代の教授としてまた候補者として採つて行くのが最も妥當な方法だと思ひます。

青砥 野村さんのお話には賛成だが、過去十年の間に既に上野の傳統は破れて、變な空氣になつてゐるのぢやないかと思ふ。

野村 さうとは思ひません。あすこには生徒を教へる資格のない無用な人達が澤山ゐると思ふ。さういふ人達は退陣して貰つて、もつと有望な新人を加へるといふことはうが重大なことぢやないかと思ふなあ。

清水 例へばどういふ新人がりますか。

野村 それはすぐおいそれと擧げられませんけれどもね。

薗田 傳統といふといゝ意味にもなりますけれども、悪くいへば視野が狭いといふことになりますね。傳統を守るといふことになれば、少しでもその傾向に向く上野系統のよい人にやつて貰ふのが無難だが、上野系統でなくして異色であつても、いゝものはいゝのです。さういふ人に對して、上野の人達が眼を開かなければいかんと思ふ。

野村 僕がいつてゐる意味は悪い傳統でない。

清水 教授會の權限を擴大しなければならんと思ふのですが、どうでせう、野村さん。

野村 それは當然なことです、教授會の意見がわかる人が校長にならなければ意味がないと思ふ。今までのやうな單なる行政官だつたら意味をなさぬ。

私學の特徴

清水 私學には私學のいゝ傳統がなければならぬと思ひます。

歐米の私學では各々はつきりした特徴を持つてゐるが、さういふ問題について如何ですか。武藏野に關係してをられた蘭田さん……。

蘭田 私學は歴史が浅いから傳統といふものは見えない。だんぐり方向がきまりつゝありましたがね。

野村 少し悪口になるけれども、日本の私學は上野の悪い傳統の模倣をやつてゐるやうに思ふ。日本の私學こそもつと早くからいろいろな系統を有する人を集めて、そこで反対の異色的な色彩的混つた教育を與へて、そこから上野と違つた花を咲かせ實を結ぶべきだと思ふのです。

蘭田 日本の私學は經營のはうが先づ第一に問題になる。それに生徒が相當の人數ゐなければならぬ。それを確保するには學校が或る資格を持たなければならぬ。それで今日までは専門學校令になるとか或は検定をとることにいそがしかつた。今は一段落ちついたところですから、これからいゝことをして行く段取にならぬぢやないかと思ふのです。

青砥 私學ではちよつと特色のあるのは國立だけでせう。あれは經營がうまく行けばもつと發展するのですがね。

清水 どういふ形ですか。

青砥 聲樂でもピアノでも首腦になる人が協力して建てた學校なんですね。音樂藝術のはうに行くといふ特色を持つてゐる。ただ財力が伴はないといふところに悩みがあると思ふ。

井上 戰爭中いちばん音樂の勉強をしてゐたのは國立ぢやないですか。上野なんかあまり勉強できなかつたやうですね。

蘭田 また勉強し易かつたところもあります。聽くところによれば、學校工場をつくり學校にある機會が多いから、その暇の時に授業を受けるといふことが續いてゐた。

教師養成か藝術家養成か

清水 乘杉校長は、日本の樂壇のレベルから考へると、いま最も必要なのは、音樂教師だ、それを作らなければ日本の音樂全體が向上して來ないといふ風に主張してゐた。井上先生は師範科の御出身ですが、その點如何ですか。

井上 師範科と本科、いはゆる教師養成機關と藝術家養成機關の二つをはつきり區別し、教育の方針を全然變へなければいけないと思ふのです。乗杉校長のお考から見て、果たしていい教師を養成するやうに學校の教育が實行されてをつたかといふ點は私共は非常に疑問に思ふのです。本科のはうでちよつと専門家として立てさうもない人はどつかの先生でも勤めて胡麻化して行くとか、それから師範科でも少し聲がいいとかちよつと作曲でもできるといふやうな人は、教師を嫌つて華かな藝術的な生活のはうに入つたとか、甚だしいのは女學校の先生から流行歌うたひになつた人もあります。そういう行き方は學校の組織が悪いと思ふ。大體學校の教育の方針が本科のはうでも教育學を少しばかりやれば中等教員の免狀をくれることになつてゐる。あいふことは實際必要はない。本科と師範科と學校を分離すれば理想的でせうが、入學する時に、俺は教師になる、俺は純粹藝術家になるのだと肚を決めて入つて来て、入つた生徒を學校ではつきり區別して教育して行く組織にならなければ嘘だと思ふ。

清水 例へば、師範科の専門の教授がゐていいわけなんですね。

井上 教科の内容は全然違ふべきだと思ふのですね。

青砥 学校を別にすることは学校經營のはうからいふと、現在の所困難ですね。本科を出て藝術家として立つやうに音樂家を遇する生活がなければいけないと思ふ。それが根本問題だと思ふ。

菌田 青砥さんの仰つしやつたやうに卒業してからの生活の安定ですね。先生でもしなければ食つて行けないといふので、今までさういふことになつたのです。それに音樂の先生を養成するといふのもやはり非常に大切なことなんで、どうしても日本ぢや或る程度技術ができないと、地方に行つて教へられませんから、結局音樂學校内部で、本科と師範科とたいして變らない授業をしてゐたのですね。

清水 武藏野は……

菌田 殆ど同じでした。はつきり本科と師範科を區別することも制度として必要なんですけれども、いままでのことから判断して、音樂的雰圍氣が低いから生徒はどうちつかずの道を選ぶことになるのだと思ふ。日本の音樂的雰圍氣が向上したら、入學する生徒は自分の目指す道をはつきりしてくると思ふのです。だから制度だけの問題ぢやないと思ふ。まだ準備が足りないとか、歌がよくないとかピアノがあまりよくできないから師範科を受けようといふ人が大部分なんです。

清水 高等師範には音樂科はないのですか

井上 藝能科の中に圖畫工作の教師養成があるだけです。一つの型としては、女高師の體育科があります。實際の内容は體育音樂科

なんです。音樂の資格も與へるやうになつてをります。

菌田 體操と音樂では兩方ともなか／＼うまく兩立しないのです。體育でうんと運動すると、音樂の練習ができない。それでどつちつかずになつて、體育科の教官も分れたいといふ話がある。上野の内部でも師範科は女高師に合併してしまつたらどうかといふことをいつてゐる人があるさうですから、或はさういふことも一つの問題になりはしないかと思ふのです。

野村 理想的な形からいへば、二つをはつきり區別しなければならぬことは眞理だと思ふ。けれども實際をいふと、いまの音樂志望者は、菌田さんが仰つしやつたやうに全體の程度が低いので、上野へ入るといふ便宜上技術の問題で本科と師範科にと分れて試験を受けてゐるやうになつてゐると思ふ。ところでかういふやうな程度の低いところに持つて行つて、師範科を高等師範とかどつかに假りに附屬させてしまひますと、その結果は師範のはうの教育はいまよりもつと悪いことになるのぢやないかと思ふ。正直にいふと、日本のいはゆる師範科を出た音樂者達の教養の程度の低いといふことに實は驚いてゐるのですがもつと音樂的情操といふものを教育しなければならん。その人達の教養とか見解を廣くしなければならぬし、少くとも現在においてはいい教育をさせるには、上野のやうな天才的な人が入つてゐるところに入れて、その空氣の中で高邁な藝術精神を教へるのが一番安全な道ぢやないかと思ふ。實際いふと、藝術家になる人は放つておいてもいい。日本に藝術教養を高めるにおいては、國民全般に音樂を擴げることが必要だと思ふ。そのためには立派な音樂教師を作り上げるといふことが、日本の音樂政治において

はいちばん必要なことぢやないかと思ふ。既に藝術家は澤山ござります、いい教師を澤山作ればいいと言ひたい。藝術の音樂に關係して生活した人間はつくづくさう感じます。それほど音樂を愛好する大衆といふものの教養が實に低い。

早教育と就業年限

青砥　いい藝術家を作るには、上野の兒童樂園のやうなところで、國民學校の五六六年から天才教育をやつて行くことが必要ぢやないかと思ふ。

井上　上野の兒童樂園については乘杉校長の考へたことはいいですが、ほんたうの早教育とか天才教育に向いてゐなかつたのぢやないですか。

清水　相當いい加減なものですね。

井上　量を澤山とつて、悪くいへば……。

蘭田　一つの事業だつたのですね。

清水　文部省の専門學校令による入學年齢教育の方法、豫科本科の就業年限、等の問題も大切だと思ひます。例へば厭でも應でも豫科と本科を四年やれば卒業するといふのでなく、早いものは二年くらゐで卒業する、遅いものは五年も六年もかかるといふやうに卒業コンクール制をとつて、優れた藝術家を養成するといふ制度も考へられると思ふのですが、いかゞでせうか。

青砥　それも必要ですが、今まで音樂家は常識がないといはれてゐた。人を作るといふ教育が没却されてゐたのぢやないかと思ふ。それで研究科制度をもつと活用して充實させ人も制限する。あれを大學まで引上げるといいと思ふ。さうするとそこを出た人は世間へ

出ても通る人になると思ふ。生活ができないと、勢ひ先生生活をやらなければならなくなる。

野村　日本の音樂學校がドイツとかフランスの音樂學校の制度をそのまま鵜呑みにすることは、私は間違ひだと思ふ。やはり日本の音樂學校の制度は日本の社會環境をよく考察した上で獨得の音樂學校組織を作らなければ嘘だと思ふ。ただ無暗に年齢を下げてごらんなさい。ピアノだのヴァイオリンはできるかも知れないが、學校を出たら教養がないものになる。そのために世の中にもまれて、折角の伸びるべき葉っぱや花がもみくちやにされることがある。この意味で、早教育はもちろん必要だから、入學の程度を下げるとき同時に上のほうを擴げるといふこともやらなければいけないと思ふ。

井上　その點では音樂教育ばかりでなく、全般の教育についても考へなくちやなんらん。國語の問題でも、假名遣ひや漢字をうんと改革し、國民學校で習ふことがやさしくなつてしまふかも深味が出來てくるやうにならなければ駄目ですね。

野村　同感ですね。

井上　國民學校と中等學校女學校あたりのところに音樂を主體とする、しかもほかの教科も或る程度やるといふ制度ができなければならない。國民學校で音樂をやつても、中等學校女學校へ行くと、ほかの科目で苦しまなければならない。それで専門學校へ入つても駄目です。

野村　音樂學校を文部省の専門學校令だけで縛つて貰はないで、音樂とか美術とかの特殊教育をする學校令を作らなければ駄目だと思ふ。

菌田

この意味からいへば、私學の學校こそすすんでいい制度を作り、音樂的によくすることを目標にせねばなりません。

野村 私學は規模を小さくし、先生を捨へることをやめて、ほんたうに天才音樂家が出るやうに、僅かばかりの生徒をとつて、それを塾みたいにして、そこに金をうんとつぎ込んで教育したらしいと思ふ。

菌田 結局財政上の問題になる。

興行化の排撃

清水 上野が非常に興行化してゐたことの一三の例として、「音樂學校作曲」や出張演奏を行ひ、相當收入を擧げていたのです。

野村 そんなことは絶対にやめたはうがいいと思ふ。

青砥 學校では普通の演奏會のやうなことはやめて貰ひたい。

清水 音樂學校作曲といふのは個人名義の場合はいくら、學校名義ならその倍額で半額は學校の收入になる。額も小學校なら三十圓、中等學校なら五十圓、専門學校は百圓以上とか、ちゃんと額が決つてゐるのです。でき上つたものについては乘杉校長が必ず一度聽き、そこが悪い、ここが悪いといふことを一言いつて直させて發送する。

野村 藝術的見地からいって、そんなことは成立たない。絶対に排撃すべきだと思ふ。

清水 私學にはそれはありませんね。

菌田 定期演奏會批判

清水 上野は定期演奏を年に何回かやつてをりましたが、あれな

んかどうでせう。

野村 定期演奏會をやることは結構だ。それを目當てに生徒たちに勉強させ、これを校外の人に聽かせることは結構だと思ふ。それをほかの演奏會と同じやうに、日比谷に持つて行つて興行的にやることは、私は感心しない。やはり上野の演奏會は狭くてもいいから昔のやうにあの奏樂堂での學校の空氣にしたりながらやることがいちばんいいと思ふ。

青砥 昔の上野の演奏會は樂しかつた。

井上 土曜演奏會は氣持がよかつたですね。

菌田 日比谷でやつても興行的でなく立派な音樂會にすればいいのぢやないですか。いい音樂會をするなら金を取つてやつてもいいと思ふ。音樂學校らしい研究態度でね。

野村 それを無理矢理に切符を賣つたり廣告を出したり、普通の音樂會の型通りにやるからいけない。外の空氣が混じると濁ります。一體に日本の學校教育は、大學でも専門學校でも東京の街の眞ん中にあるのはよくないと思ふ。大學は田舎にあつて、その大學だけで空氣を作つてゐるところで、靜かに學生が勉強して、いい成績を擧げるといふことが、これが學校教育だと思ふ。さういふ意味で、日比谷よりも、あの杜で教育し、發表して貰ひたいと思ふ。

菌田 上野が上野だけでやつてゐた時代から日比谷に進出したのは、それは上野の講堂が狭いので幾日もくらなければならぬといふことから出發して、外に出たのです。

野村 それはわかるのですが、結局最後に失敗したのぢやないかと思ふのです。

邦樂科は廢止せよ

清水 邦樂科は乘杉校長が設けたのですが邦樂科の生徒達は、何等の權威も與へられてゐない。結局家元の出店にすぎない實情です。私は純粹の邦樂研究機關といふものにしてしまつたはうがいいといふふうに考へてをりますが……。

青砥 上野の音樂學校の邦樂科こそ分離していいと思ふ。西洋音樂と邦樂とはどうもマッチしないと思ふのです。家元制度を打破するために邦樂科を設けたのか、日本音樂と西洋音樂を交流させて新たなるものを作ることが目的か、それがはつきりしてゐない。

青砥 洋樂の人の多くは日本の音樂を知らない。それを知らせるために、日本の音樂を取り入れるといふことは必要だ。さういふ意味で、日本音樂のいい演奏を聽かしたり、文化史を研究することは必要だと思ふ。

菌田 乗杉校長が新設したのは、邦樂には學校として教へることころがなかつたから、西洋音樂と並んでつくつていきたいといふのが目的だつたのでせう。

野村 日本音樂は家元制度を壞したら、それ自體が潰れちやふですね。それほど弱いものですね。あすこの生徒であるに拘らず、家元からお許しを得ようとするなら、その家元に行つてお金拂はなければ駄目だといふのです。

菌田 官立といふ制度をかりて家元の教習所が上野にできたやうなものです。

野村 聞くところによると、家元は最初の間は来る。位勳等がつくと學校に來なくなるといふことなんです。學校へ來るのは位階勳

等を貰ふためなんですね。

青砥 音樂學校には勳一等ばかり狙ふ人がゐちゃ困りますね。

(昭和二十一年十二月二十一日於本社)
〔音樂藝術〕第四卷第二号 昭和二十一年十二月 一〇六頁)

音樂學校改革論

教育界の民主化は終戦後、着々行はれてゐるが、日本唯一の「官立音樂學校」の改革は全樂壇のみならず日本の文化にとつて重大な問題である。以下箇條書に述べて見る。

一 劇一的教育を排す。

從來、官公私立の音樂學校は劇一的な文部省の専門學校令の下に、音樂を知らぬ役人によつて指導され來つた。元來音樂學校は美術學校と共に他の専門學校とは全く異つたものであつて、藝術のアカデミーとして純正音樂藝術の最高殿堂たるべきである。したがつて現在のやうな貧困な組織では到底「文化による世界への貢献」といふ重大使命を果すことが出來ぬ。

數十年間、その獨裁制の下に、音樂學校を退嬰化せしめてきた乗杉校長の退陣によつて音樂學校の改革はその曙光を見ることとなつたが、それは單なる曙光にすぎなくて、尙老朽、無能な教授陣がしがみついてゐる以上、日暮れて道遠き感が深い。

二 教授陣の根本的更改

上野の教授陣がいかなる内容のものであるかは、樂壇人のひとしく知る所である。役人あがりの教授が主導權を握り、それが前校長の周圍に寄生し、藝術教育機關たる音樂學校をいかに毒してゐた

か、むしろ慄然たるものがあつた。眞の藝術は藝術家の手で育まれるといふことは、當然すぎる程當然のことである。老朽無能の故に

學校にしがみつくといふのはその御當人にとっては重要なことかも知れぬが、藝術の殿堂には入場を許されぬ。しかも學校の外なる樂壇には尙多くの有能な音樂者が活躍してゐる。話にきくと毎年の入學試験は、いはゆるお弟子を入れさせるために様驗の情實があつたといふことだ。特に管樂器やチエロの生徒の中には、他の樂器では入學出來さうにないから、チエロや管樂器やオルガンで入學を許したものもあつたといふ。世にもまれな奇怪事が行はれていたといふ。藝術の怖るべき冒瀆である。

現在の全教授は、この際總退陣し、あらたな校長のもとに、殘るべきは残し、老朽無能なるは退陣せしめるべきを希望する。と同時に日本唯一の官立音樂學校として恥しからぬ陣容を整ふべきだ。殊に學外の有能な音樂者（日本たると外人たるとは問はぬ）を派閥を超えて迎へるべきである。

三 興業的學校經營を排撃す

音樂學校は斷じて音樂團體ではない。飽くまでも音樂アカデミーでなければならぬ。明治より大正の初期にかけての上野が、日本の樂壇にのこした足跡は大きい。だが前校長就任以來、同校生徒の出張演奏、同校管絃樂團の興業的活動等、近年は特に眼にあまるものがあつた。ギャランティーの問題、獨奏者（生徒並に教師）の選擇等に、何かはつきりせぬものがあつたときく。また同校管絃部の技術上の問題からもかゝる企業性は完全に一擲せねばならぬ。年何回かの定期演奏もよからうが、アカデミーならばそれらしい良心と権

威を忘れないでほしい。

四 師範學校的組織の廢止

音樂學校本科は断じて音樂教師（中等學校その他の）を養成する機關でないのはいふ迄もない。しかるに事實は師範學校的空氣が充満してゐる。なるほど現實には上野の卒業生は全國の中等學校から引っぱりだこだといふ話である。それ故に全校をあげてこれが供給に努めるのは一應うなづけないことはない。しかしそれがために師範科といふのが併設されてあるのだから、本科の教育は事情の如何にかゝはらずあくまで純正音樂藝術の研鑽に進むべきである。したがつて入學年齢、學科目、卒業試験等に根本的改革のメスを加へねばならぬ。例へば生徒募集人員にしても、聲樂科とピアノ科は相當に優秀なものでなければ入學出來ない現状であるが、先にものべたやうに他の諸科に到つては程度に於てガタ落ちであり、それから諸科の教授に生徒を持たせんがために、敢て「素人」にもひとしい者を入學させるといふ。

次に入學年齢であるが、この點については現今の制度はそれほど不合理ではないが、戰時特例は一日も早く取り除き、天才兒童には特別科の如き制度を設け中等學校卒業を待たずに入學しうるやうな道も講じてよい。現在併設せられてゐる上野兒童音樂園のごときいゝ加減なものはこの際閉鎖し、眞に優秀な兒童の教育をなしうるやうな施設を開くべきだ。

五 師範科の分離

少壯教授の間で師範科の分離を唱へるものが相當にある様子だ。つまり音樂師範學校を設立し、教育者の養成と藝術家の養成とを制

度上にも内容上にも劃然と區分すべしといふのである。この問題については既に久しい以前から論議されてゐたが、一國の文教政策の上から慎重な検討を加へねばなるまい。要は本科の藝術教育の推進が師範科の同居によつて稍もすると濁らされるといふのがその實情である。そこには前にものべたやうに本科に於てすら師範科的空氣と教授内容があり、これを改革する所から師範科分離の問題も瞭然として來るに相違ない。現在の師範科についていふなら、これはまた音樂教育者養成機關としてはあまりにも貧困にすぎはしまいか。

六 邦樂科併置を排す

元來、音樂學校は洋樂を主體として創立せられたものであつたが、所謂日本主義の波に乗つて併置せられた。なるほどわが國の音樂といふ見地からは邦樂を除外することよりもこれを併せ備へることの方が、一應尤もにきこえる。しかし邦樂界の積弊といはれてゐる家元制度の徹底的打破なくしては、これを音樂學校的組織の中に融合させることは不可能である。前校長は或はこれによつて家元制度の缺陷を取り除かうとしたのかもしぬが、それは一役人の力で如何ともしがたい傳統的因習である。この事は今は論ずる場所でないが、民主主義達成の上から、邦樂界の封建制は今こそ打破せねばならない。ともあれ家元の出店たる音樂學校邦樂科は醜態も甚だしい。これをカヴァーセンとして、お茶の水分教場の選科に邦樂科の牙城を築かうとした愚策は何としても許しがたい。この際邦樂科の分離乃至は廢止によつて、邦樂界改革の緒口としてほしい。

七 結 語

一口にいはう。思ひ切つた改革を新校長にのぞむ。(音和會)

編輯部より——本稿は去る十一月十五日東京の朝日新聞社講堂に於て開かれた青年音樂家の集まりたる音和會結成式で討論された意見を同會に於て纏めたものである。但し右は音和會全員會員の意見でなく、當日出席した十一名の會員の責任に於て寄せられた。尙今後機會ある毎に同會定期會合の討論を本誌に掲載し、廣く批判を俟つ考へである。

(『音樂藝術』第四卷第二号「時評」欄 昭和二十一年二月 一四〇—一五頁)

音樂學校論

——大學昇格に關する私見——

吉川英士

東京音樂學校は六・三・三・四の新學制に應じて四年制の大學に昇格させることに教授會の決定を見たことは、既に昨秋小宮校長談としてラヂオでも發表された通りである。私は今この大學昇格に関する諸問題に就て少しく述べて見度いと思ふのであるが、之は飽く迄私個人の立場から述べるのであつて、勿論學校の代辦者として述べるのでないことを斷つて置かねばならぬ。

A、大學昇格の必要性

世間には、音樂學校を大學に昇格させる必要が何處にあるのかと疑ひを持つ人があるに違ひない。然し、新らしい學制による大學は中學の年限の短縮によつて、殆ど從來の專門學校と同じ程度にしか當らない。その入學者の年齢は從來の音樂學校のそれより僅かに一歳の年長であるに過ぎない。若し假りに、新制高等學校程度の音樂

學校にするならば、從來のそれよりも二年だけ程度が下がることになるのである。

勿論、大學昇格は單にこのやうな就學年齢や就業年限からのみ必要なのではない。小宮校長や學校當局の意圖は、質的な變革にあるのである。即ち、大學に相當するやうな内容を充實させることである。具體的に云へば、作曲科や音樂學科等の充實及び一般技術教育の知的又は精神的裏附けと言ふことが企圖されているのである。換言すれば、音樂技術を訓練する音樂專門學校から、音樂藝術の蘊奥を極める音樂大學に高めようとしているのである。

B、音樂單科大學か藝術大學音樂部か

さて、美術學校も同じく大學に昇格の方針であると聞くが、音樂大學や美術大學が各個に獨立している方が良いか、それとも兩者が合同し、之に他の藝術部門を合せて、茲に一つの藝術大學を建設した方が良いかは、大きな問題であると思ふ。私自身は以前から藝術大學案に賛成であつたが、音樂と美術とはその教育方法に非常に差異があること等の理由で、音樂學校の内部では必ずしも藝術大學案に賛成でなかつた。然しその後、國立劇場設置案や演劇學校創設案が急に進展した結果その案の副產物（？）として、將來、演劇や映畫をも加へることを前提として、茲に綜合藝術大學案が大きくクローズ・アップされて來た事は、私にとつては殊に嬉しい事柄である。

然らば何故、私が音樂單科大學案よりも藝術大學案に賛意を表すかと言ふ點に就いて述べて置かねばならぬ。

先づ綜合藝術大學に於ける特長の中、研究及び教育に就いて云へ

ば、各學部の共同研究の可能と、他學部聽講の便宜と云ふ點が考へられる。共同研究の二三の例を擧げるならば、オペラに於ては、舞臺裝置は美術部の、音樂に音樂部の、アクションは演劇部のそれ々の教授が出て来て行へるし、トーキーに於ては同じく音樂部と映畫部が共同して研究することが出来るし、假りに源氏物語をオペラ化^{マッタ}する場合にも、音樂部、美術部、演劇部の共同研究は極めて有效であらう。尙、之等の實技方面の研究以外にも、例へばルネサンス藝術の各部共同研究とか、大陸藝術の日本化の過程に関する研究とかの如き、學術的研究も、綜合藝術大學に於て初めて可能な研究題目である。

他學部の聽講の必要は、例へば音樂學校のオペラ研究生、映畫部のトーキー研究生、美術部の舞臺裝置研究生の場合に生ずるものであつて、彼等はそれ^マ演劇部、音樂部、演劇部の講義を聽く必要があるのである。

次に、經濟面からの特長に就いて云へば、一般教養のための學科、例へば語學、歴史、哲學、美學・藝術學の如きは、合併授業又は教授の交換が可能であること、更に、圖書館や講堂の如き施設も場合によつては共同利用が考へられる。（但し各學部の専門書は圖書館よりもそれ^マの學部所屬の研究室に備えへ附けた方が適當であろう。）

以上が即ち藝術大學存在の理由であるが、唯心しなければならぬ點は、各學部の特殊性の確認の必要と言ふことである。例へば豫算の計上に際して、各學部に於て、設備費が多く必要な部もあれば、人件費が多く必要な部もあるとか云ふやうな實狀はそのまゝに認め

られねばならぬ。從來東京大學の例などに於ては、各學部に於ける豫算の特殊性の認め方が不充分であるために、可成りな無理をし、文學部の副手の給料は書籍費の一部から出され、文字通り「本食ひ虫」と云ふものを生じた事は注意すべき惡例である。

C、附屬高等學校の問題

諸藝術の中でも音樂は最も早期教育を必要とする藝術である。それ故に音樂大學が出來てもそれに至る過程に於ての音樂教育が大切である。此處に特別な高等學校の設置が要望される。從來の考へ方からすれば「豫科」が望ましいのであるが今度の新しい制度ではそれが許されぬことになつてゐる。普通高等學校とし、この卒業生は他の大學へも入學出来るやうに考慮されねばならない。然し自習時間その他を極力音樂の實習に當てゝ、特殊高等學校的機能を發揮させるのである。それは豫算問題で新設が不可能ならば、既存の學校と提携しても宜い。丁度東大と一高が提携するやうに。そして東京以外の都市に於ても全國の數ヶ所に、音樂教育に特に力を入れるクラスを持つ、特殊高等學校の設置が我々の要望なのである。

D、音樂學部の問題

音樂學部には從來の器樂科や聲樂科や作曲科の外に、指揮科や樂理科と云ふものが設けられる筈である。器樂科に於ても合奏専門の授業が新設され、聲樂科にはオペラ科と云ふものが、新たに獨立することが企てられてゐる。然し何と云つても大學昇格後の最も著しい特長は、作曲科の擴充と樂理科の新設とであらう。それは日本の音樂文化の發展の必然的歸結であり、自然的反映であるとも見られ

よう。音樂學校即ち演奏技術者養成所と言ふ時代からそろ／＼脱しようとしてゐるのである。

從來の日本の音樂家中で、「上野」が送り出したのは主として演奏家であつて、作曲家、指揮者、批評家、學者は殆ど他の諸大學の卒業生にその繩張りを譲つてゐたのであつた。然しそは必ずしも歓迎すべきことではなかつた。普通の大學生に於て、普通の學科を修めたら音樂を身につけることは、可成り無理なことであつた。どうしても音樂學校に於て音樂に關する凡ての研究が出來る狀態こそ理想なのである。それには音樂學校が單に音樂技術專修所であつてはいけないのであつて、音樂に就いての凡ゆる學問や美や藝術に就ての廣い教養が授けられねばならぬ。之を満足させる態勢が整へられて初めて、音樂學校から良き指揮者や批評家や音樂學者が送り出されることになるのである。かくて初めて日本の程度の高い、本格的な音樂學者、作曲家、指揮者、音樂批評家が出ることになり、この事がやがて日本の音樂文化を一段と引上げる原動力になるのである。

E、邦樂科の問題

このやうな學科が擴充増設されゝば、從來音樂に關心を持ちつゝも、演奏技術家になることを欲しないために、大學の文學部邊りに籍を置いて、學外に於て個人教授を受けつゝ細々音樂研究をつゞけてゐたやうな學生は、喜んでこの音樂大學又は藝術大學の音樂部に馳せ参するであらう。そしてこの新しいグループの學生の參加は、一般演奏家志望學生にも、美と眞理の探究に於て、良き刺戟になると思はれる。

現在の「上野」には、能樂・箏曲・長唄の三科が、邦樂科として置かれてゐるのであるが、大學昇格後に於て邦樂科が如何に取扱はれるかに就ては未だ決定してゐないやうである。之に就ては學内に於ても學外に於ても非常に意見の相異があるらしい。先づ邦樂は大學に入れない方が宜いと言ふ説がある。この説の根據としては、次のやうな事が云はれている。

- (1) 音樂學校邦樂科の過去の實績が芳しくない。
- (2) 邦樂及び邦樂器は既に行きつまりにあつて、最早や將來性がない。そのやうなものを大學に取入れる必要はない。
- (3) 邦樂には科學的な教授法が未だ確立してゐない。このやうなものは大學教育にふさはしくない。

然し私は之等の論點に対し賛成出来ない〔。〕順を追ふて私の意見を述べると、

- (1) 音樂學校の邦樂科の過去の實績に就ての評價は、さう簡単に出來ない。農產物や工業製品の改良のやうに、結果を早く期待するのでは無理で、少くとも今後十年待たなければ、正しい結果を見るることは出來ないと思ふ。然しそれが理想的なものでなかつたことだけは、私も同感である。然し之は理想的なプランで、理想的に教育されたにも拘らず、尙且理想的な結果が上らなかつたのであらうか。私にはさうは思へないのである。從來の邦樂科は、能樂や長唄や箏曲が各個バラ々に取入れられたに過ぎない。それ故に能樂科の生徒は能樂は學んでも日本音樂全體に關心を持たない。長唄科の生徒は長唄だけを研究するだけで、箏や能に就ての知識は全くの素人であると言ふ状態である。この點、洋樂に於てはピアノ科の生徒

がヴァイオリンに興味を持たぬと言ふことは少く、聲樂科の生徒でもオーケストラに興味を持つと云ふのと大部違つてゐたのである。換言すれば、從來の邦樂科の生徒は自分の專修する技藝以外には知識もなければ關心も持たぬと云ふ者が多かつたのである。換言すれば、能は知つてゐるが日本音樂は知らぬ。長唄はやるが、音樂一般には素人であつたのである。

然し若し假りに、長唄の生徒が箏も少し彈けるとか、彈けない迄も箏曲の教授から聞けると云ふ風に、又逆に箏曲の人も長唄や能樂の共同演習に出られると云ふ風になつてゐたら、事情は大部違つてゐたのではないか。更に邦樂の凡ゆる分野の技巧と曲趣を集大成し、そこに組立てられた作曲法を教授する所の、邦樂科所屬の作曲科が設けられてゐたならば、更に事情は異つてゐたに違ひない。又、若し藝術家として的一般教養に役立つやうな學科が課せられてゐたなら、邦樂科の實績は現在より遙かに大きかつたであらうものをと、歎かれてならぬ。それ故に、過去の實績は必ずしも邦樂を大學に採入れるか否かの唯一の有力な参考資料にはなり得ない。

- (2) 邦樂及びその樂器の行きつまりと云ふことも屢々聞くことがある。然し之も主觀的な議論であつて、はつきりしない。見方によつてはヨーロッパの現代音樂も或種の行きつまりに逢着していると云へないこともない。シンフォニーの行きつまりと云ふやうなこともよく言はれる。又ピアノと云ふ樂器についてもこれ以上の新しい奏法が生れるとは一寸考へられない。然しバッハがピアノの奏法に拇指を加へたやうに、天才の出現が初めて之等の行きつまりを開けるのである。

成る程、箏や三味線の如きも一應技巧の頂點に達したものと思はれる。然し徳川末期に於て行きつまつたと思はれた箏は、宮城道雄氏等の出現によつて一應の打開を見たではないか。そこでは殆ど日本の指全部が用ひられスタッカート、^{マニ}ピンチカート、トレモロ、ハーモニックス等が極度に利用されてゐる。更に今では、箏のペダル装置、二重柱法等が考へられてゐる。「行きつまり」と云ふ語は凡人の辭書にのみある言葉であらう。

この點に就て最近明るい希望を持たせられたのは、三味線樂に於ける杵屋廣三郎氏の革命的奏法である。それは從來の本調子とか二上りと云ふ如き調子に全然とらはれない調絃法と、長唄や地唄や淨瑠璃に於ける三味線のイディオムを全然脱却した奏法から成るものであつた。それは勿論完成された作品ではないかも知れぬが、ストラヴィンスキーやヒンデミットの音樂を聞くのと同じ位に新しい印象を受ける純粹器樂であつた。三味線の將來性を論ずる人には是非とも聞いて貰ひ度い試作である。兎に角、邦樂及び邦樂器の將來性についての悲觀論も、邦樂科が大學に入るべきでないとする根據にはなり得ぬものである。

(3) 最後に教授法の問題であるが、成る程現在迄の教授法は洋樂のそれに較べて非科學的であり、方法論の検討が足りないことは否めない。それには邦樂その物の特殊性が大きな原因であり、洋樂よりも邦樂が割り切れない味を持つものであり、科學的に教授する事が必ずしも絶對至上の教授法ではないかも知れない。然しいやしくも大學教育であるからには、科學的な方法が取られねばならぬことは當然である。然らば果たして邦樂の教授法は現在よりも科學的に

なり得ないであらうか。私はこの點に關しても樂觀論である。教授にその人を得、貸すに時間を以てするならば必ずや可能であると思ふ。現在でも巷間の師匠の教授方法より一段と科學的であり、教則本の如きも一應作製され、樂譜も五線譜ではない迄も之を重要視して用ひられてゐるのである。そして今や五線譜教授法が併用されようとしてゐる。物事の改革は順序を追はねばならぬ。理論のみ進展しても、生徒が附いて來なければ意味がない。今の邦樂科でも山田抄太郎や宮城道雄、中能島欣一の諸教官はこの點でも確乎たる用意があるらしい。それ故にこの第三の難點も、やがて解消されるこゝと思ふ。

次に、邦樂科の價値は認め、又その授業も認めはするが、之を大學その物には置かず、大學附屬の研究所に置くべきであるとする論者がある。實は從來誌上に發表された所によつて窺ふと、小宮校長や田辺尚雄先生の如きもそのやうな御意見であるやうに思はれる。而もお二人ともにこの場合の研究所は大きな規模であり、研究調査の外に、技藝の傳習と云ふことを考へての研究所であることを前提としてをられるやうである。然しこの問題についての私の意見は少し違ふのである。

先づ邦樂科を大學から除外する場合の社會心理的影響(?)と云ふことである。今になつて大學教育から分離して邦樂を研究所に入れる時には、社會の人は「今迄音樂學校に邦樂科があつたのは、國粹主義時代の學校行政の產物で、不當なものであつたのが、自由主義時代になつて自由な立場から批判されて、除外されるに至つたものである。矢張り邦樂には、それ程の藝術的價値はなかつたもので

ある」と早合點する人々が多いであらうと云ふことである。そして良き邦樂の後繼者がこの道に希望を捨て、折角の傳統的藝術が日本人自らの手で痛めつけられる結果になりはしまいかと云ふ懸念である。

然し一方研究所案には、現在の二、三の邦樂のジャンル以外に、雅樂や淨瑠璃、琵琶、民謡の如き凡ゆる邦樂の研究が出來ると云う

ふ特点がある。この事は現在の音樂學校の邦樂科が僅かに能樂・箏曲・長唄だけを採入れているよりも、一段の進歩であるとも見られる。然しその缺點としては教育面についての問題にある。即ち或る工藝品の如き技術の傳習生を養育する場合と邦樂の演奏者の養成の場合とは可成り事情が異なると思ふ。研究所に設ける邦樂の傳習は、古い藝をそのまま維持すると云ふことには良いであらうが、新しい邦樂を作り出さうとする様な演奏者や作曲家を作り出すことは困難であらう。技術は習得されようが、藝術を身につけることは不可能であらう。進歩的な藝術家を出すことは更に望まれない。研究所に於ては一般教養學科迄は手が届かないからである。洋樂に於て音樂技術家を音樂藝術家に高める必要があり、それが音樂大學昇格の一つの目的であるとするならば、邦樂だけが、音樂技術家の養成で満足すべき理由はなからうと思はれる。それ故に私の理想案は音樂大學（又は藝術大學音樂部）に邦樂科を置き、この中では現在社會に盛に行はれている樂器や聲樂の教授を、新しい組織と方法によつて行ひ、一方に於てはそれ以外の邦樂についての研究・調査・傳習を研究所に於て行ふことである。そして大學の邦樂科には作曲科又はその講座を設け、全般的に洋樂と歩調を合せて行くやうにする。洋

樂や他の邦樂には興味がないとか、新しい方法は取り度くないと云ふやうな保守的タイプの人達には（教師も生徒も）研究所の方へ入つて貰ふやうにすべきであると思ふ。勿論研究所の人と大學の人とは地位や待遇の上で相異があるわけではない。二つのタイプによつて相別れて、別々な道を歩みつゝ、同じく音樂のために貢献するわけである。

私は邦樂の維持と發展は家元制度によつて行はれるべきでなく、批評の確立によつて行はるべきであると思ふ。邦樂に於ける批評家の輩出こそは極めて重要な問題である。そして優れた批評家は、研究所よりも、他の大學の音樂研究者よりも、音樂大學の邦樂科から出すべきであり、事實、やり方によればさうなると思ふ。この邦樂批評の確立が邦樂の發展に如何に貢献するかは、想像に難くない所である。

更に邦樂を大學に入れるか入れないかを論じているのは、第三國人でなく日本人自らであることを深く考ふべきである。自國の古い藝術を大切にすることは決して排斥すべき國家主義ではあるまい。仮りに邦樂の如き特殊な音樂が、英國やアメリカにあつたとしたなら、恐らく、それはそれ等の國の大學生に取入れられるのではなからうか。我々はインターナショナリストであるからと云つて、この問題を第三國人と同じやうに水喰い態度で考へて宜いものであらうか。日本語が不便であるからと云つて、日本の國語を直ちに英語に代へようとする人がないでもないと聞くが、どんなものであらう。私は邦樂のある物がアメリカに行つて盛んに鑑賞され、そして之が日本に於て再認識される日が来るやうな氣がしてならぬ。昔の吉田

晴風氏の渡米時代の新聞批評を讀んだり、現在の東京に於ける外人の日本音樂研究を見ていると、そんな夢を私は見るのである。そして邦樂科と大學の問題を考へる時に、小宮校長と初代校長伊澤修二先生とが思ひ出され、小宮校長が非常な大きな責任を擔つてをられる歴史的校長であることを思ひ、この點で將來の人々から納得の行く英斷的措置を取つて頂くやう切望する。

F、附屬施設の問題

音樂大學（又は藝術大學音樂部）には種々の附屬施設が必要である。

(1) 附屬樂器蒐集館

之は樂理科に於ける樂器學の研究にも必要缺くべからざるもので、世界各地の新古の樂器を蒐集し、分類し、陳列するものである。

(2) 附屬圖書館

音樂關係の文献は西洋と東洋を問はず、凡ゆる分野に亘つて蒐集された圖書館を持たねばならない。特に學外の研究者に對しても利用の便を計るよう、閱覽室の如きも整備すべきである。

(3) 附屬レコード蒐集館

試聽室附のレコード蒐集館が必要である。之は世界の凡ゆる種類の音樂に及ぶべきである。これは特に比較音樂學の講義の参考用としても絶対に必要である。

(4) 附屬研究所

音樂の研究調査、樂器の改良、樂譜の研究、教授法の研究等々のための音樂研究所が必要である。勿論、西洋音樂の外に、東洋音

樂、日本音樂全般に亘るものであるが、研究資料その他の實情からして、研究所の中心課題は日本音樂となるであらう。この職員は大學と兼任であるのが、便利であらう。

(5) 附屬奏樂堂

音樂効果を考へた奏樂堂の設置が必要である。特にオペラや能が上演出来るやうに考慮されねばならぬ。藝術大學の共有施設として演劇や映畫の上演も考慮すべきであらう。講堂兼用であることは差支なからう。

G、國家政治と音樂文化の問題

扱て以上私が述べたやうな音樂大學の構想に對しては原則的に反対する人は殆どないかも知れぬ。問題は結局、豫算にあるのである。然しこの際政府當局や國民に對して心を廣く持ち、眼を遠く未來に向けて貰ひ度いのである。武力を放棄した日本は、文化國家として立つより外に、國家の將來性のないことは誰しも知つてゐる。

然らばその文化國家の具體的な文化とは何であらうか。電氣を極度に利用した生活文化も望ましい。能率を高める機械文化も是非發展させねばならぬ。然し之等の物質文化はどんなに力んで見てもアメリカ等の水準に及ぶことは、中々困難であらう。段々に追ひ附ければ宜いと云ふ所である。勿論物質文化で世界の水準を抜くとか、世界に獨自の貢献をすることは不可能に近い。結局日本が世界文化に貢献し得る道は、精神文化より外にはないのである。又それが一番手取り早い。而も過去の日本人の民族的性能に照しても、哲學的思考に於ては、全體として世界をリードすることは困難である。結局精神文化の中で、最も世界に誇り得る可能性のあるものは藝術と

云ふことにならう。そしてその藝術に於ては、文學や演劇の如く、言葉の制約の多いものよりも、美術や音樂による方が、遙かに容易に外國人に理解と共鳴を得るであらう。誠に音樂や美術こそ最も有力な「精神的見返り物資(?)」なのである。國家と國民の力の入れ方では、近き將來に於て日本の音樂水準は、世界最高になり得ると私は信ずる。日本人には藝術的に勝れた素質があることは過去の歴史が證している。特に、織田信長の時代に、日本に来て日本の兒童に音樂を教へたヤソ教の宣教師の報告書には、日本人の音樂的能力の高いことを傳へた部分が所々に見出されるのである。或る時代の秀才が軍人の學校を志望し、或る時代の秀才が大學の法科を志望したのは、國家や國民が軍人や政治家を優遇したからである。軍人や政治家となることが、名譽でもあり有利でもあつたからである。

このやうな國家的な獎勵が音樂に向けられるならば、必ずや第一流の秀才——而も音樂能力ある秀才が、音樂家を志すものが多くなるであらう。かくて音樂學校が狹き門になつた時、初めて日本の音樂文化〔は〕世界最高の水準に達するであらう。學問が嫌ひだから音樂でもやうか、とか、體が弱いから音樂學校にでも入れようかと云ふ時代には決して、音樂文化は高くなり得ない。今や音樂は日本にとつて有力な文化財である。世界一流の演奏家や指揮者を海外に送り出して文化日本の名を擧げることも單なる空想ではない。日本の音樂を聞くために諸外國の人々が日本を訪れる日も來ることであらう。特に日本獨特の民族的感情、日本獨特の自然的環境から生れる、新しい作品（樂譜）は、文字通り、食料その他の貴重にして高雅な見返り物資となり得ることは、決して私一人の夢ではない。更に一千年来越える日本の傳統音樂雅樂は、世界に誇る民族的記念塔であり、コトとジャミセンは、フジヤマよりも優れた日本の文化財として、日本趣味にあこがれて來朝する觀光客への、良き聽覺的な御馳走とならう。このやうに意義もあり、實用價値を持つてゐる音樂であるからには、如何に國家濟政が苦しい今日とは云へ、巡洋艦一隻の建造費にも當らないであらう藝術大學の豫算位に頭痛を病むやうな政府でもなからうと思ふけれど、輿論政治の現在に於ては、國家全體がこの點に對する確乎たる認識を持つて、當局を鞭撻しなければならぬと思ふ。茲に音樂關係者各位の支援を切望する次第である。

（「音樂藝術」第六卷第三号 昭和二十三年三月 二九～三五頁）

座談会 五十周年を迎えた東京芸大邦樂科

出席者 上木 康江（東京芸術大學教授・生田流箏曲家）

菊岡 裕晃（東京芸術大學教授・長唄三味線方）

幸 正影（東京芸術大學非常勤講師・能樂幸流小鼓方）

藤井千代賀（元東京芸術大學非常勤講師・山田流箏曲家）

司会 吉川 英史（本誌主幹）

東音時代の教え方

吉川 東音（東京音樂學校）の邦樂科が本科になつてから五十年が経ちました。昭和二十四年には東京芸大（東京芸術大學）に名称が変わりましたが、本日は五十周年にちなみまして、邦樂科がどのように変わったかということを、いろいろ面から話していただきたい。

吉川 東音（東京音樂學校）の邦樂科が本科になつてから五十年が経ちました。昭和二十四年には東京芸大（東京芸術大學）に名称が変わりましたが、本日は五十周年にちなみまして、邦樂科がどのように変わったかということを、いろいろ面から話していただきたい。

いと思つております。

藤井さんと幸さんが戦前派で、上木さんと菊岡さんが戦後派ですね。東京音楽学校の戦前と戦後で、習い方や教え方に違いがあつたでしょくか。

藤井 長唄科や生田流箏曲がどういうふうにしてらしたかよくわかりませんが、山田流箏曲に関する限りは、当時は新曲以外は整備された譜がわりとなかつたんです。歌もなにもなく、ただ糸の名前だけ書いた村田松泉という方の「箏のかがみ」があつただけです。そのころは、もちろんテープなどございませんので、耳で覚えるほかないわけです。ですから昔どおりのお稽古でした。

上木 私は昭和二十年に入学したんですが、生田流箏曲のほうは、宮城の楽譜が整備されておりました。その当時は、楽譜を見て弾くことがハイカラなことだつたんではないかと思います。樂譜で予習もしますし、初見でもどんどん弾けるようにしました。それが弊害でもあるということには気がつかず、とにかく楽譜でやりました。

吉川 生田流の宮城派では、現在も稽古の時に楽譜を見ながらやるんですね。

上木 そうです。地歌の場合、弾き歌いで歌が非常にややこしいですから、樂譜がないと一年に一、二曲しかあがらないと思うんです。ですから譜が今でもあるということは、必要だということだと思つけれども、現在は曲をあげるその都度暗記させております。今はどんどん暗記ができるようになりました。私たちはダメなんですけどね（笑）。

吉川 上木さんの時代は、暗記をさせなかつたんですか。

上木 先生たちが気がつかなかつたんでしょう。演奏会の時は一応暗譜でしたけれども、普段は譜を見てどんどんできるということを先生たちは喜んでいた時代だつたと思います。

吉川 楽譜を使うことが、現代的だという時代だつたですね。だから、どうかすると演奏会でも楽譜を出して演奏するというようなね。

藤井 ただ楽譜どおりに歌えば完全かというと、そうではないんです。

上木 芸大では、教えるについて流派は問わないでやつてているわけですから、そのことは私がいちばん悩んでいることです。

吉川 宮城道雄先生が音楽学校に就職されるころは、多少五線譜を使おうとされたんじゃないでしょうか。

上木 そのことは存じません。

藤井 昔の音楽取調掛には五線譜はありましたね。ああいうのは見せていただきましたけれども、そんなに曲数もございませんでしたし、あまり整備されてなかつたようです。そのせいか午前中の三時間の授業は、一年生から三年生まで——そのころは東音は三年制でした——一緒に授業でした。先輩のお稽古を聴いてたり、後の人々を聴いてたりしました。

吉川 かなり耳学問だつたんですね。それは本当はいいことだと

思いますね。

藤井 良い点と悪い点とあります。骨がおれますけれども、身にしみるといいますか……。

吉川 中能島欣一先生あたりになると、かなり楽譜を重要視されただいたりしていました。それは五線譜でした。

吉川 長唄では、元から数字譜を使つてましたね。戦前もそつたんでしょうか。

菊岡 そうです。長唄が昭和十一年に東音に入りました時の先生は、吉住小三郎、稀音家淨觀の両先生でしたが、すでにそのころ小十郎先生の作られた数字譜が一般的でしたので、それがそのまま学校に入りました。

菊岡 楽譜の使い方はいろいろでして、三味線のほうは、それを徹底して使つておりましたが、唄のほうは、それで覚えて来ると変な覚え方をするというので、譜はあくまで復習用で、それで予習はして来ないようという形が多かったようです。稽古の時は使わせなかつたのではないかと思います。

吉川 先生と相対している時は楽譜は出さなかつたんですか。

菊岡 そうです。現在もそうです。私も授業の時は見せません。

藤井 それは、いいことですね。

吉川 能のほうは、あまり昔から変わりはないんでしょうが、譜本を使いますか。

幸 詠のほうでは詠本を見て稽古したらしいんですが、四拍子

(能管・小鼓・大鼓・太鼓) のほうは、見本でなく暗記です。四拍子の譜もありますが、予習とか復習に使うだけで、稽古の時は全く使いません。

吉川 それは戦前戦後で違ひはないんでしょうね。

幸 ずっと昔からです。

吉川 譜の使い方は流派・種目により多少違うようですが、楽譜を使うことの善し悪しという問題もあり、利用の仕方の違いもあるようです。

学生気質の変化

吉川 ほかになにか戦前と戦後で変わったことはありますか。

藤井 男女学生の交際は、戦前と戦後で著しく違いましたね。戦前は、男女が話をしたら停学なんです。洋楽の方でしたけれども、電車と一緒に乗つてたというだけで、一週間停学させられた人がいましたよ。玄関のところの掲示板に「誰某は停学を命ず」と出るんです。

幸 私もそれを非常に感じました。私は慶應の幼稚舎から、そのままで大学まで行つちゃつたのですから、周りに女つ気が一人もなかつたんです。それが東音に入つた途端に、学生が三十六人いて、男が六人で女が三十人なんです。なんか女学校にもぐりこんだみたいで、慣れるのに一月半から二月かかりました(笑)。いろんなやかましい規則がありましたね。ずいぶんバカバカしいことを言うもので、それに反発して、女生徒と馨先生の前を二人連れで通つたことがあります。べつに、どういう処置も受けなかつたです。

藤井 よく見逃されましたね。あの先生はすごく怖かつたんですよ。

古い校舎のころ、美術学校との間に門がございまして、すぐ入つて右側の二階で、田辺尚雄先生などの合併授業があるんです。男子生徒の入口は教室のすぐそばで、女生徒の入口は遠い。ぐるっと回つてその教室へ行くと、滑りこみの時は男子生徒は間に合うんだけれども、女生徒は遅刻なんです。男子生徒の入口からちよこつと入つて見つかろうものなら大変でした。男子生徒の控え室がそのへんにあるらしいのですけれども、一遍も見たことがなかつたです。

キヤツスル（食堂）が、今みたいな立派なんじやなくて、コンクリートのたたきみたいな感じでしたが、そこにストーブがあつて、寒いから皆であたつてたんです。そうしたら翌日「男女同席にてストーブを囲むべからず 生徒課」というのが張り出されたんですね（笑）。

吉川 上木さんなんか全然知らないですか。

上木 私は戦後の解禁になつたころです（笑）。

先生の印象

吉川 皆さんのお印象に残る先生の言動や教え方をお聞きしたいと思ひます。

藤井 私どもの時は中能島先生お一方でした。皆さんご存知のとおり、非常に真面目で研究熱心な先生でした。ご自分がお小さい時、お母さまがお亡くなりになって、その後今井慶松先生や高橋栄清先生（初代）について勉強なさつたけれども、きっと、その先生方が教えてくださらなかつたことをご自分で研究して、発見された

ことがたくさんおありだつたと思うんです。それを全然惜しまないで生徒に教えてくださいました。また、理屈をきちんと教えてくださいました。私たちは頭ではわかつても、できないんですけど。そういうふうに芸惜しみということを、絶対なさらなかつた先生です。「六段」をお弾きになるときにも、いいかげんなお気持ちではなさらない方でした。毎年六月十二日の八橋忌に、池ノ端の弁天さまで先生方がかわるがわる献曲をなさいますね。十年ほど前のことです。その日の朝、用がありまして先生のお家へうかがいましたら、弁天さまで「六段」をお弾きになるというので、一所懸命さらつていらつしゃる。それも、たださらうのではなくて、三段目なんかを繰り返し繰り返しさらつていらつしゃる。「三番叟」でも「オーサエオーサエ」のところなんか、長いようですが、まあ二十いくつ弾けばいいんです。それを三十分ぐらい連続して弾いてらつしゃる。

あれだけの腕をもつておられる方なのに、いいかげんにしない。それと、亡くなるまでトップでいらしたすごさですね。横綱でも体力が衰えれば引退しますよね。邦楽は比較的高年齢まで演奏できまされども、それにしても八十歳近くになるまで第二位にはならなかつたということは、すごいことと思つて尊敬してますね。

上木 私は宮城（道雄）先生に教わりました。宮城先生は、理屈

もなにもおつしやらなかつたんです。決して叱つたりはなさらない。しかし、どんなに良くてもほめてはくださらない。終わると、「練習してらつしゃい」というだけなんです。ただ、こちらが一所懸命練習していきますと、キチツと背筋を伸ばして、ピシツと向かい合つて合奏してくださるんです。あの感激は忘れられないです

ね。その時に先生の芸というものが、本当に体に伝わってきます。

なにしろ本気で弾いてくださいますから。

宮城先生は、なんとも言えない厳しさがありますが、普段はやさしくてユーモアがあり、えこひいきもなさいませんしね。でも、やはり真面目というのが、いちばんの印象です。休講のことを借金と言つてまして、休講すると、「この間の借金を某日払う」と言つて必ず補つてくれました。ですから、私も今、借金は絶対に払わなくてはいけないと思つてやつています。

吉川 「よくできました」とは、おっしゃらないんですか。

上末 一度もないんです。私に限つてかもしませんが（笑）。

吉川 中能島先生はいかがでしたか。

藤井 「よくできました」とはおっしゃいませんでしたが、大きな声で怒鳴るとかいうことも、絶対になさいませんでした。お気に召さない時は、ただ黙つてムスッとしてらつしやいました。

吉川 昔の邦楽の師匠は、撥で叩いたりしてケガするくらいにやつた人もいたようですが、長唄のほうは、いかがでしたか。菊岡さんの先生は山田抄太郎さんでしたか。

菊岡 はい。長唄は、稀音家淨觀先生のところから、なにかする時、洒落とばしたりといふことが多いもので、教える時に必ずユーモアがあり、笑つて演奏できることがありました。とにかくポイントのつかみ方がうまいんですね。ですから楽しく稽古しました。

吉川 具体的に思い出されますか。

菊岡 例えば「京鹿子娘道成寺」の「さわらば落ちん風情なり」というところで、「唄は『落ち』のところで止まつてはいけない」

と。「『さわらば、おーチン』ではまずいから」と言うんです。最初キヨトンとしてわかんないんですけど、そのうちわかつてくると、おかしくなつてきます。

それから、もう一つの特徴は、先生ご自身がいいムードを出して、すばらしい雰囲気をつくられますので一緒になつていい気持ちで弾いてしまいますと、結果的に身につかないんですね。演奏に酔つて、弾けたような気分になる。だから、後でよほど練習しないとわからなくなります。こんな感じの考え方でしたね。

藤井 たしかに、すばらしい方と一緒にしてると、自分も上手になつたような錯覚をおこしますね。

吉岡 そうなんですね。とんでもない話で、いちばん身につかない。後で自分一人で弾くと全然できないんですね。

吉川 能ではいかがですか。

幸 東音時代は安福(春雄)先生がいちばん厳しく、先生がクシヤミをすると、稽古を待つている女生徒がピヨコツと飛び上がつたほど、空気がピリピリしていました。今は、教えるほうの年齢が若くなりましたが、そういうことはないんですけど……。

大学になってからは藤田(大五郎)先生が厳しくなり稽古前になると、生徒は一所懸命予習、復習をしていました。それは、かなり効果があつたようです。

藤井 安福先生の大鼓のレッスンがあつた帰りは、手が痛くて電車の吊革につかまないと、皆言つてましたね。それほど厳しかつたようです。

幸 今、学校で怒鳴つているのは私くらいのものです（笑）。

吉川 山田先生の叱り方は、どうでしたか。

菊岡 怒ったことはないです。山田先生は比較的京都に縁がございまして、話し方が京都風で柔らかいものですから、怒っているんでしょうね。けれども、われわれがさほどに感じないんですね（笑）。テープレコーダーができた時分でしたが、稽古を録音して、「聴いてごらん」と言つて黙つてる。ですから、怒るというより、わからせるという教え方でしたね。

現在の教え方

吉川 皆さんのが教える立場になつてから、教え方を変えたことはありますか。

上木 菊岡先生が非常に努力されたお蔭で、今はいろんな面で幅広い教え方ができるような仕組みになりました。昔に比べると、学生数も増えましたし、非常勤講師も大勢来ております。

その中に「多様式箏曲」や「関連邦楽」という講座もあります。「関連邦楽」というのは、山田流では箏曲の中の組歌を、特に別に習つたり、生田流では富山清琴先生、藤井久仁江先生、平井澄子さん、中井猛さんなどに交替でいらしていただいたりしています。例えば、中井猛さんの「弾いてみる地歌史」という講座ですが、古い地歌で楽譜になつていらないものなどを、レコードで聴く勉強でなしに、自分たちで弾いたりしながら地歌史を研究するということをしてみる。非常におもしろいと思います。

私は宮城先生のような立派な芸をもつていませんから、できるだけ具体的に教えるという方法をとっています。今までには「芸を盗む」という感じだつたと思うんですけれども、今は三味線の持ち方

でも爪の当て方でも、一人一人の体型に応じて変えます。教官自身が生徒と一緒に研究しながら、できるだけ理論的に教えるようにしています。

吉川 藤井先生は、教える立場になつてから、中能島先生とは違

うようなことをしていますか。

藤井 私はどうちかとすると旧式のほうで、お稽古で相対している時には楽譜は使いません。でないと手と目だけに集中して、耳がお留守になつてしまふんです。家で予習・復習の場合は大いに楽譜を使つてほしいんですけどね。

吉川 ずっと前は、生田流も山田流も組歌なんていうのは学校では教えなかつたですね。

藤井 そうですね。私は三年間に一曲しか習いませんでした。

上木 私も大阪の菊原（初子）先生に習いに行きましたが、今は少しずついれています。

吉川 時代が変化して、世間でも組歌などを重要視するようになつてきたようですね。

藤井 価値のないものだつたら、ただ古いというだけで捨てられてしまう。ですけれども、私どもは組歌は芸術として価値があると思います。だから、また流行ってきたんじゃないでしょうか。古典復興ですね。

吉川 藤井先生は、ご主人の岸辺（成雄）先生の影響で組歌を……。

藤井 違います。私が教育したんです（笑）。

吉川 そうですか。非常によく教育なさいまして、ご主人も組歌

を大事だと言つてますね。

長唄のほうでは、いかがですか。

菊岡 私が学生のころは、先生があまりにすばらしい方で、演奏に酔つてしまつて身につかなかつたものですから、本当に頭にきています（笑）。ですから現在は、大変乱暴なんですが、一遍のレッスンで一曲全部の旋律を覚えさせて来まして、とにかく弾かせてみる。その時、私は張り扇を持っているだけで、弾かないんです。旋律を覚えて大体の形を頭の中へ入れてきながら、一緒に弾くという教え方をしています。ですから一人に四十五分から一時間かけます。長い曲ですと、二度にわたる時もあります。

大学の本来の目的が専門家をつくることです。専門家になるには、百二十から百五十曲は常にいつでも弾けるという状態にしておかなければいけない。四年間では、限られた数しかできませんけれども、いちばん頭が冴えてる年齢ですから、覚えさせるということに集中しています。習つたものは忘れていいんです。次に覚える時は、新たに覚えるより速いですから。いわゆる実践に適するようなレッスンを考えています。

幸 能楽科では、昔どおりの伝統的な教え方です。

吉川 今日の話題には入らないけれども、菊岡さんがおっしゃつたように、四年間ではそうたくさんやれるものではない、といふことですが、つまり高校や中学すでに能楽や長唄をやつておいて、芸大で仕上げができるようになるといふと思うんですが。やはり前の段階に問題があると思いますね。そこが改善されないと……。

ほかの学科との交流

吉川 現在は他流・他派との交流をしていますか。
上木 箏では「多様式箏曲」という名称で、二年生の時だけ専門

科目のほかに、山田流の人は生田流を習い、生田流の人は山田流を習うということをやつております。ちょっと匂いをかぐだけでもという感じですが。

吉川 箏曲は少しは流派の交流があるということですが、能はいかがですか。

幸 芸大で教えてますのは観世と宝生ですけれども、交流はしていません。しかし、授業の時間に宝生や観世の謡をうたつたりして聴いてますから、多少はわかると思います。

吉川 同じ場に両流があることで、世間の観世や宝生だけやってる人とは違うということですね。

幸 でも、教えるほうは宝生は「宝生」と言つて頑張っていますね。

吉川 それはそうでしょうね。

菊岡 しかし、能のお囃子に関しては、両方関係なくいくんじゃないでしようか。「私は観世のお囃子しかやらないんだ」ということではなくて、囃子に関してはシテ方の流儀を選ばないということがあるのでないでしょうか。

幸 そうですね。

吉川 つまり、同じ人が観世の囃子も宝生の囃子もやるということですね。本来、観世や宝生で打ち方や吹き方が違う。そういうのを囃子方はどれも知つていないと勤まらないわけですね。

能の方は、長唄や箏曲の友達を作つたり、交流したりしている人

はいますか。

幸 私の知らない部分で、そういうのがあるらしいです（笑）。

藤井 昔は、邦楽科は被害者意識といいますか、白い目で見られてるんじやないかという気があつたもので、邦楽科の人同士でとても仲良くしていました。今はわりあいと長唄は長唄、お箏はお箏というふうに交流がないみたいですね。

上木 今は、部屋がたくさんあるからじゃないですか。

藤井 昔は学内演奏会でも一緒だつたんです。あんまりたくさん出ないで箏曲、長唄からそれぞれ二曲とお能というふうにしてました。お昼休みに譜を習つたりするほど仲良くしていました。

吉川 意外ですね。昔のほうが交流があつたんですね。

菊岡 僕はそうは思わない。先生たちの見ていないところで、学生同士は意外と交流しているんです。いろんな意味で知識のぶつけあいはあると思います。

幸 こちらが知らないだけで、結構やつてているようですね。

学校教育の影響

吉川 邦楽の人が学校教育を受けることがプラスになるのかならないのか、とよく議論されたことがあるんです。皆さんは、学校で邦楽教育を受けられたということについて、どうお考えですか。

上木 私はずつと学校おりますから、それに対するご返事としてはピントがはずれるかもしれません、ただ現在、中心的に演奏活動をやつている人が、ほとんど東京芸大を出ている人だということは言えますよね。

藤井 そうですね。東京音楽学校ができたころは、そんなことを

してもダメだという意見が多かつたようでしたけれども、いま五十年経つてみると、邦楽界で活躍している人に東京芸大出身者が多いですね。オペラやなんかの方と違つて、卒業してすぐに華やかな脚光を浴びるということはございませんからね。やっぱり何十年かして……。今そこに乗つてきた感じですね。

吉川 洋楽の人が若くてすぐに名前がでてくるのは、本場がヨーロッパだからなんで、邦楽の本場は日本です。本場で活躍することは大変なことなんで、邦楽は若い人が急には活躍できない。

東京芸大の邦楽科設置運動をやつているころ、マスコミやなんかでも、学校に邦楽を入れることは無理だと言われたもんです。

幸さんも、東京芸大に邦楽科を入れる入れないの大騒動があつたことをご存知ないですよね。

幸 能は、なんか後から大学に入つて來てるような気がします。

上木 一年遅れたわけです。平井澄子さんが頑張つたんです。

吉川 能楽は平井さんが東京芸大に入れたようなものなんです。そのことが、だんだんわからなくなっていますけれどもね。加藤成之先生という元の音楽学校の学部長をされた人のところへ日参したり、上野直昭学長のところへ行つたりして、能楽を大学へ入れることにずいぶん努力された。はじめは、なかなか本気で聴いてもらえたなかつたんですけども、彼女は弁舌も相当達者だし、いろいろやつてね。だから本当は能楽科の学生は平井さんの銅像を建ててもいいくらいのもんなんです。

幸 ただ現在能楽科の連中つてのは、卒業してもあまりパツとしないんですよ。

吉川 そこのところが問題でね。せっかく大学に入ったものの、うまく価値を發揮しないと……。

藤井 第一回生が観世に三人入学したんです。この間亡くなりました浅見重信さんと、武田太加志先生の弟の清水さん——事情があつておやめになりました——、山階先生の弟さんの大西信辨さん——戦死されました——の三人です。の方たちがいらしたら、卒業生もずいぶん違ったと思うんですけどね。

上木 卒業生で活躍していませんか。一唄幸政さんなんかも卒業生だし……。

藤井 金春惣右衛門さんもそうですよ。

菊岡 木原康夫君もそうです。

吉川 学校の門をくぐつたことが、どういうプラスになつていま

すか。

菊岡 自分と同じ年代の人間が一つに集まる。それも自分が今まで習つてたお師匠さんの小さい範囲でなくて、とんでもないところから集まつて来る。ということで、専門が同じであれば競争意識ももつ。自分の専門以外のものでも友達同士でのコミュニケーションがあり、知らないうちに知識が増えていくことが四年の間にがつちりできまして、卒業してもその人と交流がずっとつながつていく。その交流は、在校している四年間と、自分が四年になつた時の下級生と、一年の時上の上級生と考えますと、非常に範囲が広いんです。ですから、あの人は在校中はどうだった、ということでお話ができる。そうすると、邦楽界全般を広く見渡せる人間になれるということが、大変なプラスになりました。もし個人の家で習つて

いるだけだつたら、到底そういう関連は起きてはきません。これは重要なことです。

藤井 それは、洋楽に対しても言えるんですね。洋楽のコンサートも聴きに行けばいいんですけど、なかなかそのチャンスもないのが、学校の演奏会などは必ず聴かしてもらいましたしね。その時分に一緒にいた方たちとお友達になりますし、交流もできますし、ただ等曲だけ習つていた時より視野が広くなつたような気がします。

吉川 逆に、洋楽の人も邦楽の人との交流によつて邦楽を認識して、例えば作曲家は邦樂的な作曲もするとか、邦樂の人と一緒に演奏するとかいうこともできる。おそらく学校がなければ、世間ではなかなか洋楽と邦楽の人が交流するという気分は起こらないと思うんですね。

菊岡 数年前の例ですと、常磐津文字兵衛さんの息子さんの紫弘君が、在学中にセロと共演したりしていました。あんな楽器と合うのかなと思いましたけれども、自分で作曲して演奏してました。そういうことのできる科目を作つていますので、自由にできるんですね。後に、その時の曲を是非アメリカで演奏してくれと言われて、在校中にアメリカに行きました。「お父さんがダメと言つてる」と言つましたが、「いや、大いに行つたほうがいい」と言つて行かせたことがあります。

そういうのは学校に入つていなければ難しいことです。広い範囲での勉強は、大学へ来なければできないことですね。

吉川 皆さん方が教える立場になつた時に、教育方に学校教育的なこと、さつきから出てた理論的にやつてみるとか、そういうところ

にプラスになることがあるんでしょうね。

上木 私は教授法は芸大で習つてたピアノの滝崎鎮代子先生からずいぶん学びました。すごく上手な教え方でした。

吉川 そういうえば、洋楽の先生は自分で歌つたり弾いたりしないで、学生にやらして教えるということをよくやりますね。邦楽の先生は、皆さん自分で歌つて弾いて、その真似をさせる。

上木 やらないと、できませんね。

吉川 義太夫の人なんかそれで体をこわしている人がずいぶんいますよ。あまりに力をいれて教えるために、偉い人のところには人が集まるから、過労になつて寿命が短くなる。これは非常に困ることなんで、なんとか洋楽のように「そこは、ああやんなさい」「そこは、こうなつますよ」と、口で指導することを、もつと邦楽の人もやつたらいいのではないか。

菊岡 実は、私はそれをしています。

幸 私も同じです。

上木 それは適当にやつております。ピアノの先生だつて二台置いといで、弾いてもくださいますしね。

吉川 本日は、いろいろお聴かせいただき、ありがとうございました。

(『季刊邦楽』四九号冬 昭和六十一年十二月 七四~八二頁)